

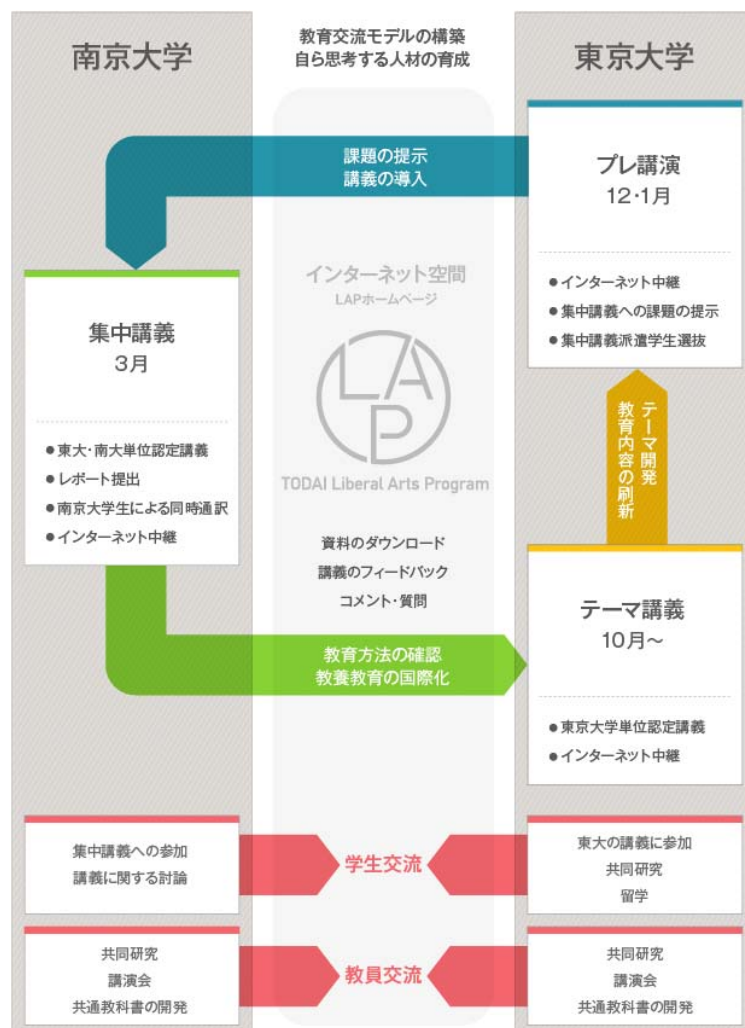
リベラルアーツ・プログラム(LAP)とは

リベラルアーツ・プログラム(LAP)は、教養教育を通して自ら思考する人材を育成することを目標に、東京と南京で、プレ講演、集中講義、テーマ講義、そして学生交流を行っています。その特徴は、1年を通し、ひとつのテーマを講義し議論することです。それによって問題に対する認識を深めると共に、学生の意見をフィードバックさせながら、より良い授業を柔軟に練り上げていきます。講義は、日本、中国或いはインターネット配信による双方向授業といった様々な空間で行い、新しい授業形態や、多様な文化の中での教養教育を実践しています。これらの試みは、大学教育や教育の国際化に新たな可能性を提示し続けています。なお、南京大での集中講義は日本語で授業を行い、これを毎回、南京大日本語科4年生が見事な同時通訳で中国語に翻訳し、より多くの南京大生が聴講しています。本報告集は、その中で2011年に行った南京集中講義「記憶と記録」の講義概要と参加した教員の意見をまとめたものです。

また、LAPは、2010年より南京大学で行う集中講義への東大生の派遣を始めました。2011年秋からは、南京大学の学生を東京に受け入れる「東京大学1週間体験プログラム」を実施し、双方の学生が国外の日常的なカリキュラムに参加し、議論する場を設けています。真剣に議論をすることを通して、相手を理解し、信頼する、新しい形の学生交流になると確信しています。

LAPは、外部資金の提供を受けて実施される東京大学教養学部の寄付プログラムです。プログラムの実施にあたり、上海で活躍されている東大卒業生の雪暁通様ほか、王穂様、山崎製パン(株)様からご寄付をいただいています。

LAPプロジェクトの構造図



2011 年南京大学集中講義「記憶と記録」

「記憶と記録」は、以前から私が一度聞いてみたいと思っていた講義テーマだった。記憶も記録も多様な観点から論じることができるので、逆に一人の研究者が論じ切ることが難しい。一方で、文系理系を問わず様々な分野で記憶も記録も考えられているのに、それを総合的に検討する機会が、専門化した学問世界にはないのである。もっと本質的に現象を捉えるべきではないか。研究を進めれば進める程、このような矛盾に突き当たる。そういう時、リベラルアーツ(教養)という考え方が、物事を論じる根本にあるのではないかと気付かされる。本来、ひとつの現象を捉えるのに、考え方の規制はないはずで、文理融合の多様な観点から考えなければ、十全な答えは出せないだろう。そこで、リレー形式で行う南京集中講義にこのテーマを提案したところ、LAP 執行委員の先生方のご協力を得て、実現させることができた。講義内容は、東大の教養教育でなければ、聞くことのできない、充実したものになっている。

「記憶」は、過去を振り返り、自らのアイデンティティを確認するために欠かせない能力だと考えられてきた。その「忘却」を防ぐため、「記憶」を補助する「記録」が発明された。先史時代、人々は岩に絵を描き、狩猟や宗教的な儀式の様子を記録した。古代ローマでは、演説を滞りなく進めるために記憶術が用いられ、数時間にわたる演説を原稿なしで行ったとされる。中国では竹簡や木簡に記録を残したが、過去の出来事は文字として保存される過程で、選別され編集されてきたと考えられる。そのように記録された過去を、私たちは歴史として読み、記憶しているのであり、記憶と記録は密接に関連してきた。そして、記録技術の発展に伴い、記録は補助としての役割を脱し、今日では記憶を創造する働きも持ち始めている。情報メディアやコンピュータの発展は、記録を量的にも質的にも大きく変容させ、膨大な過去の記録の中から、私たちに必要な情報を事前に与えてさくくれる。このような環境下では、個人の記憶さえも多様な社会メディアから構成され、一人ひとりの記憶から国民国家の在り方までが再考されている。記憶と記録の境界は変容し、曖昧化しつつある。記憶が記録を作るのか、記録が記憶を作るのか、記憶をどう捉えたらいいのかは、現在考えるべき課題となっている。

本講義では、文理双方の観点から、「記憶と記録」を検討し、両者の新しい像を立ち上げたい。バーチャル・リアリティの分野からは、科学技術によってつくられる記憶を検討し、追体験と記憶の関連を論じる。未来の記憶という発想は、記憶概念そのものを問い直すだろう。脳のないロボットや植物は記憶を持つのだろうか、植物の視点から記憶を捉えることを通して、従来の発想を一新したい。一方、脳科学と言語の分野では、記憶は、人の根本的な思考システムとして捉えられる。思想史や精神分析論の中では、記憶と心の問題が取り上げられてきた。歴史編纂の現場では、膨大な記録資料をより分け、その中から人々の意識を読み取っている。それに対し、表象文化論、ジェンダー論、オーラル・ヒストリーの分野では、社会表象や人との対話を研究対象としている。それぞれの研究分野が如何に記憶を捉えるのか、それもまた、記憶と記録を思考する重要な視点のひとつである。

あらゆる方法を用いてひとつの対象を論じることは、物事を考える根本的な態度であり、教養教育の基本理念でもある。全ての講義を聞き終わった時、新しい「記憶と記録」の形が聴講者それぞれの頭の中に描き出されれば幸いである。

Nanjing-U Intensive Lecture 2011 "Memory and Record"

"Memory and Record" is a lecture topic that I have been curious to hear for some time. Both memory and record can be seen from many different angles, making it difficult for a scholar to discuss them. At the same time, even while memory and record each receive attention from various academic disciplines across the Humanities and Sciences, in our specialized academic world we do not have opportunities to examine them in a wholistic manner. Should we not attend more to the core essence of each phenomenon? we are confronted by this question as we go deeper into our research. At such moments, we come to a realization that liberal arts may perhaps be at the root of the act of theorizing and discussion. To begin with, there is no fixed rule on what approach to be used when we try to understand a phenomenon. It would be impossible to reach a satisfactory answer were we not to appeal to diverse viewpoints across the Humanities and Sciences. This is why I proposed this theme for the omnibus Nanjing Intensive Lecture Series, which became a reality with assistance from the organizing members of LAP on our faculty. The Lectures are fulfilling in their content and offer what can only be heard in the liberal arts program at the University of Tokyo.

"Memory" has been thought of as an essential faculty to reflect on one's past and have a sense of her/his own identity. "Record" was invented as a "Memory" aid lest we "forget" it. In ancient Rome, it is said that speakers gave speeches for hours without looking at the scripts, and there were memory techniques for successfully accomplishing the feat. In China, documentations were made on pieces of wood and bamboo, and it is now assumed that events of the past were subject to editing and selection in the process of making them into written records. With the evolution of technologies for record, record has now grown out of their initial role as an aid into taking an emerging role of creating memory. Under such circumstance, even personal memories are shaped by a variety of social media, and many things -- from personal memories to how nation states exist today -- have gradually come under closer scrutiny. Boundaries of memory and record have been reshaped and, increasingly, blurred. A present challenge for us to consider how we should understand memory and whether memory shapes record or rather record shapes memory.

In this Intensive Lecture, we hope to paint a refreshing picture of "Memory and Record" by looking at them from the perspectives of both the Humanities and Sciences. In the field of virtual reality, we will examine memories made with scientific technologies and discuss the relation between vicarious experience and Memory. The idea of memories of the future will re-question the very notion of memory itself. Do robots and plants that have no brain have memory? By capturing memory from the perspective of plants, we hope to renew the traditional idea of memory. On the other hand, in the field of language and brain science, memory is perceived as the fundamental systems of thinking for humans. History of Thought and Psychoanalysis have tackled the question of memory and human mind. Historiographers sift through the vast archive of historical record and interpret the consciousness of people that emerge from them. By contrast, for Theory of Culture and Representation, Gender Theory, and Oral History, their study are dialogues with people and representations in society. How does each discipline capture memories? That is also one important way of thinking about memory and record.

When we think about something, it is fundamental that we discuss one thing by utilizing every possible method. That attitude also forms a basic principle of liberal arts education. It is our hope that after hearing all the Lectures each student is left with a new concept of "Memory and Record" in her/his mind.

目次

リベラルアーツ・プログラム(LAP)とは	1
2011 年南京大学集中講義「記憶と記録」	2
Nanjing-U Intensive Lecture 2011 "Memory and Record"	3
講師紹介	6
プレ講演「記憶と記録」	8
集中講義「記憶と記録」講義紹介	9～58

2011/02/28・2011/03/01	http://www.lap.c.u-tokyo.ac.jp/ja/nanjing_lectures/memory_and_documents/110228/
石井 弓	オーラルヒストリーから考える記憶と記録
石井 弓	从口述历史角度探索记忆与记录
ISHII Yumi	Thinking about Memories and Record from Oral History
石井先生インタビュー	9
	14

2011/03/03・2011/03/04	http://www.lap.c.u-tokyo.ac.jp/ja/nanjing_lectures/memory_and_documents/110304/
飯野 由里子	レズビアンである〈わたしたち〉のストーリー
	——記録から抜け落ちる記憶、形成される記憶と読みの絆
飯野 由里子	女同性恋的“我们”故事——记录丢失的记忆、编而形成的记忆和读解的纽带
IINO Yuriko	The Stories of «Us» Lesbians – Memories Eluding Record, Ties between Formed Memories and Reading .
飯野先生インタビュー	16
	20

2011/03/07・2011/03/08	http://www.lap.c.u-tokyo.ac.jp/ja/nanjing_lectures/memory_and_documents/110307/
渡邊 正男	中世史料からみる記憶と記録
渡边 正男	中世纪历史档案所提示的记忆与记录
WATANABE Masao	Memories and Record Seen from Medieval Documents
渡邊先生インタビュー	22
	28

2011/03/10・2011/03/11	http://www.lap.c.u-tokyo.ac.jp/ja/nanjing_lectures/memory_and_documents/110310/
廣瀬 通孝	情報技術と時間感覚
广瀬 通孝	信息技术和时间的感觉
HIROSE Michitaka	Information Technology and the Sense of Time
廣瀬先生インタビュー	31
	35

2011/03/14・2011/03/15 http://www.lap.c.u-tokyo.ac.jp/ja/nanjing_lectures/memory_and_documents/110314/

渡邊 雄一郎	植物が示してくれる記憶、記録	
渡邊 雄一郎	植物所显示的的记忆与纪录	
WATANABE Yuichiro	Memories and Record Shown by Plants	37
渡邊先生インタビュー		40
「記憶と記録 東京大学×南京大学同時開催 集中講義に参画して」(教養学部報第 540 号 (2011.07.06)より転載)		42

2011/03/17・2011/03/18 http://www.lap.c.u-tokyo.ac.jp/ja/nanjing_lectures/memory_and_documents/110317/

酒井 邦嘉	脳から見た人間の言語の記憶と記録	
酒井 邦嘉	脑科学怎样分析人的语言和记忆与记录	
SAKAI Kuniyoshi	Linguistic Memories and Record of Humans Seen from Brain	43
酒井先生インタビュー		46

2011/03/21・2011/03/22 http://www.lap.c.u-tokyo.ac.jp/ja/nanjing_lectures/memory_and_documents/110321/

石原 孝二	記憶と人格(自己同一性)	
石原 孝二	记忆和人格——人的认同	
ISHIHARA Kohji	Memories and Personality (Identity)	49
石原先生インタビュー		52

2011/03/24・2011/03/25 http://www.lap.c.u-tokyo.ac.jp/ja/nanjing_lectures/memory_and_documents/110324/

高橋 哲哉	記憶のエチカ	
高橋 哲哉	记忆的伦理学	
TAKAHASHI Tetsuya	Ethics of Memories	54
高橋先生インタビュー		57

特設講演	59
編集後記	60

講師紹介

第1講

石井 弓

ISHII Yumi

教養教育高度化機構特任講師



専門は中国地域研究及びオーラル・ヒストリー。2007 年東京大学総合文化研究科博士課程単位所得退学後、2010 年 3 月まで東京大学 EALAI 特任助教。

2010 年 4 月より東京大学総合

文化研究科特任講師。2010 年 6 月博士号取得(テーマ:『記憶としての日中戦争』)。2009 年に第六回太田勝洪記念中国学術研究賞受賞。現在は中国山西省での フィールド・ワークを続けつつ、北京でも調査を始めている。

第2講

飯野 由里子

IINO Yuriko

先端科学技術研究センター特任助教



ワシントン州立大学社会学部卒業(スマ・コム・ラウデ)。城西国際大学大学院人文科学研究科比較文化専攻(比較ジェンダー論分野)にて博士号(比較文化)を取得。主な研究分野はジェンダー／セクシュアリティ研究。著書に『レズビアンである(わたしたち)のストーリー』(生活書院、2008 年)がある。

第3講

渡邊 正男

WATANABE Masao

史料編纂所准教授



専門は日本法制史。法・制度および権利の関係のあり方が歴史的にどのように変化していったかを、史料に基づいて、具体的に明らかにしたいと考えています。

現在は、14 世紀の社会秩序の

構造変化において、在野の法知識・法技能を有する者達が果たした役割に関心があります。

第4講

廣瀬 通孝

HIROSE Michitaka

大学院情報理工学系研究科教授



1954 年鎌倉生まれ。1982 年東京大学大学院工学系研究科博士課程修了、工学博士。東京大学工学部講師、助教授を経て、1999 年先端科学技術研究センター教授、2006 年より大学

院情報理工学系研究科教授。専門はシステム工学、ヒューマン・インタフェース、バーチャル・リアリティ。著書に『バーチャル・リアリティ』(産業図書)、『空間型コンピュータ』(岩波書店)、『ヒトと機械のあいだ』(岩波書店)など多数。

第5 講

渡邊 雄一郎

WATANABE Yuichiro

大学院総合文化研究科教授



植物を対象にして、生物が地球環境の中で生きていること、生き延びてきた仕組みを、遺伝子やRNA 分子に注目しながら研究している。なぜ木は大きくなるのかといった目的論ではなく、どのよ

うにして大きくなることができるのかという機構に興味があります。

第6 講

酒井 邦嘉

SAKAI Kuniyoshi

大学院総合文化研究科准教授



1992 年、東京大学大学院理学系研究科博士課程修了後、東京大学医学部第一生理学教室助手。1995 年、ハーバード大学医学部リサーチフェロー、1996 年、マサチューセッツ工科大学

客員研究員を経て、1997 年より現職(助教授・准教授)。2002 年に第 56 回毎日出版文化賞(中公新書『言語の脳科学』)、2005 年に第 19 回塚原伸晃記念賞を受賞。研究分野は、言語脳科学および脳機能イメージング。言語を通して人間の本質を科学的に明らかにしようとしている。

第7 講

石原 孝二

ISHIHARA Kohji

大学院総合文化研究科准教授



哲学・倫理学(特に科学技術哲学・科学技術倫理)を専門とする。最近では、精神障害・発達障害に関する科学哲学やロボエシックス(ロボットの倫理)などについて研究を進めている。

第8 講

高橋 哲哉

TAKAHASHI Tetsuya

大学院総合文化研究科教授



1956 年生まれ。専攻は哲学。近年の研究テーマは、共同体や宗教における犠牲(sacrifice)の論理の批判的検証、ジャック・デリダの脱構築(deconstruction)思想の再検討など。大学では、社会哲学、倫理学、表象文化論、人間の安全保障などの科目を担当。中国語訳著書に、『デリダ 脱構築』、『靖国問題』、『国家と犠牲』、『戦後責任論』。

中国語訳著書に、『デリダ 脱構築』、『靖国問題』、『国家と犠牲』、『戦後責任論』。

プレ講演

原 和之

HARA Kazuyuki

大学院総合文化研究科准教授



東京大学から同大学院で地域文化研究(フランス)。パリ第一大学、パリ第四大学で哲学を修める。パリ第四大学博士(哲学史)。電気通信大学 専任講師・助 教授を経て、2004 年4月

より東京大学大学院総合文化研究科助教授(准教授)(地域文化研究専攻)。著書に『ラカン 哲学空間のエクソダス』(講談社)など。

プレ講演(東大→南大中継)

2010 年 12 月 22 日(水)

プレ講演「記憶と記録」

2010 年 12 月 22 日、南京大学集中講義「記憶と記録」に先立ち、駒場キャンパス情報教育棟遠隔講義室にて、プレ講演「記憶と記録」が開講されました。

プレ講演とは、3 月に行う南京大学集中講義のイベントで、テレビ会議システムを用いて東京大学から南京大学へ中継し、両大学でリアルタイムに聴講できる講義です。「記憶と記録」というテーマの中から、核となる文理の講義を選び、文系は原和之先生、理系は渡邊雄一郎先生に論じて頂き、東京大と南京大学の学生で議論を行いました。また、プレ講演に参加し、レポートを提出した東京大学学生の中から、3 月に南京大学で行う集中講義「記憶と記録」への派遣者を選抜しました。



原 和之 「忘却のテクノロジー——記憶と記録のあいだ」



「記憶と記録」がどのようなものかについて、われわれは日常的な了解を持っている。しかしその了解は、ある種の通念によって規定されている可能性もあり、そのような通念が形成された時代と異なる時代のことを考えた際に、問題点をとらえきれない可能性がある。このような問題意識を出発点として、今回のプレ講演では、記憶と記録の関係として想定されるそうした通念を、1.記憶、すなわち過去にあった何かを覚えていること・思い出すことができるということは必要である 2.人間の記憶能力は完全ではない 3.従って記憶を補完する拠り所(記録)が必要となる という3つの命題の形確認した上で、それを相対化する視点を考えていきたい。

渡邊 雄一郎 「植物がしめしてくれる記憶、記録」



生命科学という専門から、「記憶と記録」ということについてお話をしてみたい。原先生の「記憶と記録」に関する講義とはだいぶ違うところがあるはずだが、何が記憶で何が記録なのかということを考察する上での材料として頂きたい。今回のプレ講演では、植物が示す情報を記録と考え、植物と人間が生きている社会との関係も意識しつつ、生命科学のポイントを話したい。生物が生まれて 38 億年経っているが、その積み重ねの過程を記録として考えることができるだろう。それに対比すると、人間の歴史はまだ短い。その中で植物は大きく寄与している。この流れの中で、広く記憶と記録をとらえていきたい。

オーラル・ヒストリーから考える記憶と記録

石井 弓

講義概要



本講義においては、社会の中で分有されていく記憶について考える。具体的には中国山西省で行っているフィールド・ワークをもとに抗日戦争の記憶について取り上げ、戦後生まれの若者たちが、経験していない過去の出来事を自らの記憶として分有していく過程を考えていく。フィールド調査から記憶をどう捉えるのか私の研究過程を紹介することで、受講者の皆さんにも他者の記憶を理解するとはどういうことなのか考えてもらいたい。

記憶の分有：集団と記憶

記憶は「私」だけのものなのだろうか。記憶は個人の生を越えて受け継がれていくものである。この自らが経験していない記憶、個人を越えた記憶が共有されることで、一つのまとまった社会集団が形成される。例えば、十字軍の遠征に対する記憶を考えてみよう。これは 11 世紀から 13 世紀にかけての出来事であるにも関わらず、十字軍の行った暴力に対する記憶が現代の社会においても、キリスト教とイスラム教の間に深刻な溝を作り出しており、ローマ教皇のヨハネ・パウロ 2 世は、2000 年のミサにおいてムスリム側への謝罪を行っている。このように、個人を越えた過去についての記憶は、時として感情的な反応を引き起こすことがある。

記憶は、人間の生きる時間を越えて継承される。そして各集団において分有された記憶は、自己にとって経験していない過去についての記憶であるにも関わらず、現在を生きる我々の感情を左右し得る。では、特定の社会においてどのような記憶が分有されているのか、さらに集団の形成において特定の記憶がどのように機能しているのか、これを認知し分析するにはどうしたらよいのか。ここではオーラル・ヒストリーの手法を使い、中国の人々の戦争記憶を事例として考えていきたい。オーラル・ヒストリーとは、聞き取り調査を中核として、特定の集団の意識を対



象とする手法である。ここでは広い地域と多様な集団への聞き取りを通じて、一人ひとりの意識と集団の関係性が考察の対象となる。また、話される内容の真偽を問題とするのではなく、その人がなぜそのように話すのかが分析の対象となる。

戦争の記憶は、これを経験したことがない戦後世代の人々にも共有されている。北京大学の戴錦華は「戦後の平和な時代に生まれたにも拘わらず、私にとっての日中戦争はずっと激烈な身体体験を伴うもの」と語っている。戦争記憶について、なぜ人々がそのように記憶するのかを、社会と個人の関係性のなかで考える必要がある。しかし、戦後世代の戦争認識や感情は、日本と中国では大きく異なる。日本人である私は、彼らの戦争記憶をどのように理解すればよいのか。ここでは中国の戦後世代の戦争記憶について、記憶の分有という方向から考えてみたい。では、どのようにして分有された記憶を掴み出すのか。個々人によって語られる戦争の記憶は様々であり、話された内容をそのまま記憶と捉えることもできない。ここで私が手掛かりとしたのは、①村人たちが共通して見る戦争の夢(視覚イメージ)②村人たちの間で歌い継がれる「順口溜」、の二つである。



共通する戦争の夢

聞き取り調査を行う中で、村人たちが見る戦争の夢に共通性が見られることが分かった。戦争の夢について触れた32名のうち、23名が同じ内容の夢を見ていることが分かった。いずれも日本軍に追われて逃げ、逃げ切れなくなるところで目が覚めるものであった。さらに、目覚めた時には全身に冷や汗をかき、体が震えていることでも共通していた。興味深いのは、戦後生まれの村人もこの夢を見ていることである。例えば、1945年生まれの人、戦争が終結した時に2歳であるにもかかわらず、戦争の夢を見ている。また、1950年生まれの人、テレビを見た後に戦争の夢を見たと言っていた。これに対して、1960年以降に生まれた人々はこの夢を見ないことが分かった。戦争の記憶は、夢という形式をとって、どのようにして戦後世代に継承されていったのだろうか。

私が着目したのは、戦後に度々上映された戦争映画である。1949年から1979年までの間、合計で1105本の抗日戦争を題材とした映画が製作され、露天映画として巡回上映が行われた。戦争映画は村人の中で人気が高く、繰り返し上映が行われた。映画上映の際には、数少ない娯楽を求めて村人のほとんどが集まり、過去を知る老人の体験談を聞きながら映画を見ていたのである。両親や村の老人の語りを聞いて、ぼんやりと理解していた戦争の記憶が、抗日戦争の映画の視聴を通じて明確な視覚イメージが与えられたのではないだろうか。特に老人たちの語りにおいて、「無人区」の経験が聞き手に大きなインパクトを与えていたことが類推できる。これは1941年に出された日本軍の布告によって、孟県の166の村が立ち入り禁止になった事態を指す。山の中に隠れ住んだ村人たちは、日本軍の目を盗んで一時的に村へと戻ることを繰り返していた。これは見つかった場合射殺を免れえず、命がけの行為であった。

戦後生まれの村人たちに、戦争の記憶が分有されていった過程をまとめてみよう。まずは「無人区」を経験した老人の語り、漠然とした日本軍のイメージと恐怖の感情を若者や子供へと与えた。さらに、抗日戦争をテーマとした露天映画の上映を通じて、戦後生まれの村人たちは、村の過去をよりリアルに追体験し、鮮烈な視覚イメージが付与されるに至った。また、1952年から83年にかけて行われた集団農業が、若者と老人が接触する機会を提供し、記憶の分有に寄与した。1960年代以降の村人たちは集団農業に参加しなかったため、戦争の記憶や夢を共有する場が存在しなかったと言える。

趙家莊惨案と順口溜

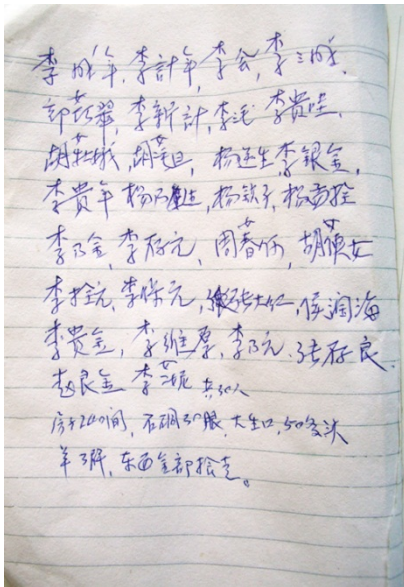
2日目の講義では趙家莊惨案という一つの事件に着目し、

過去の出来事がいかに語られたのかを論じる。また、村の外部で語られた歴史的記録としての趙家莊惨案と、村人たちによって共有される記憶としての趙家莊惨案のズレについて考えてみたい。まずは史料として記録された趙家莊惨案を見てみたい。趙家莊惨案は1944年、抗日戦争において共産党の拠点となっていた趙家莊に対して、日本軍が侵攻し村人を虐殺した事件である。記録された史料においては、何人が殺されどの程度の被害を受けたのかということが数値化を通じて認識され、日本対中国という枠組みの中で、抗日戦争の出来事の一つとして扱われている。記録としての趙家莊惨案においては、第三者の目線から数値化が行われ、交換可能な出来事として語られることで、村人たちにとってこの出来事が何を意味していたのか、という当事者の視点が欠如している。

では外来者である私は、どうしたら村の中の語りや記憶の世界を知ることができるだろうか。ここで私が手掛かりとしたのは、「順口溜」という歌である。順口溜は方言を用い、ある出来事とそれに対する気持ちを歌うものである。これは「聴く」ものではなく、村人が自らの感情を吐露するために歌われ、歌に共感したものが次の歌い手となる。さらに、村人たちが共感できる内容へと少しずつ歌い直されながら伝えられていく。いわば村内での感情の伴った記憶の伝達手段なのである。趙家莊惨案を歌った順口溜を調べれば、村人たちの記憶に近づくことができるのではないかな。

趙家莊惨案を歌った順口溜は、1947年の土地改革の際、元抗日村長である劉三和が作ったことが知られている。この歌は時代の流れの中で忘却と想起を繰り返してきた。特に90年代以降、過疎化で村の人口が減少してからは、その姿が惨案直後の村の様子と重ね合わされ、順口溜がよく歌われるようになった。この歌には、二人の興味深い人物が登場する。まずは、笑い話として挙げられる胡華念のエピソードを見てみよう。彼は歩哨をさぼったことで、日本軍がやってきたことを見逃してしまう。胡華念は文革時に批判されたこともあったが、それ以降はむしろお調子者で憎めない存在として語られるようになる。第2の人物は、村人でありながら日本軍の侵攻に協力した李新年である。彼は日本軍の協力者でありながら、歌の中では批判の対象とはならなかった。さらに李新年の母は、村人を助けた人格者として語られている。国家の歴史においては裏切り者ではない李新年は、なぜ歌においては弁護の対象となっているのか。これには、村のコミュニティを維持するため、嫌がる李新年を抗日戦争の兵として供出したという背景が存在していた。李

新年の裏切りは、兵士として供出されたことへの村に対する報復として理解されていたのである。



資料 1: 趙家莊のお爺さんが書きつけた、
惨案で亡くなった一人ひとりの名前

このように順口溜を通じて共有された村人たちの記憶は、「裏切りもの vs. 善良な村人」という国家の歴史に回収されない村の過去を伝えていた。改革開放以後、経済的に没落していた趙家莊の人々は、その原因を趙家莊惨案に見ている。さらにこの記憶の共有を通じて、

村人の間のつながりを回復させようとしたのである。

——— | 講義中の質疑応答 | ———

Q. 1960 年という接点がとても面白いと思います。夢に関してまとめた表について、もう少し詳しく説明して下さい。また、集団農業というつながりでの接点について、例えば私(編注:南

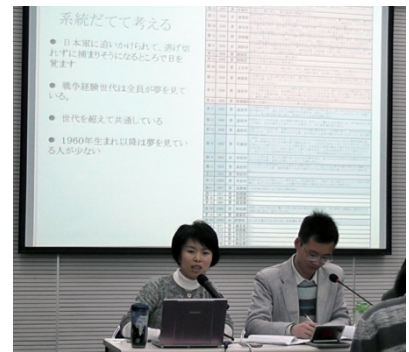


京大学日本語科の王先生)はその世代以後の生まれですが、母から、子供時代に日本軍に追われて逃げる夢を語られています。集団農業という経験はありませ

んが、こういう形で記憶の分有を受けたということになるのでしょうか。

A. 夢に関する一覧表の下部で空欄になっているのは、戦争の夢を見たことがあるかと聞いたときに、見たことが無いと言った人です。1960 年代以降空白になっているのが多いところから、60 年代以降は夢を見ている人が少ないということがわかります。また、夢を見た人の中で、戦争を経験した人は桃色に、戦後生まれの人は灰色にそれぞれ表を塗り分けてあります。こうすることで、戦争を経験していないのに、それを夢に見るということに注目してみた結果、戦後生まれでも 60 年という境以前はそういう夢を見ている人が多く、それ以後は少ないということがわかります。集団農業と夢・記憶の関係については、環境からの側面を考えたもので、集団農業に参加していた人たちは、それ以外の人たちよりも、より強く記憶を共有したということは言えますが、もちろんそれ以前に、もともと村の中で記憶を共有する状況があったことは考えられます。ですので王先生のように、集団農業には参加していなくても記憶を共有するということは基本的にあり得ます。

(文責:若澤)



講義 BBS より

◆ 南京大学学生

2011/03/02 21:28

まず、やはり28日に王先生が提出した質問についてです。先生が翌日に補足して説明してくださいましたが、まだ分からないところがあります。それは、1960年以降生まれた人々の中に抗日战争の夢を見た人もいるということです。南さんを例にして、その原因は南さんが趙家荘事件が起こった趙家荘で生まれたからと説明してくださいました。しかし、南さんの欄の上の(名前がはっきり見えないですけど)その人も趙家荘の村民じゃないですか。では、どうして同じく趙家荘生まれなのに、その人が夢を見なかったのかという質問です。

もう一つは、先生の研究方法としてのフィールド・ワークに対して、すごい興味があります。ちょっと変な話ですけども、先生が日本人として、日本軍が侵略したことのある趙家荘でインタビューをしたとき、多分協力してくれなかったときもあるだろうと思います。そのときは、先生はどう処理しましたか。それについて、ちょっと教えていただけませんか。

◇ 石井先生

2011/03/04 02:11

まず一つ目の質問に対する答えですが、次のようなことが言えます。

1) 趙家荘など虐殺事件の起こった場所では、この夢を見る若者は多いのですが、必ずしも全員とは限りません。特に1960年以降に生まれた人は趙家荘でもあまり夢を見ていないといえます。

2) インタビューに答えた若者たちは、たとえ夢を見ていたとしても、必ずしも「夢を見た」と答えるわけではありません。自分が毎日見る夢をはっきり覚えている人は少ないと思います。「夢を見た」とははっきり答える人は、かなり長い間その夢に悩まされたり、特に何度も見ている人たちです。その意味でも、これだけ多くの人が同じ夢を見てると「答える」ことは、戦争に対する強い記憶の反応であると考えられると思います。

3) 記憶を共有する範囲は、村だけに限られません。趙家荘の村人であっても、自分の家族の中に被害者がいない家もあります。やはり家族が被害にあっているかどうかで、戦争に対する感情は大きく違います。記憶は村などのまとまった集団の中で分有されますが、村の中にも家族、男性のおしゃべりグループ、女性のおしゃべりのグループなど、さまざまな集団が交錯しており、その中でそれぞれ少しずつ異なる記憶が分有されているのだと考えられます。

以上のような理由から、趙家荘の村人であっても、夢を見ない人がいることが説明できると思います。

二つ目の質問にお答えします。インタビューを始める前、きっと多くの人が日本人の私に対して批判的だろうと考えていました。実際は多くの人が協力的で歓迎してくれたのですが、中には私に怒りをぶつける人や、はっきり話してくれない人もいました。だから、初めの頃、村に入る前には、おなかが痛くなりました。でも、インタビューを続けていく中で、反発的な態度をとる人こそ、感情記憶を持っているのだと気付くようになりました。だからできる限り何度も訪問をして聞き取るよう努力をしました。その中で聞き取ることができた内容は、私が戦争の問題を考える際に最も貴重な語りになったと思います。最後まで話してくれない人については、なぜ話してくれないのかを、周囲の人の語りから考えるようにしました。記憶を考える上で、「沈黙」も大変重要な要素だと思ったからです。日本とは全く異なる社会に入って、日本人として聞き取りをすることは、他者を理解する貴重な経験となりました。客観的にデータを集めるだけでなく、語り手に触れ、その人が生きてきた環境に触れることで、コミュニティ内部での記憶の受け渡しが初めて見えてきたと思います。



◆ 南京大学学生

2011/03/03 17:50

記録と記憶の関係はいったいなんですか。記録は記憶を消すために作りましたのか。でも、記録と言うもの自身はあるものを忘れないように作ったのではありませんか。

◇ 石井先生

2011/03/07 01:33

記録は確かに人間がものごとを忘れないようにするひとつの手段だと言えます。それは記憶を外在化させることで、後に参照できる形で過去を保存するものです。しかし、外在化されることで、出来事が記憶から抜け落ちてしまう(忘却される)傾向があるのも事実です。

例えば私が調査をしている農村の人々は実に多くのことを記憶しています。彼らはメモをとるという習慣がなく、出来事の保存を記憶に頼っているためだと考えられます。また、「〇〇の過去は歴史になってしまった」と言われることがあります。

それはある出来事が人々の記憶から抜け落ち、記録の中にしか残っていない状態を表現するものだと思います。さらに、過去の出来事は歴史に編纂されることで、何らかの解釈が加えられたり、編集が容易になるため、記憶の形を変えてしまうこともあります。

以上のような理由から、私は「過去は記録されることによって記憶から抜け落ちる」という表現をしました。しかし、記録された過去は、それが忘却されてから何年も経ってから再発見され、想起・再記憶化されることがあります。このため、記憶と記録は相互に参照しあう鏡のような関係にあると考えられます。

◆ 南京大学学生

2011/03/05 23:51

授業の内容について、主に二つの感想を述べたいと思います。まずは、趙家荘惨案を記憶されるのは、村落というコミュニティを存続させるため、また、個々の村人に分有されることによって精神的紐帯としての役割を果たしていると、先生がおっしゃったのです。けれども、この惨案は 1970 年の「憶苦思甜」運動で宣伝され、国家の記憶としても記録され歴史に回収されました。そうすると、この事件は、新中国というコミュニティを作る、また国民をまとめることにも手伝っているのでしょうか。おそらく、これは、国家の権力が個人の身に染み付いた事例と考えてもよいでしょう。もしそうでしたら、現在趙家荘の村人の記憶には、当時の政治権力が介入した部分もあると推測してもよろしいでしょうか。

そして、先生が授業の最後に「理解」について自分の見解を述べましたね。先生のご見解は、私にまさにヘーゲルの「現実的なものはすべて合理的であり、合理的なものはすべて現実的である」という命題に聞こえてきます。私の考えでは、「理解」というものは、相手になりきって、相手の感情や思想をすべて身を持って感じるのではなく、相手の感情や思想が形成されるのは、あくまでも相手のいる文脈でそれなりの論理に沿った結果にすぎないことをさへ理解できれば、「理解」ということが成立できます。中日両国間は現在、歴史問題をめぐって様々な葛藤や不理解があったのも、「理解」を達成させられないことが原因でしょう。先生の努力は、まさに相手の文脈において、相手を理解する糸口、また自国と相手の国の歴史認識の差異を理解する糸口を探し、その奥ところにある「理解」を復元する努力であると、私が考えているのです。

◇ 石井先生

2011/05/12 00:07

まず、「憶苦思甜」と記憶の関係について。趙家荘では、確かに 1970 年代に周辺の村人たちを集めて「憶苦思甜」大会が何度も開かれました。「過去の苦しみを思い、現在の幸せをかみしめる」というこの政治運動を通して、趙家荘惨案はこの地域一帯に知られるようになりましたし、趙家荘村の若者たちが過去を知るきっかけにもなりました。これはある意味で記憶に対する国家権力の介入だったと言えますが、そこで形成された村人の記憶は、単に「歴史に回収された記憶」とばかりは言いきれないと思います。むしろ、この介入も含めて個別の記憶が形成されてきたと考える必要があるでしょう。授業でも少しお話ししたように、「憶苦思甜」では、惨案で日本に加担し村を裏切った李新年が「漢奸」として地域一帯に広く知れ渡りました。しかし、趙家荘の村の中では逆に、「李は兵士になることを強要した村を恨み、村へ復讐したのであり、彼こそが犠牲者であった」という語りが広がりました。村の中では、「憶苦思甜」をきっかけにして、国家の語りとは異なる過去が語られるようになったのです。私はそこに、村落コミュニティの意思が働いていると考えます。国家のすべての政策が計画通りの結果を得られるわけではありません。なぜ、村人たちは李新年の「復讐」という辛い過去を語り継ぐのか、それを考えることこそが、記憶の問題と向き合うことであると思います。インタビューの中から分かってきたことは、李の復讐を忘却してしまうと、李の徴兵を巡って村の中で起こった様々な出来事もまた忘却され、過去が単純な歴史に回収されてしまうということです。私たち一人ひとり、自らの経てきた過去によって自己を認識します。同様に、村では過去を共有することによって、村人の一員となり、コミュニティを維持していると考えられます。過疎化によって趙家荘における戦争の語りが増えたこともまた、コミュニティ保存の意思と過去の語りのつながりを示していると言えるでしょう。

また、もうひとつ考えたいのは、山西省の村の中で、一人の若者の犠牲と復讐が語り継がれることは、高橋先生の講義で議論された「ルサンチマン」をどう扱うかと繋がる問題だと思います。みなさんはこれをどう捉えるのか、今度は私が意見を聞きたいところです。

◆ 南京大学学生

2011/03/07 20:54

石井先生の言った通り、記録は記憶を忘れるためです。初めは、私はちょっと意味が分からなくて、忘れるとはなぜだか。それをいろいろ考えて、少し分かりました。昔の物事を客観的に記録して、その後の人々は本から見ると、建物から見ると、歴史を客観的に考えることが可能性です。歴史の悲しみ、暗さは人の心に深刻な感じを残します。そのあと、人々は平和を期待して、今日の生活にもだんだん感謝している気持ちがするようになります。昔の辛い記憶もだんだん頭の中に消えてしまいます。人々は前に向けて、明日の素晴らしさに進むべきだと思います。そう考えれば、日中のも親しく行くべきです。

石井先生インタビュー

若澤 石井先生はこの5年間、運営スタッフとして集中講義のプロジェクトに携わってきました。ご自身が講義をされるのは今回が初めてだったと思うのですが、今年の集中講義はいかがでしたか？ 石井先生はトップバッターで講義でしたね。

石井 私はこれまで補佐役として講義に参加していました。今年から講義を担当することになり、南京大の学生さんたちの間で違和感がないか心配でした。教壇に立つととても緊張しました。実は今日のインタビューも緊張しています。普段インタビューすることはあっても、インタビューされることはないのです。

若澤 授業を担当して、何か発見などありましたか？



石井 逐次通訳を介した講義というのが、新鮮な体験でした。逐次通訳はスピードや間の入れ方など、教員と通訳の間のコミュニケーションが求められます。

講義を通じて、教員と学生の間でコミュニケーションが生まれるだけではなく、講義をしている私と通訳の方の間でコミュニケーションが発生します。そして、私と通訳の方の間のやりとりを、聞き手である学生さんたちに見せることができたのは、学生さんたちにとっても私にとっても面白い経験だったのではないかなと。少なくとも駒場では味わえない経験だと思います。

**中国人の戦争記憶について、
日本人の私が語っているという事態を、
学生がどう捉えていたのかも聞いてみたかった**

若澤 学生さんたちの反応はいかがでしたか？ 中国人の学生を相手に日中戦争の記憶を語るという、他のテーマにはない困難さがあったと思うのですが。私も講義に参加しましたが、質疑応答が盛り上がったことが印象に残っています。

石井 授業に対するリアクションについて言えば、南京大学の学生さんたちは年々おとなしくなっている気がします。私の講義については、中国人の戦争記憶について、日本人の私が語っているという事態を、学生さんたちがどう捉えていたのかも聞いてみたかったですね。

若澤 HPには多くの意見や質問が寄せられていましたね。

石井 現地で学生さんたちとお話する機会は多かったのですが、授業に関してはなかなか意見を聞くことができませんでした。そういった点でHPでのやり取りは、彼らや彼女たちが何を考えているのか知るきっかけになったと思っています。

2011年6月8日 駒場キャンパス9号館LAPオフィス

**もっと感情的なものをぶつけ合ってもよかった
客観的になることは、
どこかで自分の感情を押し込めること**

若澤 授業を通じて一番伝えたかったことは何ですか？

石井 まずは「農村」という場について知ってもらおうことです。中国人の学生さんたちでも、自分の国のことで知らないことってあると思うんです。農村という空間は、都市とは切り離された世界ですし、私が聞き取り調査をしているような村では、大学に進学する若者はほとんどいません。都市で生活している南京大学の学生さんたちに、少しでもそういった場について知る機会を持って欲しいと考えています。

若澤 日本人である石井先生が、中国人の学生に対して、戦争記憶について語るという立場をどのように感じていますか？

石井 日本人である私がこうした研究をしているということも、授業を通じて伝えたいことでした。そして、日本人である私が日中戦争の記憶を研究しているということについて、中国人の学生さんたちはどのように感じるのか、ということが知りたかったです。どうやったら皆を巻き込んだ授業の場を形成できるのか、試行錯誤しています。

若澤 その点については、授業の際に学生側から質問がありましたね。石井先生がどういった思いで中国人の記憶を研究しているのか、これは南京大学の学生さんたちにとっても関心の的であったようです。どうやったら、皆を巻き込んだ議論の場ができるかというのは大きなテーマだと思います。戦争記憶の問題は、強い感情が伴うトピックなので、なかなか客観的に語るのは難しいですね。

石井 少し考えて欲しいのは、「客観的に語ること」がすべてにおいて適切なのか、という点です。今回の記憶のテーマについては、もっと感情的なものをぶつけ合ってもよかったのではないかなと。



客観的になることは、どこかで自分の感情を押し込めることです。そうした状況で話し合っても、本当に相互理解は生まれるのでしょうか。むしろ、お互いが感情をぶつけ合って話ができる、そんな関係を築くことがまずは必要なのだと考えています。

若澤 感情とどう向き合うか、感情と他者理解について、講義でもお話されていましたね。

石井 講義でお話したように、「感情」は私の研究において

常に考えなければいけないテーマです。他人から分析されることや観察の対象となることって、嫌悪感を伴うものだと思うんです。自分が研究対象として見られていることって、あまり気持ちのよいものではないですよ。聞き取り調査に行くと、いろんなことを話してくれるんですが、これを論文として書いてしまっているのだから、という葛藤は常に抱えています。感情をどこまで客観的に語るべきなのか。理想的には、私が書いたものをも一度農村に持って行っても、皆がそれを読んで納得してくれる、そういったものを書きたいと思っています。

集中講義を新しい知の現場にいき 先生同士のコミュニケーションを もっと密にしていきたい

若澤 昨年から集中講義への学生派遣が始まり、今年の講義ではTAのシステムが整備されました。南京大学集中講義は、毎年進化していきますね。石井先生は今後、このプロジェクトをどのように発展させていきたいと考えていますか？

石井 これはあくまで私個人の意見なのですが、集中講義での先生同士のコミュニケーションをもっと密にしていければと考えています。せっかく多分野の研究者が集まる場なので、異なった分野の先生方がお互いに議論して、一つのテーマについて学問的な発信ができる空間を作っていきたいです。

若澤 今回の集中講義では、飯野先生の授業の際に、石井先生と飯野先生が質疑応答を通じて議論をしている姿が印象的でした。教員間のディスカッションや討議は、学生に対しても知的な刺激になるかもしれませんね。

石井 集中講義が教育の場だけではなくて、新しい知を生み出していくような、研究発信の場としても機能していければおもしろいんじゃないかなと。あくまでも私個人が描いている理想ですが、集中講義を新しい知の現場にしていこうと、たくさんの人を巻き込んでいくことができるし、講義を担当する先生方のモチベーションも高めていけるのではないのでしょうか。

若澤 そうですね。私自身も学生やTAという立場からこの講義に参加して、中国研究を専門とする先生や院生の方と議論ができてとても刺激になっています。私はイギリス地域研究が専門なので、アジアの思想や文化、歴史を専攻する研究者の人が何を考えているのか、プロジェクトを通じてコミュニケーションができるのは大きなメリットです。

石井 TAの話が出ましたが、大学院生のトレーニングの場として集中講義を活用していくことも考えています。これから研究者や教育者を目指す人たちに、プロジェクトの運営を通じて聞き取りや資料作成、授業の運営といったスキルを身につけてもらうことを意図しています。今回、こうやってインタビューをしてもらっているのも、その試みの一環なんですよ。これから集中講義をどう運営していくかについては、学生さんたちからもど

ん意見を書いて欲しいです。

若澤 なるほど。皆が自身の理想や意見を言い合いながらプロジェクトの輪郭を決めていくのも、集中講義の面白いところですよ。

南京での成果を他の地域にも展開していきたい

石井 教養教育の発信という点から言えば、南京での成果を他の地域にも展開していきたいと考えています。ヨーロッパは教養教育のモデルを作り出した大本なわけですが、アジアで生み出された知の在り方をヨーロッパに逆流させることができれば、これは面白いことになるのではないかと。もちろん、そのためには時間も必要だし、プロジェクトのメンバー同士で議論すべきこともまだまだ山積みですが。

若澤 まさに壮大な教養教育の実験という感じですね。話がどんどん大きい方向に進んだので、少しスケールを小さくして、今度は来年の講義に関わる質問を。今年のテーマは「記憶と記録」でしたね。



インタビューの若澤

次回の共通テーマにつ

いては、何かアイディアはありますか？

石井 今の段階では、スタッフの間で検討中です。なるべく学生さんたちが日々考えていることとリンクするようなテーマにしたいなと思っています。例えば、マイノリティの問題であったり、近代化の問題といったような。中国はものすごいスピードで近代化が進んでいるので、日本という立場から何か言うことはできないだろうかと日々考えています。

若澤 授業での議論やテーマが、学生交流や日常でのコミュニケーションのレベルまで浸透してくれば、学生同士のやりとりももっと面白くなっていくかもしれませんね。

石井 学生交流に関しては、教員が枠組みを作ってそれを押し付けるのではなくて、学生さんたちが自分たちの求めている交流の在り方を具体化して実現していってくれればと考えています。学生同士のソフトな交流とでも言うのでしょうか。少し立ち止まって考えて、自分は何を求めているのか、どのように現地の学生さんたちと関わっていきたいのかを、声にして欲しいです。是非一緒に集中講義を作っていきましょう！

若澤 本日は長い時間ありがとうございました。これからこのプロジェクトがどう発展していくのか、夢が膨らみます。

(文責:若澤)

インタビュー

若澤 佑典

(地域イギリス科/石井・飯野・渡邊先生回参加)

レズビアンである〈わたしたち〉のストーリー

—記録から抜け落ちる記憶、形成される記憶と読みの絆—

飯野 由里子

講義概要



本講義では、1970年代後半に日本で発行されていたレズビアン・ミニコミ誌を素材に、①そこで書き手と読み手がどのように呼びかけ合い、どのような関係性——「読みの絆」——を築こうとしていたのか、②そうした「読みの絆」が築かれる過程において、どのような主体が「レズビアン」として立ち上げられたのか、③また、そこでどのような「記憶」は主体の中に取り込まれ、どのような「記憶」は「外部」として排除されたのか——などについてお話しする。

本講義を通して、社会的・文化的に周縁に置かれている人びとが自らの集合性を表象する際に語る「〈わたしたち〉のストーリー」が持つ両義性について考察を深めていきたい。

レインボー・フラッグ



皆さんは「レインボー・フラッグ」を見たことがあるだろうか。これは、

LGBTQコミュニティを象徴する旗として知られている。LGBTQとは、それぞれL=レズビアン、G=ゲイ、B=バイセクシュアル、T=トランスジェンダー、Q=クィアを指す。従って、LGBTQコミュニティとは、セクシュアル・マイノリティ、ジェンダー・マイノリティによって構成されるコミュニティのことを意味している。レインボー・フラッグは、1978年のアメリカで起こった同性愛者である市議員ハーベイ・ミルクの暗殺事件をきっかけとして、広く認知されるに到る。彼を射殺したダン・ホワイ特に対しては、たった7年の禁固刑が科せられただけだった。LGBTQコミュニティは抗議の意を表すため、アーティストであるギルバート・ベイカーが考案したレインボー・フラッグを使用することを思いついた。道の両側で3色の旗を持って練り歩くことで、サンフランシスコの街を6色の虹色へと染め上げたのである。以降、レインボー・フラッグは、LGBTQのパレードにおいて、欠かせないアイテムとなっている。例えば、毎年世界各地で開催される「プライド・パレード」ではたくさんのレインボー・フラッグを見ることができる。

性的なことはプライベートなこと?

こうしたパレードの話をする、「なぜ目立つことをわざわざするのか」と疑問を持つ人がいるかもしれない。ここには、プライベートであるべき性の事柄が、パブリックな空間へと入り込んでくることへの違和感、またはそれを見せつけられることへの不快感があるのかもしれない。しかし、性的な事柄はすべて一様にプライベートな領域に押し込まれているのだろうか。

セクシュアリティがプライベートな領域に留まらない事例として、1955年の秋に起こったアイダホ州での「魔女狩り」が挙げられる。ボイジーという街では、検察の主導によって同性愛者たちがコミュニティから排除された。同性愛者たちが具体的にどのような被害を受けたかのことは、はっきりとは分かっていない。この出来事あまりに辛い「記憶」であったために、誰も語ろうとはせず「記録」として残されてはこなかったのである。ここでは、プライベートな事柄であるはずのセクシュアリティが、パブリックな法によって監視・制限・規制の対象となった。セクシュアリティは必ずしもプライベートな領域に留まる問題ではない。そもそもプライベートとパブリックの境界線そのものが恣意的なものであるとも言える。

こうした背景の中で、セクシュアリティ研究は1980年代に登場した。ここでは、セクシュアリティにまつわる「知」がどのような「権力関係」を通して「構築」されてきたのか、その「構築」のされ方を問題とする。どのような力によって、現在自明とされているような制度が成立しているのか。またどのような場において、

こうした制度に対する抵抗の可能性が見出せるのだろうか。

カミングアウト・ストーリー



権力関係によって構築された制度や序列は、この枠組みに収まらない存在を排除する。この「規範」によって、レズビアンやゲイ、バイセクシャ

ルといった人々は否定的な「スティグマ」を社会の中で負わされる。この「スティグマ」こそ、LGBTQ 運動が対抗しようとしてきたものである。規範によって作り出される「スティグマ」、これに対する抵抗・対抗手段として重要な位置を占めてきたのが「カミングアウト・ストーリー」である。カミングアウト・ストーリーとは、ある個人が「規範」から外れたジェンダーやセクシュアリティの「持ち主」として自らを表現するために語られるストーリーのことである。詩人であるアドリエヌ・リッチはカミングアウトの体験を、抑えきれない想いを表出することで自らが再生を遂げる変身のストーリーとして語っている。リッチは、「女が好きだと自分で認めたあと」、彼女は「生まれて初めて、セクシュアリティを、霞がかかったような気持ちではなくて澄み切った気持ちで経験」することになったと語っている。

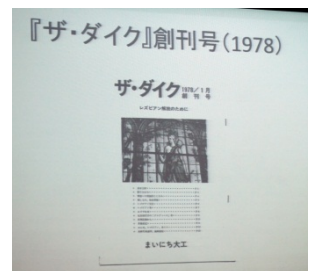
では、どうすればマイノリティが自らの物語を語り、これを自分自身のものとしてすることができ、また、カミングアウトが、単なる知識や情報として収集され、のぞき見的な欲望の対象となることを免れることができるだろうか。ここで注目したいのが、「読みの絆」という概念である。「読みの絆」とは、書き手と読み手、あるいは語り手と聴き手が、互いに呼び掛け合うことで築かれる関係性のことを指している。ショシャナ・フェルマンによれば、書き手と読み手が互いに呼び掛け合う「読みの絆」を通して、人は自らの差異と新たな関係を結びなおしていくのだという。

「読みの絆」を通して、わたしたちは、それまで「スティグマ」としてしか認識されなかった差異と新たな関係を結び直し、新しい自己を形成していく。カミングアウト・ストーリーとは、セクシャル・マイノリティやジェンダー・マイノリティが、自らの差異と新たな関係を結び直し、新しい自己を創造していくストーリーである。そして、この過程において、「特定の歴史的コミュニティや言説への参加」のために、「読みの絆」が重要となってくるのである。

レズビアンである<わたし>

では、特定のカミングアウト・ストーリーが紡がれていく過程のなかで、何が「自己」の記憶として取り込まれていくのだろうか。そして何が「他者」の「記憶」として排除されていくのだろうか。ここで私が着目したのは、1970 年代後半の日本において、レズビアンである女性たちがミニコミ誌を通じて行った語りである。女性解放運動(=ウーマン・リブ)の中で活動していた女性たちは、この運動の中でレズビアンであることをカミングアウトし、そこから日本で最も初期の、集合体としてのレズビアンストーリーを立ち上げていった。

1978 年に創刊された『ザ・ダイク』というミニコミ誌を見てみよう。ダイクとは、日本語の大工と英語でレズビアンを意味する dike を重ねている。この創刊号では、織田道子によ



る「闘う女たちへ」という論考が掲載されている。ここで織田は、女性の解放が叫ばれたウーマン・リブ運動においてでさえも、女性間の性の可能性は「語ることの許されないタブーだった」と批判し、7 年前に起こったある出来事について回想している。初めて女性と性的な関係を持った織田は、その「解放感・飛躍」をリブの女たちにも伝えようとした。しかし、彼女たちから返ってきたのは否定的な言葉であった。彼女はこうした反応を通じて、自らのセクシュアリティがウーマン・リブ運動の中では理解されないばかりか、それを語ることも許されないことを知ることになる。しかし、織田は 7 年もの間の委縮期間を乗り越え、「リブの女たち」へと語りかける。「わたしは差別と闘う女たちを信頼します。わたしは今、自立をめざすすべての女たちに傷つくことを覚悟で心を開きます。わたしはレズビアンです。女の解放を考えています。ともに手をつなぎ力をあわせて女に向けられた差別と闘っていきましょう。」と。このように織田は、「レズビアン」である「わたし」も「リブの女」であると語ることで、「レズビアン」と「リブの女」の結び付きを回復しようとしたのである。

おわりに

ここでは、日本のレズビアン・フェミニストがレズビアンである<わたし>を語り始めるきっかけとして、ウーマン・リブ運動内に存在していた異性愛主義に対する怒りがあったことを指摘した。そして、そうした怒りを出発点において、レズビアン・フェミニストによるストーリーを読みなおしてきた。彼女たちのストーリーは、日本のフェミニズム運動からもフェミニズム研究からも注



意を払われてこなかった。もちろん一部を切り離すことで、リブの運動と結び付けようとしていた点は問題をはらんでいる。し

かし、彼女たちのストーリーが現代の私たちに訴えかけているものは、「なぜレズビアンが私たちの社会の中で不適応者として扱われているのか。それは、私たちの思考の中心に異性愛的な結びつきを規範とする考え方が存在している。ジェンダーとセクシュアリティをめぐる権力関係が強固に絡み合っているのではないか」という問いである。1970年代のストーリーと1990年代あるいは2000年代のストーリーの間の断絶を、彼女たちのストーリーによって架橋できるのではないかと考えている。

――― | 講義中の質疑応答 | ―――



Q. 異性愛が当たり前とされている社会において、どういったきっかけを通じて、同性愛が自己のアイデンティティとして自覚化されるのでしょうか？

A. 確かに異性愛が前提とされる社会においては、周囲との漠然とした違いを感じつつも、それがモヤモヤや違和感に留まってしまうことがあるかもしれません。私はレズビアンについて、他者のストーリーとの出会いという観点からお話しました。周囲との違和感やモヤモヤを同性愛への自覚へと導いていくのは、まさにこのストーリーとの出会いなのだと思います。ここで注意してほしいのは、ストーリーとは本やテレビに限られたものではないことです。ストーリーとの出会いは、到るところに存在していると言えます。

Q. 社会の中で同性愛を排除する構造はどのようにして生まれてくるのでしょうか？

A. 講義の中でも言及しましたが、それはまさにフーコーが解き明かそうとした問題です。権力とは私たちのすべての関係の間に入りこんでいるため、「～によって排除の構造が生み出されている」という言い方はできません。あえて言うとするなら、私たちのすべての関係の間に入りこんでいる権力の構造によって、

と表現できるかもしれません。

Q. セクシャリティというのは、本当に教育によって変わるものなのでしょうか？

それはむしろ本能に関わるものであり、生物学的なものによって決定されていると思うのですが。

A. そうした本能があるのか、ないのかという点に関しては、私も分かりません。一般的には、性差を生物学的なものとして理解する考えが強いのにに対して、フェミニズムにおいては社会的な要因を強調します。もちろん性差を規定するものとして、生物学的なもの和社会的なものの両方があると思います。ただし、これまで性差の理解において、生物学的な要素を見積もりすぎてきたのではないかと、というのがフェミニズムの主張です。少し注意して欲しいのは、セクシャリティというのは具体的に目に見えるような実体がないという点です。だからこそ、自明なものとして、あるいは目の前にあるものとしてこれを扱うのは危険です。

Q. 飯野先生の講義内容と「記憶と記録」の関わりについて詳しく教えてください。飯野先生は、カミングアウトが知識の対象として扱われることで、単なる情報に転化してしまうことをお話されていましたよね。これは石井先生がお話されていた、零れ落ちる記憶と何かつながりを感じます。

A. 記憶をすべて記録化することは不可能です。言語化されない記憶というものもあるし、必ず零れ落ちていく記憶というものがあるわけですね。1970年代における女性たちの記憶、これが省みられずに無視されている現状に対して何か言いたいと思ったのが、私の研究の出発点です。

――― | 飯野先生と石井先生のやり取り | ―――

石井 私
は講義の中で、歴史が情報として扱われていく中で、記憶が失われてしまう点につ

いてお話をしました。言葉にならない記憶というものがあります。



感情が付着物として堆積している過去というものがあり、これが情報として記述された時に、記憶が持つ豊かさというものが失われてしまうのではないかとというのが、私の考えです。

飯野 石井先生がおっしゃっていたのは、研究者が抱えるジレンマとも言えます。一方で、言語化できないものや零れ落ちていくものがあり、何とかしてこれを掬い出したいと思うのだけれど、他方で限定的な表現方法、すなわち特定の言語と形式に準拠する形で論文を書かないといけないのですよね。

石井 私はオーラルヒストリーを専門としていますが、自分が聞き取ったものをなるべく「生」のまま提示したいと考えています。しかし、論文や授業で提示するためには、自分の「解釈」を加えなければいけない。他者の声を、解釈というフィルターを通じて提示していることについては、いつも不安が残ります。

飯野 私は、自らをミニコミ誌にストーリーを書いたレズビア

ンの女性たちの記憶の「記録」者とは考えていません。むしろ自分は記憶を読み取る「読み手」の一人であって、彼女たちのストーリーについて、私とは異なった読みが出てくるだろうし、そうした多様な読みへと解釈を開いていくことが重要だと思っています。記憶と記録はまったく異質なものだと思いますが、両者を繋ぐものとして「読み」という行為があるのではないかと。

石井 記憶と記憶は、まったく異なったものでありながら、相互に参照し合うものだと考えています。例えば、ある古い文書が発見されることで、失われていた記憶が甦って、その記憶が現代の社会へと浸透していったりします。記憶と記憶は、鏡のように互いが互いを映し出すようなものなのではないでしょうか。

(文責:若澤)

講義 BBS より

◆ 南京大学学生

2011/03/03 18:12

今日の先生の講座は本当にとても面白いです。同性愛に対しても、セクシュアル・マイノリティに対しても、何だか前よりもっと理解できる気がします。本当に勉強になりました。

◆ 南京大学学生

2011/03/09 16:11

講座の中で、LGBTQ コミュニティを象徴する旗としてレインボー・フラッグという実物を始めて見ました。そして、この講座を通じて、同性愛とか、レズビアンとか、いろいろな専門的な単語を習いました。こういう現象の研究があるのは社会の進歩であるのからだと思います。



飯野先生インタビュー

若澤 南京での集中講義から3カ月が経ちましたね。振り返ってみて、現地での授業はいかがでしたか？

飯野 今回の講義ではセクシャリティ研究の基礎について、南京大学の学生さんたちにお話しました。中国の学生さんにとっては普段の授業では扱わないテーマですので、授業では皆さんが話やすいような空間をつくることに集中しました。日常的話題から始めて、セクシュアリティ研究の基本的な考え方について、身近な問題として理解してもらえるよう講義を進めたつもりです。他方で、集中講義の全体テーマである「記憶と記録」の問題については、じっくりと論じる時間がとれなかったのが反省点です。

若澤 飯野先生の講義では、質疑応答の場が印象的でした。「記憶と記録」の問題については、質疑応答を通じた飯野先生と石井先生のやり取りが面白かったですね。

飯野 日本語学科の学生さんだけでなく、他学科の学生さんが授業にいらして質問をしてくれました。セクシャリティに関するテーマでは、質問をすることや意見を言うことが、自分自身のカミングアウトになってしまうことがあるので、質疑応答の場にある種の困難さがつきまとうのは事実です。石井先生とは記憶の理解について議論しましたが、これは学生さんたちにもいい刺激になったと思います。私も面白かったです。

若澤 2人が議論をしている時、私は教室の様子をカメラで撮っていたのですが、私も議論に乱入したくてウズウズしていました。

飯野 乱入してくればよかったのに。

学生さんたちとはもっと話してみたかった
授業の後に少人数でディスカッションをしてみたり
お茶をしながらお話をしてみたり

若澤 授業を運営していく中で、難しいと感じたことはありませんか？

飯野 やはり言語の問題です。日本語を流暢にしゃべることのできる学生さんもありましたが、私が中国語を話せないため、授業でのやり取りの大部分は通訳に依存せざるを得ませんでした。学生さんたちの疑問に私がどこまで接近できたのか、逆に私の発したメッセージがどこまで授業を通じて受けとめてもらったのか、手応えが分からない不安があります。

若澤 飯野先生から見て、南京大学の学生たちはどのように映りましたか？

飯野 非常にまじめな学生さんたちだな、と授業をしていて感じました。せっかくの機会なので、学生さんたちとはもっと話してみたかったですね。授業の後に少人数でディスカッションをしてみたり、あるいはお茶をしながらお話をしたりするというのもい

2011年6月20日 駒場Ⅱキャンパス3号館408号室

いと思います。

若澤 少人数での密なコミュニケーションは、南京のプログラムが持っている魅力の一つです。飯野先生がおっしゃるように、これをさらに促す仕掛けを作っていく必要がありますね。

既存の学問を体系的に学ぶだけではなく
授業を通じて「一人の人間としての立ち位置」を
揺さぶられる体験をしてほしい

若澤 授業を通じて飯野先生が一番伝えたいこと、学生たちに考えてほしいことは何ですか？

飯野 私が専攻しているセクシャリティ研究、障害学という学問分野は、「当事者性」というのが大きなキーワードになっています。既存の学問を体系的に学ぶだけではなく、授業を通じて「一人の人間としての立ち位置」というのを揺さぶられる体験をしてほしいです。セクシャリティ研究や障害学が発する問いを、まずは自分の問題に引きつけて考えてほしい。この過程では、学生さんたちがジレンマを抱えることもあるでしょうし、どう処理していいかわからない問題が現れるかもしれない。しかし、こうした揺さぶりの経験を通じて、学生さんたちがセクシャリティ研究や障害学が発する問いを、自らの視点の内に組み込んでいくとすればと思っています。

若澤 自身が揺さぶられる体験については、石井先生も講義のなかで言及していました。単なる知識ではなく、自己の在りかたを変えていくような知が、集中講義で伝えられるべき教養なのかもしれません。昨年の「身体論」の講義でも、当事者性について取り上げられていました。

強くなる必要はない
弱いままでどう生きていくかということを一
緒に考えていきたい

飯野 教養という点から言えば、「弱さ」というものに目を向けながら、生きていく力を養ってほしいと考えています。現代の社会は、「強く」あることを皆に求めます。でも、全員が「強く」はなれないし、誰もが何かしらの形で「弱さ」を抱えて生きています。私がもし教養教育を通じて言いたいことがあるとするなら、「強くなる必要はない」と伝えること、「弱いままでどう生きていくか」ということを一緒に考えていきたいということです。

若澤 「弱さ」を抱えながら生きていくこと。

飯野 「脆さ」とも言い換えられます。これまでの思想が想定してきた主体って、自分で何でも決断できる「強い」主体ですよ。でも、自分では決断できない、あるいはどうすることもできない状況に置かれている人もいます。そこで重要なのは、「弱さ」を捨てて「強く」なろうと無理することではなくて、むしろ自分の

できなさや「弱さ」を認めながら生きていく「知恵」を獲得することにあるのだと考えています。もし教養が私たちの生き方や在り方に関わるものならば、そこには「弱さ」に対するまなざしがあったほしい。

若澤 集中講義の運営メンバーの間では、来年の共通テーマを何にするか議論が行われています。今年は「記憶と記録」、去年は「身体論」というテーマで集中講義が開講されました。飯野先生が話してみたいテーマは何かありますか？



飯野 私だけではなくて、他の先生もそのテーマで話すことになるのですよね。今考えているのは「地震」というテーマです。もちろん、地震という一つの出来事に対して、一定の距離をとって語れるような状況になること

が大前提です。地震という出来事は、特定の人たちにとっては語ることも、聞くことも強い感情的な反応を伴うものになります。3月11日の出来事をいかに語るかは、現在の私たちが抱えている問題だと思っています。今回の集中講義は、地震が発生したちょうど1年後に開かれますので、地震の体験を振り返って語り直すにはいい時期ではないでしょうか。

若澤 今回の講義では、記憶と感情の問題や、ある出来事を語ることの困難さについて言及がありましたが、現在の私たちにとって3月11日の「地震」とはどのような出来事なのかかもしれません。ちょうど今回の地震は、集中講義の期間中に起こったこともあり、私の中でも集中講義と地震の出来事を、何らかの形で繋げて考えてみたいという思いがあります。

飯野 私の講義は3月3日から4日でしたから、直接的な影響を受けることはありませんでした。第3週以降の運営に関しては、大変だったと聞いています。

若澤 私は3月10日まで中国に滞在していました。地震が発生した時には東京にいたのですが、今回の出来事が中国においてはどのように語られたのか、受けとめられているのかに関心があります。先ほど飯野先生は、少人数でのディスカッションの機会を増やすことについて提案されていましたが、地震に関する認識や思いについて、学生同士で語ることができれば有益かもしれません。飯野先生がおっしゃるように、地震は現在進行形の問題ですし、大きな被害を受けた方もいらっしゃるの、これを語ることは困難が伴うとも思います。

飯野 今回の地震は、私にとっても、そして私の研究にとっても大きな衝撃でした。「弱さ」を持つことというのは、「何か一つが崩れてしまうとすべてが崩れてしまうこと」であることを突き付けられました。「弱さ」を持っている人、介助者を必要とする人は、明日どうなるかが分からない状況になった時、必要なサポートを受けることができなくなって、一つ何かが崩れていくと、

すべてが恐ろしいスピードで壊れていくんです。こういった状況を目の当たりにして、何とかしなければということを強く感じさせられました。「ネオリベリズム」の思想はそういった人たちに対して「甘えるな」というんですけど、そういった考え方に対して「そうじゃないんだ、援助は必要なんだ」ということを一つの思想として提示していきたいと考えています。

身体や障害といったトピックから

セクシャリティやアイデンティティの問題を論じたい

若澤 これまでは共通テーマについて話してきましたが、飯野先生個人が、これから研究や講義を通じて扱っていききたい問題はありますか。

飯野 現在の研究では障害学との関わりからセクシャリティ研究について考えています。次に南京大学で講義をするのであれば、身体や障害といったトピックからセクシャリティやアイデンティティの問題を論じたいと思っています。

若澤 身体と世界認識については、去年の講義で福島智先生がお話されていました。飯野先生の研究においては、身体とはどのように問題化されるのでしょうか。

飯野 今回の講義でお話したのは、社会の中で周縁化されつつも、何とか人と繋がる方法を見つけた人たちについてでした。しかし、自分の身体の輪郭が描けない人にとっては、そもそも自身が何であるのかという、アイデンティティの輪郭そのものが描きにくいのです。そうした苦しみを抱える人たちの経験について、何か話すことができればと考えています。

若澤 そろそろインタビューの時間も終わりに近づいてきました。これからの集中講義について、何か要望やご意見などはありますか？

飯野 先ほど少し触れたのですが、教室をもっと小さくして学生と教員とのやりとりをさらに深くしていきたいですね。

若澤 去年はオーディトリウムで講義が行われていたのですが、今年は小さな教室になって議論が活発になっていました。やはり互いの顔が見えるというのは、とても大事な要素ですね。私も飯野先生に同感です。

飯野 講義の中でも、講義が終わった後にも、もっともっと学生さんたちとお話する機会が持てればと思います。

若澤 長い時間、ありがとうございました。「弱さ」を抱えながら生きていくこと、「強くなくていいんだ」という飯野先生のコメントが印象的なインタビューでした。

(文責: 若澤)



インタビュー

若澤 佑典 (地域イギリス科 M2/石井・飯野・渡邊先生回参加)

中世史料からみる記憶と記録

渡邊 正男

講義概要



13世紀後半以降、日本中世の法や裁判のあり方は様々な点で変化して行く。講義では、実際の史料を講読することを通して、この変化の中で、法がどのように記憶され、記録されていたかを、具体的にみてみたい。

資料における記録

史料研究において、研究の材料は文書(もんじょ)である。通常、記録と文書は区分しないが、日本史研究ではこれらは区別される。これらは双方とも誰かに何かを伝えようとした史料として現代に残っているものであるが、ここでいう記録には、誰かが書いて、見て、直してといった記録者のフィルタが掛かっている。それに対し、文書は当時の人達の生の情報が残っていることになる。ここでは、中世における時期区分として、鎌倉時代(12世紀～14世紀)を対象とし、阿弋河(あてがわ)荘園における裁判の記録を例に、人々が当時の裁判や法律をどのように記憶し、どのように記録し、どのように使おうとしたのかを考える。

鎌倉時代の政治体制



鎌倉時代以前は京都に朝廷が置かれ、天皇(公家)が日本支配の中心であったが、

12世紀末になると武家政権である鎌倉幕府が現在の関東地方に創設された。また、鎌倉幕府によって京都を制圧するための出先機関となる六波羅探題が設置され、公家政権の監視や日本西部の支配をおこなう足掛かりとなっていた。

また、当時は、全国のあちこちに当時の地域社会の一つである荘園が存在した。鎌倉時代以前においては、天皇を本家とする荘園において、雑掌(下級の役人)が百姓の税制管理などを任されていた。しかし、鎌倉時代になると、将軍から任命され

た地頭が百姓を管理するという図式が生まれ、この二つの流れが並立し、雑掌と地頭がそれぞれ違う立場を担うこととなった。当然双方に対立が起こることがあり、裁判がおこなわれることも珍しくなかった。

鎌倉時代の裁判と司法制度

当時の裁判においては、訴訟人は訴人、被告人は論人と呼ばれ、引付(奉行)を通して3回書面でそれぞれの言い分についてやりとりをした後、六波羅探題に双方が直接出向いて対決するという図式であった。そして、裁許状、下知状と呼ばれるいわば判決文が渡されることになっていた。

鎌倉幕府は法律として御成敗式目(51箇条)を作成したが、たった51箇条で日本全国を抑えることは非常に難しく、場合に依じて追加法が設定された。この追加法は後々の裁判において、裁判結果の例として重要な役割を果たすものとなるため、鎌倉幕府が全国一律に出した法案という説明がなされていた。ところが、新しい追加法が作られた際、六波羅探題には伝えても、他の農民や幕府関係者以外の人間には伝えられていなかった可能性があった。

阿弋河荘における裁判とある追加法をめぐる問題

阿弋河荘では、円満院を本家とし、寂楽寺を領家として、從蓮という人物が雑掌を務めていたが、湯浅宗近という人物が地頭に任命された。ある期間を経て、この2人の間で争いが起こり、從蓮が宗近を訴え、裁判となった。このとき、荘園領主側は「自分は長いこと阿弋河荘の預所をやってきたので、自分をやめさせることはできない」と訴え、これに対して宗近は、六波羅探題で出された確かなものであるとして、追加法を裁判資料として提出した。しかし、雑掌側は、追加法の提出先の宛先が間

違っている、書かれている内容が不自然といった点を理由として、その追加法が本当に存在しているのか怪しいと反論した。従蓮のバックには御成敗式目の最も古い注釈書を書いた唯浄という人物が付いていた。つまり、当時の法律の専門家を以てして、この追加法自体が本当に六原で出されたものなのかわからないということが問題となったのである。

数回の書面でのやりとりにおいて、追加法の有無や正偽について議論が交わされた。しかし、この裁判を解決した書類は存在しておらず、裁判の結果ははっきりしていない。六波羅探題の法律の専門家の間でも意見は分かれており、法に関する記憶や記録が共有されていなかったのである。ただし、阿豆河荘で宗近は地頭を続けていることが分かっており、少なくとも宗近は罪を問われなかったことは読み取れる。

茜部荘における裁判と阿豆河荘の裁判記録

場所を東大寺に移し、仁治2年(1402年)、雑掌と地頭代の争いが茜部荘においても起こった。ここでは、地頭代が20年請所を



続けていればそれは廃止しないという例が近年あったはずと主張した。この近年の例とは阿豆河荘における裁判の結果を指しているが、「あったはず」というように、裁判記録は確実なものとして記憶されてはいなかった。阿豆河荘に追加法を提出すれば明らかに地頭代の勝利は見ていたが、この追加法は相変わらずきちんと記録されていなかった。この裁判では東大寺に唯浄の弟である斉藤基永という人物が付いていたが、弟に要求されたにもかかわらず、法律の専門家である唯浄ですら追加法を渡せなかった。このことから、阿豆河荘の裁判はしっかりと記録されていなかったことが分かる。

しかし、この辺りから裁判の記憶や記録をめぐる環境は少しずつ変化してきた。唯浄や基永のような法律の専門家でも追加法を把握していないということはまずいのではないかという意見が生じるなどしたことから、彼らは新たに注釈書を書き、さらに幕府の追加法を集めた追加集を作り、忘れないように斉藤家の中で誰もがみられるようにした。さらに室町時代になると奉行人全員がこの情報を共有しようという動きが出てきた。鎌倉幕

府や六波羅探題も、文庫というものを作り、裁判の記録を貯めるようになり、法律や裁判の記録を公式に共有する動きが出てきた。これが本筋の一つの結論である。

追加法の記録化

御成敗式目の追加法は、この後も記録としては不在が続いていた。たとえば、数年後の六波羅探題の裁判ではまた忘れられており、14世紀以降の追加集にも載っていなかった。江戸時代(近代)を過ぎ、1955年に鎌倉幕府の法律を集めた『中世法制史料集』(岩波書店)が出版された時ですら、阿豆河荘における裁判で用いられた追加法は載っておらず、「このような追加法が用いられたのでは」という推測が書かれるに留まっている。この本は何度か増刷されたが、高野山正智院に全ての文書が残っていたのを受け、第4版にて阿豆河荘で用いられたという記録が収録された。また、『日本思想体系』(岩波書店)の中世の法律についての思想を扱った巻においては、御成敗式目および追加法について述べられているが、ここでも阿豆河荘の例は触れられていない。一方で、類似の例は取り上げられているが、「このような追加法があったらしいが真偽は疑わしい」との追記が掲載されており、阿豆河荘で用いられた追加法は相変わらず疑わしいとの見解がなされている。

2004年に改めて調査がおこなわれ、『高野山正智院経蔵資料集成』(吉川弘文館)の中で写真付きで掲載され、阿豆河荘で用いられた追加法がようやく明確な記録として残るようになった。

記録史料に対する研究者の意識

阿豆河荘における裁判で用いられた追加法は記録として残ったが、裁判の結果は最終的にどちらが正しいかということとは分かっていない。個人的な見解として、裁判に用いられた追加法の有無は分からないが、雑掌も地頭も嘘は付いておらず、ただ行き違いがあったと考える。地頭が正しいところから追加法を書き出したときに、追加法の写しをさらに写したが、最初に因幡の雑掌が写しを作ったときに年号を書き間違えた可能性も十分に考えられる。

記録を扱うときには、嘘を語っているのではなく、このように間違われた可能性というものも考慮するなど、くれぐれも慎重に扱う必要がある。

(文責: 櫻井)

講義 BBS より

◆ 南京大学学生

2011/03/08 00:20

渡邊先生の話から、一つ特に気になっていた言葉があります。それは、「動いている」ということです。

先生も言及したように、授業中に出された資料は中世の法律と裁判の文書なのですが、どうやら現在の法律とはどこか違うような気がするでしょう。たしかに、いま私たちの目で見れば、当時の式目と追加法は「法律」というものの基本的な性質を有していないかもしれません。だが、このような「法律」と文書を用いて、当時の政府機関はなんとか行政を円滑に行い、国家を動かしたのは事実です。という、御成敗式目は本物の法律かどうかはさておき、肝心なのは、そのような「法律」は当時の行政様式にあっていたと言ってもよいでしょう。言い換えれば、当時の「法律」および追加法は可能になったのは、当時の政治制度、慣習、さらに物の見方など、細かいところまで文字化しがたいことが「動いている」、また「生き生きしている」からであると思います。



あくまで自分の推測ですが、先生が判明させようとするのは、おそらくそういう「動いている」、つまり文書の文字の裏に隠されている政治制度、慣習、物の見方でありましょう。その努力も、当時の人間の世界観、そして当時の「時空」を豊富に呈示させようとするものでしょう。

そして、ひとつお伺いしたいことがあります。先生が、自分が最初に近代に関する研究をしていたが、後に中世などの時代の状況からその近代まで及ぼした影響を探し出すことに移したとおっしゃいましたね。その影響を一つでも教えていただけませんか。

◇ 渡邊先生

2011/03/12 08:00

日本では、明治維新、地租改正によって、土地所有が近代化されるまで、いったん売られた土地であっても、なんらかのきっかけで取り戻され、再び同じように売られるという事例が、広汎に見られます。また、それらの事例では、今後取り戻さないことを約束する場合には、売買の文書に「徳政があっても取り戻さない」と記述することが多く見られます。

この「徳政」で思い出されるのは、永仁5(1297)年の鎌倉幕府追加法、「永仁の徳政令」です。この追加法は、御家人が売ってしまった土地を取り戻させることを規定したもので、これによって、実際に多くの土地が取り戻されたようです。

「永仁の徳政令」は、「追加集」などにも記録されず、法文自体は忘れられてしまいました。にもかかわらず、「徳政」によって土地が取り戻されるということ自体は、明治維新に至るまで、人々の記憶に残り、土地所有のあり方に影響を与え続け、それ故に、「徳政」という言葉が、土地売買の文書にも現れたのでしょうか。

◆ 東京大学学生

2011/03/10 01:16

中世の法に対する考え方が現在と違うというのは目からうろこでした。また、その法律観が徐々に今の法律観へと変化しているところを拝見し、今の法律観の相対性を感じることができました。

一つ渡邊先生と、これをご覧になっている学生さんやTAさんにご意見をいただきたいのは、学問とくに歴史学に対する考えです。今回の講義で渡邊先生は自身の研究の動機を中世への興味と語られており、また、その興味は近代研究の中で疑問に思いつづけていたことを突き詰めた結果生じたとおっしゃっていました。それは非常に共感できます。歴史学にはこのように個人の興味から研究が発生することが多いようです。そしてその研究の結果としての意味は、おそらく今回の講義で私たちの法律観が相対化されたように、現代の事物・制度を相対化することでしょう。それが歴史学の使命と言えるのかもしれません。

問題はここからです。「歴史学の使命＝相対化」という前提に立った場合、相対化を行うことはいったいどんな目的を持っているのでしょうか？私が思いつく目的と言ったら、現代社会の変革期において次のシステムを作る上での参考になるという点だけです。それ以外にもあるのでしょうか？

◇ 渡邊先生

2011/03/12 10:06

「学問の使命」・「学問の目的」という問題は、学問に携わる全ての者が、常に考えているべき問題ではあります。しかしながら、簡単に回答が見つかる問題ではありませんし、回答が見つからなければ学問をしてはいけないというわけでもありません。

今回の講義が学問の一端であるとすれば、その目的は、小さな興味・小さな違和感等を感じてもらうことです。そして、その興味や違和感等を記憶に留めて、社会の変革期に次のシステムを作ろうとする時、今、目の前の誰かと話しをする時、ほんの少しだけ思い出してもらえれば、と願っています。

◆ 渡邊先生

2011/03/12 11:31

講義では時間が足りなかったため、また、「記憶と記録」という主題からも少し外れてしまうため、紹介することができませんでしたが、講義の記憶を確かめるために、という理由をつけて、一つ「追加」の質問をしてみたいと思います。

次の文書は、「法印」某という人が、六波羅探題「陸奥左近大夫将監」に宛てて、雑掌の訴えを受け付けてくれるよう、依頼したものです。ただし、鎌倉幕府から六波羅探題へ追加法を伝えるような公式の文書ではありませんので、何年のものかが書かれていません。

法印某挙状「高野山文書宝簡集」三十三

法勝寺末寺寂楽寺領紀伊国阿弭河庄雑掌重申状(副具書、)如此、子細見于状候歟、任道理可有計御成敗候哉、恐々謹言、

九月廿九日 法印(花押)

謹上 陸奥左近大夫将監殿

東京大学史料編纂所が編纂した『大日本古文書』という史料集では、この「陸奥左近大夫将監」を「北条時茂」であるとしています。それを踏まえて、河野通明氏は、論文「阿弭河庄をめぐる寂楽寺と円満院」の中で、この文書を文永5年ないし文永6年のものであるとしています。

この点について、皆さんの御意見をお聞かせください。

◇ 東京大学学生

2011/03/18 01:54

陸奥左近大夫将監が存在しない文永5・6年をあげた点がよくわかりません。また、陸奥左近大夫将監を時茂と断定している点に関しても疑う必要があるのではないかと思います。

◇ 南京大学学生

2011/03/19 00:33

先生が出した問題をこの数日考えてきましたが、どうやらちがいがあかない用です。多分歴史、特に日本史の修行がまだまだ足りないため、官僚制度の全体図も頭の中で全然できてありませんが、一応自分の思うことをそのまま述べます。

最初はこの「雑掌の訴えを受け付けてくれるよう依頼した」「法印」は、授業中に出ている「從蓮」のために陸奥左近大夫将監にこの文書を出したと思い込んでしまいました。つまり、授業に紹介された裁判とは同一ものだ勝手に頭の中で先入観が入ってしまいました。けれども、授業の裁判は建治元年から始まったものなので、もし宛先の陸奥の左近大夫将監は北条時茂だとすると、時間的には不可能なことになります。それは無論、北条時茂が文永七年に死去したからである。もしこの文書が言及した裁判は別のものだだとすると、それは、北条時茂が六波羅探題を務めた14年間(建長8年から文永七年死去まで)の間のものだと考えてよいでしょう。だが、なぜ河野氏はこの文書を時茂が陸奥守を務めた文永5ないし6年のものとしたのは、実に理解できません。今持っているわずかの知識からすると、この二年はきっと最初から排除されるとしだろーと思います。

わからない問題がいっぱいです。まずは、なぜ史料編纂所は年の記載のない文書の宛先を北条時茂としたのでしょうか。その根拠はなんなのでしょうか。

文書の出場所の「高野山文書宝簡集 三十三」は、授業に出た裁判の最初の訴状とは一緒です。それらの文書の編纂は、時間とかの順で並べるのでしょうか。あるいは、これはただの偶然で、両文書は無関係なののでしょうか。

陸奥守と陸奥左近大夫将監という二つの官職はどんな関係でしょうか、また、兼任出来る両職なののでしょうか。これはこの質問のポイントになるのではないかと推測しています。

◇ 渡邊先生

2011/03/21 09:22

追加の質問について、お二人が疑問に感じた点は、正鵠を射ています。

『大日本古文書』に基づいた、河野通明氏の見解に従うことはできません。

そして、お二人の疑問点は、講義でお話した事例の中で、地頭が提出した追加法に対して、雑掌(ないしは唯浄)が指摘した疑問点と共通するところがあります。

そこで、もう一度、追加法をめぐる雑掌と地頭とのやりとりを思い出し、追加の質問と比較してみてください。

その上で、「陸奥左近大夫将監」が誰か、この文書が何年のものか、考えてみてください。

◇ 南京大学学生

2011/03/24 22:29

まず、この文書の宛先は「陸奥左近大夫将監」だけで、「相模式部大夫」をならずに書くのは、当時北方だけに六波羅探題が存在している一方、南方には不在であったと推測できるでしょう。そして、日付は九月廿九日であるため、「相模式部大夫」不在の文永九年から建治元年の四年間の間に書かれたものだと考えては良いでしょう。しかも雑掌の申状もついているなら、雑掌の訴えを出したあとで出された文書だと思います。そうすると、從蓮が最初に出した訴状の日付(建治元年九月 日)ともほぼ同時で、時間上にもあっているようです。以上をまとめてみれば、東京大学史料編纂所が編纂した『大日本古文書』の結論とは食い違いがありますが、この文書は建治元年のもので、「陸奥左近大夫将監」は北条義宗だ推測します。

けれども、まだいくつかの疑問点が残っています。

1、法印がだしたのは雑掌の「重申状」であります。先生が配布した資料によりますと、從蓮が建治元年九月出した訴状は、どうやら重申状ではないようです。

2、法印とは誰でしょうか。法印が文書を出した意図は、無論六波羅探題「陸奥左近大夫将監」に、雑掌の訴えを受け付けてくれるようとするのですが、もしかして唯浄ではないかと、私が勝手に推測しています。そして、法印の文書を収録した「高野山文書宝簡集」三十三は、授業の資料の中の「唯浄注進状案」とは一緒に、一体どう意味するかわかりませんが、何かつながりがあるのではないと悩んでいるのです。

3、河野先生の推測の根拠はどこにあるのでしょうか。わざと「陸奥左近大夫将監」が不在で、しかも「相模式部大夫」が存在する文永五と六年を取り上げたのは、どうしてもその論理が理解できません。



◇ 渡邊先生

2011/03/29 16:14

まず河野通明氏の見解について。

河野氏は論文の中で次のように述べています。

「宛所の陸奥左近大夫将監は『大日本古文書』の編者の比定で六波羅北方北条時茂。その陸奥守就任は文永四年一〇月二三日、六波羅北方退任は文永七年一月二七日だから、この文書の年号は文永五、六年に絞られる。」

河野通明「阿豆河荘をめぐる寂楽寺と円満院」(中世寺院史研究会『中世寺院史の研究 上』所収)300頁

河野氏は、「陸奥左近大夫将監」の「陸奥」について、時茂自身が陸奥守であることを意味していると考えているようです。しかし、文書の宛名で、時茂が「陸奥左近大夫将監」と記されるのは、陸奥守就任以前です。陸奥守就任後は「陸奥守」と記されます。「陸奥左近大夫将監」の「陸奥」は、父親が陸奥守であったことを意味するのであって、時茂自身が陸奥守であることを意味するものではありません。雑掌や唯浄も河野氏の見解には賛成しないでしょう。

また、『大日本古文書』の比定を信じてしまったのも問題です。『大日本古文書』は、基礎的な史料集ではありますが、編纂された物で、残念ながら、完全ではありません。「六波羅探題一覧」に示したとおり、六波羅探題で「陸奥左近大夫将監」と記される人物は、時茂だけではなく、『大日本古文書』が時茂と限定する根拠は明確でなく、再検討する余地があります。

これらの点に関するお二人の指摘には、私も賛成です。

河野氏の見解には従えないことを確認した上で、「陸奥左近大夫将監」が誰か、この文書が何年のものか、考えてみましょう。

宛名が「陸奥左近大夫将監」ですから、時茂であるとすれば、陸奥守となる文永4年10月以前、義宗であるとすれば、六波羅探題北方となる文永8年11月以降、ということになります。

さらに、宛名が「陸奥左近大夫将監」一人ですから、六波羅探題が一人だけの時期、南方時輔が死亡する文永9年2月以降、時国が南方となる建治元年12月以前に限定できそうです。この考え方は、雑掌が追加法について指摘した点で、徐さんの御意見とも共通します。

しかしながら、質問した時に触れた通り、挙状は、鎌倉幕府が六波羅探題に追加法を伝えるような公式の文書ではありません。ですから、六波羅探題が北方・南方両方そろっている場合でも、必ずしも宛名に二人を書くとは限らないのです。実例を集めてみると、公家から六波羅探題に宛てた文書の場合、一方のみを宛名とする場合が多く見られます。

この点を踏まえると、宛名が一人であることから、この文書が何年のものかを限定するのは難しいと考えます。

◇ 南京大学学生

2011/04/10 13:47

ご解説まことにありがとうございました。先生の文章を読んでから再び自分の知識構成、特に日本史に関する知識構成はまだまだ足りないのことに気づきました。確かにお恥ずかしいことですが、先生のご指導に再び感謝の気持ちを申し上げます。

先生の話した通り、挙状は、鎌倉幕府が六波羅探題に追加法を伝えるような公式の文書ではありませんので、六波羅探題が北方・南方両方そろっている場合でも、必ずしも宛 名に二人を書くとは限らないゆえ、宛名が一人であることから、この文書が何年のものかを限定するのは難しいとみられるようです。そして、「陸奥左近大夫将監」と「陸奥守」との関係も先生の解説によってやっと解明されました。それにしただけで、この文書は文永4年10月以前、あるいは文永8年11月以降のものと限定されるのでしょうか。だが、それ以外に、私がどうやら手の施しようのない境地に陥ったようです。自分の知識の範囲で使える証拠はただ「重申状」という言葉だけです。もしこの文書でいる裁判が授業と同じでしたら、この文書は、雑掌が重申状を出した建治二年6月（授業プリント八により）以降のものとなるだろうと思います。しかし、これはなんの裁判に関する文書だかわかりませんので、やはり先生のご意見をお伺いしたいと思います。

◇ 渡邊先生

2011/04/13 21:05

講義でお配りした史料・お話しした内容のみから考えられることは、前回までの論点でほぼ尽きています。以下、御紹介しなかった史料もあわせて、もう少し検討してみようと思います。

まず、疑問点にもありました、差出「法印」について。

花押（図案化された署名の一種）の形が、建治3年12月21日、阿弭河荘を、寂楽寺から高野山に譲った文書の差出「法印」の花押と同じであること等から、差出「法印」は、寂楽寺別当（長官）の宰相法印任快であると考えられます。そして、任快が、寂楽寺別当として、阿弭河荘の訴訟に関与し始めたのは、関連史料によれば、文永3年4月頃からです。これによって、この文書は、文永3年4月以降、建治3年12月以前のものであると言えます。

そこで、差出と宛名とをあわせて考えると、「陸奥左近大夫将監」を時茂とすれば、文永3年ないしは4年、義宗とすれば、文永9年～建治3年の間のものであると考えてよいでしょう。

ただし、文永9年～11年、阿弭河荘に関する裁判が六波羅探題で行われていた形跡はありません。また、御指摘の通り、建治元年とすると、最初の訴状が「建治元年9月日」のもので、9月29日のこの文書には「重申状」とありますから、9月の内に2回目の訴状が提出されたことになり、訴訟の経過から考えて、これは難しそうです。さらに、現在残っている雑掌の訴状は「建治2年8月日」のものが最後で、雑掌と地頭との訴状・陳状のやりとりが行われたのはこの頃までと考えられますから、建治2年ならわずかに可能性があるものの、建治3年とするのは難があります。



文永3・4年にも、阿弭河荘の年貢等をめぐって、雑掌と地頭湯浅成仏（宗親の父）との間で裁判が行われていました。しかしながら、文永3年9月3日、「解状」（訴状）に基づいて、六波羅探題から地頭に対して出頭を命じた文書が現存しており、一方、同じ9月の29日までに重訴状が提出された形跡はありませんので、文永3年とするのも難しいでしょう。

これらを踏まえて、この文書は、文永4年、時茂に宛てたもの、ないし建治2年、義宗に宛てたものであると考えます。

渡邊先生インタビュー

石井 どうでしたか？ 南京に行って。

渡邊 それはもちろん、楽しかったですよ。でも学生さんにとって楽しかったかどうかはまた別問題なので。中国の人には選んでもらえませんでしたね、感想文を書く対象には(笑)。

石井 どう書いていいかわからなかったというのもあったのかもしれないね。

渡邊 日本の前近代史の中でも恐らくイメージの無いところなので、やっぱり授業を聞く時点でかなりハードルが高くて、それで何か書けっていうのも難しいのかな。

石井 講義自体はこういうジャンルの授業にしては、すごく親しみやすかったと私は思いました。それに記憶と記録のテーマ講義全体としては、先生の日本史の講義が入っていたことによって、キュッとしまったというところがあります(笑)。皆記憶方面に偏っていたので、記録として授業をするというのは必要だったと。そしてこれだけ史料と向き合いながら、その当時の社会の雰囲気とか考え方を、読み込めるものなのかなというのが、ちょっと新鮮でした(笑)。



渡邊 日本中世史をやる中で、ああいった話は特殊ではないので。それを新鮮に受け止めてもらえたというのは(笑)。まあこちらの意図したところとは別の所でも、何か拾ってもらえるものがあれば良いですね。逆にこちらからこれが伝えたいんだというのが明確に出ていなかったかなという局面も。

自分と違う常識に対して自分の常識で斬らず 適度な距離感を測り関係を持つ

石井 先生としてはどういうことを伝えたいという意図があったんですか？

渡邊 こういうの(歴史学)って自分たちと同じ「人間」を考えるものじゃないですか。だからある意味わかりやすい側面はあるけれど、今の価値観から当時の現象を斬るっていう形ではできないところがあって、自分たちの常識とは違う常識が常識として存在している。そこに、何らかの違和感を感じてもらえれば。時間や空間としての距離を持っている歴史的な人間同士のありようとして、距離感を測って考える考え方があるんだということをわかってもらえれば良いかなというところ。

石井 そういふものの考え方が同じ日本であっても違っていたというのが、私としては感じられました。

渡邊 時間的な距離がある対象を考える時に、そういったも

2011 年 6 月 1 日 本郷キャンパス史料編纂所

のを意識しながらやらなきゃいけないというのが、歴史学をやる上ではある。それを、日常的なところで、いろんな距離のある他人との関係の中で、同じようなことを意識しながら関係を持っていくというところに応用できれば。

石井 それってすごく重要なメッセージですよ(笑)、特に日本と中国みたいな、近現代にいろんなことのあった関係では、そういうところで今の自分たちに逆照射できるように、ものを一緒に考えるというのは重要なことだと思います。



それをもう一歩えぐっても良かったかもしれないですね。彼らに、例えば今渡した材料で何か考えて発表してもらおうとか。

渡邊 掲示板(本報告集 P24-)で出した追加の質問は、多分発想としては、史料の読み手に雑掌とかと同じ発想が出てくるタイプの別の材料を出して考えてもらった。材料によっては同じ思考が出てくる場合もあると。授業では距離感とか違和感を感じるものを見てもらったけど、それだけではないので。ある意味で対になっていると言えば対になっている。

石井 6 時間じゃ足らなかったんじゃないですか？(笑)

渡邊 (笑)あれはあれで一つ終了はしてるんで。前近代史をやる時だったら常に史料ってのは不十分な状況で考えることが前提になっている。問題の解答が無いというのが解答で、そういう記録の状況の中で、その向こう側にある記憶ないしはその記憶のもとになった社会の状態などを考えなきゃいけないという状況。完全な解答が出るわけではないという側面も、できればわかってほしい。ただ、詰められるところまではきちんと詰めたなきゃいけないというところかな。

石井 そのメッセージはすごく伝わったと思います。

統一テーマの中で 全体としてつかんで欲しい何かを 設定しても良いかもしれない

石井 もっとこうであつたらよかったとかそういうのはありませんでしたか？ HP の作りとか、テーマとか。

渡邊 テーマは難しいと思いますよ。ちょっと私、他の先生の講義を聞けなかったというのが一つ心残りではありますね。直前に顔合わせだけしたような状況で、事前に少しお話が出来ていたら、というのは無くもないです。せっかく全体で統一した話なので、講師間の連絡というところでは、さびしいところがあったかなという(笑)。一番心配してたのは、記憶と記録っていうところの定義合戦になっちゃわないかなという。その定義の違い

を越えて何か話ができるかっていうところが。

石井 でもそれができたら面白いですよ。

渡邊 哲学的な定義とか、植物を対象にしたときの定義とか、まあ歴史学、現代史レベルでの定義とかがあって、それに基づいて記憶と記録という言葉が講義の中では使って組み立てられているので、それらが横につながった時にどういう風になるのかなあっていうのは、横から見てみたい(笑)。

石井 若澤さん、どうでしたか？ 参加して。

渡邊 (若澤さんが参加した) 前の方は歴史ばかりだったから。

若澤 でも逆に、同じ歴史でも、これだけ立ち位置が違うんだというのとか、あと記憶に価値を置くのか記録にアクセントを置くのかとか、やっぱり全然アプローチが違って、一つの学問の中でもこれだけ立ち位置があるんだということがわかって、それはすごく面白かったですね。

渡邊 いろいろあるってところまででいいのか、そこから更にそれらを混ぜ合わせるなりして一つ全体として何か出そうとするのか。こちらで用意する必要は無いのかもしれないですけどね。予定調和的にこういうのを全体としてつかんでほしいみたいなのはなくて、学生の中でどう出てくるかっていうのを見た方が良いのかもしれないですね。

石井 でも予定調和的な予定を最初に設定しておいて、実際に学生から出てくるのはそれに合致しなくても、一応どこかに設定しておいてやってみるという方が良いかもしれない。

渡邊 残念なのは、東大の学生は全部を聞けないっていうのがね。一通り終わった後で、日本側の学生と中国側の学生と全体でお話するときにも、中国の学生は全部を聞いているけど東大の学生は一部しか聞いていないっていうのも条件が下がってきちゃうので。その辺の所のレベルの揃え方が、全体として何かをという話になった時にどうするかは考えなくちゃいけないのかな。やりっぱなしにしないというのは大事なことだと思うので、今回の一通りやった講義のものから、行ってきた学生たちが、集まって記憶と記録というテーマに基づいて何か出そうとしているかということですよ。個々のレポートとしては出すけども、全体として学生たちが何を受け取ったかという成果を、可能なら中国側の学生も含めて、討論する場合は、あまり期間を置かずにあった方が良かったんじゃないかなとは思います。

石井 そうですね、それはそうだと思います。それこそ遠隔講義のシステムを使って、学生たちを何らかの形でチームを作って、それぞれに準備・発表をしたら、学生発表みたいなのをやるというのも一つの手ですね。

渡邊 せっかく統一的なテーマでやっているのだから、全体として何を受け取れているかということを出せる場所を作ってもらった方が面白いかもしれない。個別のレポートを考えるのも、確かに成績とか、行った成果としてはありますが。

石井 来年から、派遣した東大生も成績評価の対象となるとか。

渡邊 良し悪しですよ、結局教養教育って何なのかという話になりますが、そういうところで日本史の話をする、一生懸命メモを取ると思うんですが、六波羅探題とは何かとかそういうことばかり気にして、漠然としたものをつかんでくれるかっていうと。

石井 やっぱりそこまで導けるように、教員側もある程度筋道をもうちょっとつけてあげる方が良いですかね。どこまでサポートしたら良いんだろっていうのがいつも悩むところなんですよ。学生のレポート読んでいても、そこから自分で考えてみたり、考えるということを目の当たりしてショックを受けた学生がいれば、その知識をすごく正確に記録して、これはこうだったって説明をし直す学生もいるし。

渡邊 多分、何を聞こうとしているかということにもよると思います。だから、試験問題でどういうのを出すかというのが。ある意味試験問題なんて、授業をやる前に言っておいても良いかもしれないんですけどね(笑)。

石井 今回筆記試験でやるというのは、日本語科からの要望なんですよ。決まった時間内に意見を出させたいということだったので、今年から筆記試験になったんですけども。

渡邊 試験というのも難しいですね、何を計りたいのかということが明確に伝わっていない。筆記試験で日本語科ってところがね、日本語の技能という側面がどうしても出てきそうなので。そこがちょっと心配と言えば心配。

石井 向こうの学生さんは3年生4年生になったら、もう日本語の勉強は必要ない、むしろそれを道具として考えるという方向へ方向転換したいらしいんです。その一環として東大の集中講義もあるという扱いを向こう側もしているそうです。それができるのはすごいなと思いますけどね。

渡邊 規模の問題ですね。

石井 規模はあまり大きくしない方が良いんじゃないかとは思ってるんですけど。そうしちゃうとこの集中講義の良いところが無くなっちゃうと思うし、一人一人を大切にできるようなそんな学生交流や講義であってほしいと思うんですけど。

学問として成立する最低限の方向さえ守れば、

あとは何を考えても良い

そういう意味ではどんな学問も自由につながれる

石井 準備大変でしたか？

渡邊 キツかった……！ 普段授業していないので、授業のネタが基本的になくて、あの時使ったパワーポを持ってきてやろうとかそういうことができないので。話は古典的なんですよ。研究としてオリジナリティを出しているものじゃない。ただ授業としてどういう形で出すかというのが。



石井 あれは相当組み立てられた授業でしたね。完璧って思いましたもん。

渡邊 完璧じゃないですよ、シナリオなんて一切作っていないし。用意したこと全部喋ったわけじゃないですし、言い忘れたこともありますし。いろいろネタを仕込んでいったのが滑ってる部分もあるだろうなと思ひながら。学生の感想とか見ると、討論会の方が面白かったみたいなの(笑)。

石井 でもそれっていいことかもしれないというか。すごく自然に入り込めるというのはうらやましいです。

若澤 その前の授業って、割と日中関係とか、感情的なレスポンスが出てしまうから、如何に感情的なものと理性的なものを見合わせていくかというのが一つのポイントだったと思うんですが、先生の授業はそういうのが全く逆で、全然かけ離れたものに対して如何にコメントしていくかという練習にはなっていて。やっぱり教養ってそういうものじゃないですか、違う立場のものに如何に自分で反応していくかという。そういう意味では面白い講義だったと思います。

石井 教養教育ってどんなイメージを持たれていますか？

渡邊 文理融合っていう志向自体はあまりに肩に力が入りすぎている気はするんですけどね。方法として選び取るものの問題なので。

石井 むしろ研究者として研究を始めてから壁に当たった時に、そこからどう突破するかというときに、教養教育的なものの考え方ってすごく必要になってくると私は感じるんですね。むしろ今回の集中講義って、教員側が聞いていたらすごくいろいろと啓発されるような講義だったかもしれない。

若澤 渡邊先生が以前、歴史学は自由な学問だとおっしゃったのが印象に残っていて。やっぱり歴史って、史料にすごく圧迫されているイメージが強かったから。ひっくり返せば、史料があれば何でもできるし自由にしゃべっていいんだというのが、ああナルホドなと思って。

渡邊 それぞれの学問が学問として成立するには、最低限の方向があるので、そこさえ守れば、あとはそこで何を考えても良いという。そういう意味ではどの学問も自由なはずなんで、その自由の中でいろんな学問はつながりあっていけるはずだと思うんですよ。

全体として何が提示できたかというのが踏まえ 今回のテーマについて総括をきちんと行うべき

石井 今回記憶と記録というテーマを掲げたんですけど、去年は身体論で、じゃあ来年は何をやるかってなってくると…。

渡邊 記憶と記録っていうのについて総括した上でないと出てこないでしょうね。全体として何が提示できたかというのが踏まえたところで。

石井 やっぱり総括の会って開いた方が良いですかね？

渡邊 少なくとも、LAPとしては何らかの総括はしていかないと駄目でしょうね。講師同士で何かやった方が良くと思います。ただそれぞれがやった講義を何も知らないでばっと会ったところで、ただの飲み会にしかならない可能性が(笑)。私の講義はこうで学生の反応はこうだったっていうような話を並べたところで、次どうするっていう方法みたいなものは出てくるかもしれないけど、記憶と記録の中身について議論するっていう風にはならないような気がしますね。まあできたら面白いと思うし。

石井 やってみますか。先生から出していただいたことで勇気を得ました(笑)。私一人で言ってるのかなと思ってたので。

渡邊 本来あるべきものだと思いますよ。バラバラにやってそのまま終了というのではもったいない。非常に良い企画なので、これからもっといろんなところで注目されているような人が参加してくれればもっと面白いものになると思うので。

学生には良い経験だったはず

得るものがなかったなら、それは本人が悪い(笑)

石井 最後に、具体的にどういうところが良かったと思われるのか？

渡邊 私にとっては、授業をしかも中国でさせて頂いたというのは稀有な経験で。中国であるにもかかわらず言語的な障害を感じる事が無くやらせてもらえたというのは非常にうれしいことですし良い経験になりました。

石井 学生にとってもやはりためになるかなと思われませんか？

渡邊 一概に言えませんが、良い機会だったと思いますよ。何を求めているかによって、学生さんは不満なところもあるかもしれないけど、いろんな機会を含んでいたはずなので、仮に何も得られなかったっていったら、それはお前が悪いんだよって(笑)。意識のずれだとか、甘やかしすぎているところも締めすぎたところもあるかもしれないけど、いろんな機会を提供してもらっているはずなので。

(文責:赤木)

インタビュー

石井 弓 (特任講師/飯野・渡邊・廣瀬・渡邊・酒井・高橋先生回参加)
若澤 佑典 (地域イギリス科 M2/石井・飯野・渡邊先生回参加)

情報技術と時間感覚

廣瀬 通孝

講義概要



コンピュータは記録の道具である。ライフログ技術はこれまでとは比較にならないほどの密度での体験の記録を可能にした。それに加えて、VR 技術をもちいれば、その記録を高い臨場感で追体験することができる。未来についても同様、高度なシミュレーション技術は精度の高い予測を可能とするであろう。先端的情報技術を背景として、われわれの時間感覚はどう変容するかを考えてみたい。

記憶と情報科学

記憶は非常に人間的なものである。それに対し、コンピュータにとっての記憶は少々意味が異なる。コンピュータにとっての情報量(=ビット)とは確率(=どれだけ稀なことが起こるか)と定義されている。しかし、人間にとっての情報量とは、どれだけ重要なことが書いてあるか、すなわち意味論がどれだけ入るかということに尽きる。また、コンピュータ技術にはシグナル(=信号)があり、それに対してノイズがある。普通、シグナルとノイズは別物という前提があるが、ノイズとしての情報が数十年後に実はインフォメーションになりうることもあるように、シグナルとノイズの明確な分離は不可能である。

記憶に対し、記録は今起こっている出来事を後から見るという行為であり、思い出は何かの行為として記憶される。行為は何らかの原因があって何かをすると考えられるが、その因果関係も怪しい部分がある。その行為がどういうことによって引き起こされたかを理性的に捉えなければならない。

情報技術でビットの数が大きくなって、色々な情報を保存できるために、記憶と記録は容易に互換可能であるというのは半分正しい。一方で、それが全ての解だとは思えないで欲しい。

情報技術の今

本講義では、バーチャルリアリティ(VR)技術と、ライフログ技術が重要となる。VR 技術はコンピュータと人をつなぐヒューマンインタフェースの技術であり、三つ程の特徴を持つと言われる。一つ目は Presence(没入的臨場感)であり、3D の CG の世界に本当に入り込む感覚を与えられる。二つ目は Interactive であり、目の前の環境を実際にいじることができる。そして三つ目は Multi-sensory である。コンピュータは今まで視覚や聴覚が



中心であったが、さらに触覚、味覚、嗅覚などのいわゆる五感に情報技術が飛び付き始めた。VR 技術は今ちょうど第 2 世代と言われており、室内から離れて我々の生活空間のいつでもどこでもバーチャルな体験ができるようになったことが第 2 世代の特徴である。また、VR は可視化技術でもある。「見ることは信じること」と言われるが、可視化の技術は、情報を理解させる意味で非常に強力である。

ライフログ技術は、その名の通り、人生を記録する技術である。いわば日記のようなものであるが、人間は忘れることができないのに対し、一旦コンピュータを通した情報は明確に消せと



資料 1: VR 技術の 3 つの特徴

言わない限り半永久的に残る。見方を変えると、これはコンピュータの最大の欠点である反面、ライフログをやりたい人にとっては強力なツールとなる。ライフログの方法は色々あるが、たとえばカメラを使用して、ある部屋での出来事を全て保存する仕組みを作ることも可能になった。ただ、一人一人の体験という観点からすると、イベントとは人間に付随して起こるものであり、人間に付随して記録しなければならない。そこで、人間の身体に付随して持ち歩ける＝ウェアラブルコンピュータという考え方が出てきた。コンピュータがパーソナル化し、さらにインティメイトなものとなりつつあることは自然な流れである。

モノとコトの保存

以上の技術は、社会における知識や知恵の記録装置であるミュージアムに応用されている。歴史における知識や知恵を後世に伝えるための最も強力な方法は、モノにして残すことである。一方で、モノだけを保存するのは不十分であると言える。たとえば、電車など動的なものを動かすとなれば非常にお金がかかってしまう場合や、ゲームなど壊れる危険性のために触れられないものなど、「展示」と「保存」のジレンマが存在する。また、従来のホワイトキューブの中でおこなわれてきた展示では、展示物が生まれた時代背景のような文脈、すなわち「コト」を保存することは非常に難しい。文脈が伝えられないのは美術館の根本的な欠陥と言える。これに対し、空間内の滅茶苦茶な移動や、時間の逆流など時間軸を伴った変化をデジタルで見せるなど、バーチャルでしかできない体験を作り出すといった、デジタルでやれることをするのが VR の役割となる。

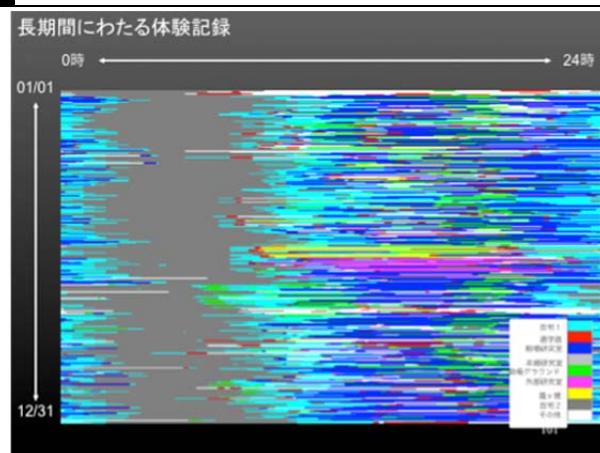


資料 2: 展示のジレンマの1つ、静的保存と動的保存の問題

我々は、さまざまなセンサによって現実世界の情報を記録できるようになった。一方で、コトが残す方法は決まっていない。たとえばある町並みを記録したときに、街並みの外観よりもその場所の賑わいやイベントの方が重要な情報であるにもかかわらず、全てを記録することはできない。全ての記録を残しておくというのは実は凄いことなのである。現在では、Twitter や GPS などを利用して、さまざまな記録を全て取ることもできる。大事なのはこれをコストを掛けずに取れることである。次の問題としては、大量の情報から必要な情報をどのように探すか、つまり検

索について考える必要がある。

過去と現在と未来



資料 3: 長時間にわたる体験記録

VR 技術を利用することで、これからは過去に基づいて未来を語ることもできる。たとえば電車の乗り換え案内のように、コンピュータのシミュレーションによって先の行動を変化させたり予測したりすることができる。生身の人間には将来を見ることはできないが、コンピュータ技術によって、ある意味で将来を見通せるメガネのようなものを手に入れることができていると言える。現在では、ライフログ技術によって、個人の属性や特定の場所における行動パターンの分析や、未来の行動を予測することもできる。これは半分占いのようなものだが、行動予測によって個人の行動をダイレクトにコントロールできることが分かってきている。

高齢化社会とデジタルオーラルヒストリー

日本は現在、物凄い勢いで高齢化が進んでいる、普通は若い人が高齢者を支えるが、将来的には正直無理な図式であり、新しい社会システムの設計が必要となる。ここで情報技術は何ができるだろうか。

高齢者は、確かに身体は衰えるが、老いるほど経験や知識は豊富に蓄積している。そのような情報をデータベース化し活用することで、高齢者の強みを社会に貢献してもらうことが可能になると考えられる。

そのための例として、現在、デジタルオーラルヒストリーという、高齢者に過去を語ってもらったことを、後世への伝達や高齢者同士のコミュニケーションの活性化のために体系化する試みを始めている。高齢者に過去を語ってもらうことは、記憶支援や自分が生きてきたことを残したいという欲求、社会的貢献に近い欲求の充足など、さまざまな面で良いことと言われている。このようなところで情報技術を用いることは有効な反面、いくつか



資料 4: 非言語的な知識のデジタル化

の問題点もある。

たとえば、ほとんどの場合、知識や経験は暗黙知化されており、無理な言語化は誤解を招くことが多い。そこで、ライフログなどで全てを記録することで、たとえば映像などから重要な情報を取り出し、言語化に役立たせることが考えられる。また、知識の表出はアフォーダンス的なもので周囲の環境に影響されることが分かっており、先述のホワイトキューブのように、高齢者を真っ白い部屋に連れてきてても過去を語るための取っ掛かりがない。そこで、たとえば当時の映像を見せるなどすると、高齢者は驚くほど当時のことを語ってくれる。

こういった形で蓄積された知識を情報技術によって後世に伝えていくことで、高齢者が若者に影響を与える、あるいは、そのような知識を高齢者の間で共有することで高齢者のコミュニケーションを活性化させ、デジタルアドレナリンとも言うべき高齢者が元気になるきっかけを作ることができるかもしれない。その結果として、高齢化社会問題を解決する糸口を作れる可能性があると考えられる。

デジタルと時間感覚

先述のように、デジタルによって、我々は過去あるいは未来を見ることができるようになるかもしれない。我々生身の人間は歴史を持っており、かつて未来はぼやけたものであった。しかし、それが情報として流れるようになった今、恐ろしいほど過去と未来という時間を現実凝縮する事態となり、引いては現代は、現在において未来をどんどん消費する時代となっている。



他者の体験と自分の体験の映像をシャッフルしてどれが自分の体験かを当ててもらおうと、70%ほどの人は他者の体験を自分の体験と錯覚してしまうほどに、人間の記憶は曖昧なものであり、完全に論理的な人間はうつ傾向にあると言われるが、ライフログによる完全な記憶が持つ最大の危険性は、それが完全に過去を再現し、人間の記憶の不完全性を証明し、記憶について論理的であれと迫る点である。人間がライフログを漠然と忌避する気持ちを持つのは、まさにこの点を意識するからではないだろうか。コンピュータというものがアイデンティティそのものに入ってくるある種の怖さのようなものが、一番重要なのである。

(文責：櫻井)



講義 BBS より

◆ 東京大学学生

2011/03/08 00:20

興味深い講義をありがとうございます。遅くなってしまいましたが、コメントを挙げさせていただきます。もちろん先生も意識されてると思います、記録するという技術の危険性・問題点についてです。

一つは、コトの記録としてのデジタルミュージアムの利用の限界です。例えばある電車の引退運行を、写真、音声、ツイートなどで地図上に膨大な情報を配置・記録するという試みがありました。このような記録は有用ですが、しかしこれを利用する方法を開発・習得しなくては活用はできません。当然ながら、記録で満足せずに利用の方法も追求しなくてはなりません。



なお、検索という方法に関しても自分は少し疑問があります。検索にはキーワードが必要です。そしてキーワードが少しでも外れていた場合（例えば「廣瀬先生」と「広瀬先生」）、必要とする結果に辿りつかない可能性があります。そこにモノがあれば別です。図書館で「廣瀬先生」の本の横に「広瀬先生」の本があれば発見できます。しかし検索結果は他の類似要素を隠し、横糸的な広がりを持ちえないという欠点があると思います。

もう一つは、全ての「記憶」を記録しなければならないという強迫観念です。人はいつの時代も、誰でも、全ての自分経験を記録したい、忘れたくないと思うようです。日曜日のレジャーで四六時中ハンディカムを回し続ける、そんな使命に駆られるお父さんの気持ちもよくわかります。しかし、人間の記憶は忘れたり、錯覚したり、美化したりすることで形成されると思います。そして断片的な写真や音楽やにおいによって、甘く追憶される。そういう性質を持っていると思います。そのため、記憶の領域にまで記録を侵入させず、あくまでライフログを実用領域にとどめておくという倫理観が必要だと思います。



明るい寝たきり生活については、ディスカッションで話題になりました。明るい寝たきり生活、つまりベッドで寝ていても頭の中で考えることが具現化される。でもそれは人間が身体性を失った状態であり、いわば夢を見ていたり、自分の本当の身体を忘れるほどテレビゲームの主人公と同化しているのと同じです。つまり、技術の進歩によって、ずっと自由で楽しい夢の中にいるという、明るい寝たきり生活が送れるようになるかもしれません。みなさんはこの寝たきり生活をどう考えますか？

とはいえ、技術を悪というつもりは全くなく、技術は素晴らしいものです。私はこれを使いこなす側が常に意識し続けなくてはならない、記憶と記録の峻別に関する倫理観といった、考え方の構築の必要性を感じたということです。テーマに直結した、非常に考えさせられる、そしてワクワクする内容でした。ありがとうございました。

廣瀬先生インタビュー

2011 年 6 月 1 日 本郷キャンパス工学部 2 号館 廣瀬研究室

廣瀬 企画は好評だったみたいですね。

石井 そうですね、学生さんにも面白かったみたいです。

廣瀬 通訳の人達は実力ありましたよね。今回は逐時通訳でしたよね、話にはタイミングってありますけど、リズムの取り方とか割り込みの入れ方とかすごく上手い子がいましたね。

石井 先生逐次通訳お好きですね。

廣瀬 逐次の方が良いですね、同時通訳もインタラクションしてるけど、テレビに向かって話している気がして。逐時は生の反応を横から聞けるので、よりレスポンスブルな感じがする。

石井 確かに逐次の方が、授業自体がコミュニケーション取り合ってる感じはありますよね。やっぱり授業もインタラクションが重要なんでしょうね。

廣瀬 どういうレベルでインタラクションを返すかをちゃんと考察した方が、遠隔授業としても面白いですね。遠隔授業は、今は流すのが一番良いと言われてはいるけれど、もっと中間構造を置いた方が良いのかもしれない。

石井 中間構造、例えばどんな？ 画面の向こう側に誰かがいて、遠隔授業 by 逐次通訳みたいな？

廣瀬 そうそう、テレビ講義をしているのではなくて、通訳とテレビ電話をしている様子、つまり一対一で喋っている内容を受講者みんなが見る感じ。

石井 一方から片方へ情報を流すじゃなくて、講義自体がコミュニケーションでそれを見るというか。

廣瀬 それはメディアとしてみれば電話をしている感じになってインタラクティブになるんですよね。同時の場合は誰に向かって話しているか分からないけれど、逐次だと通訳する人が横に座っているので、こちらが話していることが分からないと、「分からない」という顔をするじゃないですか。そういうところまで含めて見た方が良いのかもしれない。少人数で喋る方が得意な人と、大勢相手に喋るのが得意な人といるので、先生にもよるのかもしれないですけど。僕は少人数相手の方が良いです。大人数相手だと、もう百人いても千人いても同じことですから。

理系にはプログラム書くとか**データを集めること自体に興味があって****内容には関与しない深海魚みたいな研究がある**

石井 情報学って、情報を集めてどうしてこうという風に思っているんでしょうか。先生の場合は色々あると思うんですが。

廣瀬 情報の読み解き方ですね。もしかしたら情報学って固有の分野がないので。

石井 オーラル・ヒストリーのような？

廣瀬 オーラル・ヒストリーが将来情報をまとめるものだとす

ると、それは情報に意味をつけるという行為ですよ。

石井 これは私の個人的なイメージなんですけど、オーラル・ヒストリーって、情報を聞きとりによって集めることじゃないんですよ。何を見るかがオーラル・ヒストリーであって、もしかしたら集まった情報から何を見るかが情報学……

廣瀬 そうなってきたわけですよ。最初は集めるとかすごく即物的な話から入って、データベースができちゃうと、そのデータベースに意味を持たせるみたいな話でコンテンツ論てのができてきて。それでその先に誰かが面白いこと言い出すと、コンテンツそれ自身てのはもう意味が無い。オーラル・ヒストリーも完全に地図を与えるだけかというところではなくて、やっぱり自分たちが少しは作るってところも関与しますよね。今それやってる人達ってのは情報工学の人達でもかなり文系に近付いていて。文系の人達って元々その下はやらないじゃないですか、理系はその下があるんですよ、プログラム書くとか。データを集めること自体に関して興味がある訳で、内容に関しては全く関与しないって深海魚みたいな。

石井 分業体制じゃないとできないというか？

廣瀬 工学系っていうのはその辺の分業体制はある程度できていて、我々の分野でもセンサ作ってる人達っていうのはそのセンサが何の



役に立つのかはあんまり興味持たなくて、でもそのセンサはこんなに小さくなりましたよ先生！みたいなのは持ってくる。そのセンサをこういう機械にまともめれば 1 日中持ち歩けますよね、みたいな機械ができ上がって。この辺になると文系の先生方なんかは、これ使って何のデータが取れますか、みたいな話をしていく訳ですよ。理系は集まった情報から何かを見ることの構想力に弱いんですよ。多分文系のほうが上位層のことをやっているの、それをどういう視点から見たら面白いんじゃないの、とかいうのは文系の方の方が面白い視点言いますよね。物にこだわらず自由な発想で言うから。専門の蝸壺化現象の良い面と悪い面ってありますよね。リベラルアーツっていうのはそこら辺打破するところから始まるんだけど、横に広がるからこいつ何やってんだ、みたいな。

石井 領域ができちゃうんですけどね……。

廣瀬 で、今情報科学はソーシャルな方に向かおうとしてるじゃないですか、そこから VR みたいなものっていうのも、携帯電話で一人一人が取る写真や Twitter みたいなものを使って、みたいな話になってくるとメディアによるコミュニティの生成みたい

なテーマと絡みあうように成るわけですよ。

石井 なるほど。文系で言うと、そういう私たちが研究しているのは最終的には結局人間に返ってくるところがあるんですよ。

廣瀬 その意味では人間にいつかあうのかもしれない。情報科学の膨大な情報の中から逆にそういう人間がみえてきたら面白いことだと思いますよ。

石井 今回期待したのは、元々掛け離れていたはずの情報と人文系を、逆に情報の方から人文科学もそうかもしれないですけど、相手を見た時に、それこそ人間の持つ記憶みたいなものを逆消去していったら、人文科学の中では見えない新しいものも出てくるんじゃないかと思ったんですよ。

廣瀬 そうですよ。感性工学ってのが一度情報から感性見ましょう、みたいな話が一回あって、そこでアートと情報が一旦一緒になって、それは大成功って説と大失敗って説が二つあるんですけど、結構いろんなコトやってきたんですよ。ああいう芸術とか感覚的な部分は論理的だって意味では文系も理系も一緒ですよ。さらにその上に芸術っていう山にいる訳ですけども、それも何か近いんですよ。

石井 でもそれでは割り切れない部分をどう考えていくかっていう。

廣瀬 全部論理だけで行こうとした時に駄目な部分ってのがありますよね、だからそれを考えている訳で、論理は同じかもしれないんですよ。依然として謎なのが、それこそ絵の方ですよ。パターン情報系ってのは分からない。

石井 ピカソのキュビズムみたいなのはちょっと分析されているみたいですね。

廣瀬 あるかもしれない。ライフログにおいて、大量の視点から取った写真を見せたらこれはキュビズムだって言われた。キュビズムがやりたかったことっていうのは実はこれなんですっていう。でも、そういう分野は良いですね、確かに面白いですよ。だから講義に限らず何かやりたいですよ。

ライフログで記録を取る時に

ゆらぎのない軸として空間軸と時間軸を設定した時 何が見えてくるかという話をしました

石井 今回の「記憶と記録」というテーマでは先生はどういうところから話を絞られたのでしょうか。基本的に普段からそういうテーマでお話をされているのでしょうか？

廣瀬 記憶と記録っていうと、ライフログも基本的にはそういう話ですから。ライフログでさまざまな記録が取れることが分かっているんで、そうすると何かの軸というものを考えるということになりますよね。そうすると一番考えるのは空間軸と時間軸というテーマなんだけど、ゆらぎのない軸としてそういうものを作ってみたときに、何が見えてくるかという話をしました。

石井 面白かったのは、最後に記録についてまとめたときに、

現在の必要性によって過去と未来から情報が集められてきた、集まってくるんだという話です。

廣瀬 それが良いことか悪いことかという価値判断は何もしていないですけど、言葉の裏には悪いことかという人もいますよ。経済学的な観点から言うと、現代、あるいは瞬間の時間的価値を挙げているんですよ。ただし、その代償として未来と過去が犠牲になっているとも言える。その時間の使い方そのもののどちらの方が良いかということはあまり考えていない。

石井 歴史的に見て面白いのは、現在の必要によって過去を再構築したのが記憶であるということでしょうか。

廣瀬 そういう言い方もありますよね。都合のいいことしか覚えていないみたいな。

石井 歴史的にはときどき言われることなんですよ。でもその軸の中に未来は含まれていないので。

廣瀬 コンピュータによってあるシナリオに基づいて未来を予測できるということは意外性も入ってくるんでしょうけど。だけど、90%OKとか駄目とかいうのは予測と言えますよね。

石井 そのお話をもっと具体的な世界に還元してみると、たとえばコミュニティみたいなところで未来を今に持ち帰るといって、未来を今に使うというか。

廣瀬 未来を見ることが良いことか悪いことかという話題は非常に文系的な話題だと思いますね。理系は実現できることと社会の人が考える善悪を切り離して考えちゃう。

石井 でも、記憶に良いも悪いもないので、経済学的にはもしかしたらリッチに時間が使えるかどうかということかもしれませんが、未来を今どう使うかということをもうやっているかもしれないと、私はそう感じました。

廣瀬 あるものについての価値観がこうあるべき、という話と、それを使ったときにこうなっちゃうんじゃないの、という話がもう一緒になっちゃってるんですよ。個人的には理系的なことを言えいいんだと思うし、その方がより学者的なのかもしれないですけど、現実としてそういうのが受け入れられるかどうかはちょっと分からないですよ。その意味で言うと、文系理系問わず、アカデミズムも研究者の人達が言うのは、もしかしたら理系的と我々が今言っているようなことなんじゃないかと。無色透明で何の感動もなく、というところもあるかもしれないですよ。

石井 もっと色々聞きたいと思いながら、もう時間を超えてしまいましたね。

廣瀬 また通常の講義でも今回みたいなことをやるんですか？

石井 またやります。また参戦していただければと思います。ありがとうございました。 (文責：櫻井)

インタビュー

石井 弓 (特任講師／飯野・渡邊・廣瀬・渡邊・酒井・高橋先生回参加)
杉谷 幸太 (地域アジア科 D1／廣瀬・渡邊・酒井先生回参加)

植物が示してくれる記憶、記録

渡邊 雄一郎

講義概要



植物は、人間が地球上に誕生するよりはるか昔から存在し、我々が生きている環境は植物によって生み出されたといっても過言ではない。そのように長い歴史を持つ植物は、人間よりはるかに多くの記録を持っていると考えられる。植物にとっての記録を遺伝情報として捉えた時に、植物にとっての記憶とは何なのか。そもそも植物に記憶は存在するのか。この答えのない問いに対し本講義を通してそれぞれの答えを見出していきたい。

遺伝情報という記録



我々人類が地球上に誕生したのは15万年前であるのに

対し、植物が地球上に誕生したのはそのはるか昔、38億年前である。その長い歴史を刻んでいるのが遺伝子という記録である。遺伝子は人間だけが持っているものではなく、どんな生物にも共通して存在しており、タンパク質合成のための暗号のようなものである。A、T、G、Cという遺伝情報の配列によって、体内で合成されるタンパクが決定される。ただ、この遺伝子だけがあれば生きていけるわけではなく、生物は遺伝子の発現を調節することで生命を維持している。そのため、遺伝子の量と生物の大きさや高等性は必ずしも一致しない。たとえば、ミジンコの遺伝情報量は人間のそれをはるかに超える。これは生物が、持っている遺伝子を全て使って生きているのではなく、その発現を調節して生きていることの分かりやすい例である。もし、ミジンコが全ての遺伝子を使って生きているとしていたら、巨大ミジンコが出来上がるだろう。またこの例は、遺伝情報が多いからといって高等な生物というわけではないことも示している。

そう考えると、進化とはただ遺伝情報という記録を増やしていくことではないと考えられる。恐竜が絶滅した6500万年前を例にとると、この時生物が絶滅するほどの環境変化を生物が記憶することによって、その記憶と記録の相互作用から新しい細胞の運命が決定された。つまり絶滅後に芽生えた命は、遺

伝情報という記録と環境の記憶から生まれた偶然の賜物であるといえる。

人類は今までの遺伝情報の蓄積によって作り上げられた高等な生物かのように考えがちであるが、必ずしもそうではなく、遺伝情報と環境との相互作用によって奇跡的な確率で生み出された生物なのである。

植物における記憶と記録

植物に神経はない。しかし植物は外界の光・温度・湿度などを敏感に感じ取り、それらの情報を統合し、自身の成長の方向性を決定する。植物において成長はどのようになされるのか。植物には茎頂分裂組織という部分がある。これは新しい細胞を増やす部分であり、植物の中でも先端の一部にしか存在しない。つまり、植物に存在する何万個もの細胞の中には、茎頂分裂組織のように増えていく細胞もあれば、成長しない細胞もあるということである。これは遺伝子の発現の制御によるものである。植物は外界の刺激からどの細胞を増やすかを決定し、それぞれの遺伝子の発現を調節しているのである。このような情報を集め、統合するという営みは人間の記憶に相当するものだと考えられる。

植物において記憶は、成長だけでなく生殖にも関与している。植物はおしべとめしべをもつ、言わばホモセクシャ



授業中に回されたシアンバクテリアを見る学生



ルな生物であり、おしべとめしべの遺伝子がある。この調節は、植物が過去数年の記憶をもとに行っていると考えられる。その他にも、葉のつき方がフィボナッチ数列になっている植物は、それまでの葉のつき方の記憶のもとに、次につく葉の位置を決定していると考えられる。

以上のように、普段何気なく見ている植物の動態は、沢山の記録と記憶の相互作用によって生み出されているのである。

環境変化と記憶



これまで植物において記録が使われている事象について見てきたが、その使われ方は一様ではない。とくに、植物は自身で動いて危機を回避することが出来ないで、危機的な状況にあるときほど、ストレスに耐えるための遺伝子や子孫を残すための遺伝子を使うとする。そのため、意外にも過酷な状況で育った植物ほど寿命が長いという特徴を持つ。

これは我々人間にも当てはまることなのかもしれない。何事もなく安穏と暮らすよりも、過酷な試練を乗り越える方が、人は強く成長することが出来るのかもしれない。我々が誕生するまでの進化の中で、様々な生物が危機的状況を乗り越えてきた。その記録は我々のもつ遺伝子に刻まれているはずであるから、それらを使えば、どんな厳しい状況も乗り越えられる能力を人間は持っているのかもしれない。

植物が記憶するしくみ

植物においても我々と同様に記憶のようなものがありそうであ

ることは分かったが、どのように記憶しているのだろうか。

エピジェ

ネティクスという分野が現在の遺伝学の中で注目されている。これは、DNA の配列が変わることなく、後天的な要素によって DNA やそれが巻きついているヒストンというタンパク質が修飾を受ける現象のことである。この修飾によって特定の遺伝子の発現が抑制されたり、反対に今まで発現していなかったものが発現することがある。植物の記憶においても、エピジェネティクスが関与しているのかも知れない。つまり、気候変動などを感知すると DNA 構造に修飾を施し、特定の遺伝子の発現を植物自身で変えている可能性がある。これは一種の記憶という行動と捉えられると思う。



中国と日本に見る植物の記録

梅林、桜並木など特定の花を集め、その花を愛でるのは中国と日本に共通する特徴的な文化である。今でこそ、花見と言うと日本では桜のことを指すが、奈良時代以前は梅のことを意味していた。梅は日本においては家紋に使われるなどシンボリックな要素となっており、中国からやってきた梅が、昔から日本人にとって特別な意味を持っていたことを表している。

講義後、今回の授業の一環として、南京にある梅林で南京大学の学生さんと共に花見をした。梅は南京市の市花であり、南京の方々にとっては大切な花なのだそうだ。

国や文化は違っても、花を愛でる感情は同じである。梅は、中国と日本が昔からつながっていたということを現代の私達に示してくれる記録として咲き誇っているように感じられる。



(文責:大屋)

講義 BBS より

◆ 第5回渡邊先生講義&討論会について

東京大学学生 2011/03/17 01:18



一昨日、昨日に行われた渡邊先生の講義内容と討論会のようすについてまとめさせていただきます。(私の勝手な解釈も含まれているかもしれませんが、申し訳ありません。)

記憶と記録という文系で扱われそうな題材について、渡邊先生は植物という生物学的な観点からお話してくださいました。

植物において記録と言えるものは遺伝情報で、遺伝情報を記録とした時に記憶とは何か?という事を聴講者それぞれが考えさせられる講義でした。遺伝情報から私達はたんぱく質をつくり、生き物として形づくられますが、その遺伝情報は全て使われているわけではありません。たとえばミジンコは人間より遺伝情報を沢山持っていますが、使っている部分がわずかなのであんなに小さな生き物なのです。どのように遺伝情報を選択して使っているか、というところに記憶の働きがあります。植物

をとりまく様々な環境変化を植物自身が記憶し、そこからどの遺伝情報を使うかを選択して植物はしなやかに時代を生き抜いてきたのです。見た目によらずたくましく生き抜いてきた植物があったからこそ人間は生きることができているので、その恩恵に感謝し、自然によって生かしてもらっているという謙虚な姿勢を忘れないようにしたいものです。

講義の中で印象に残ったのが、植物は厳しい状況にいるほど試行錯誤を繰り返して長生きするということでした。現在、日本では地震という大災害に見舞われ、厳しい状態にあります。そんな中で中国を始め世界中の方々が支援してくださっています。そのことに感謝しつつ、植物のように試行錯誤を繰り返してみんながより強く生きていけることを願っています。

討論会では文系の学生さんから科学的な事象についての質問が多く寄せられました。遺伝子操作については、研究の現場だけでなく日常生活でも行われているのか、めしべとおしべの違いは何か、それらがなかったらどうやって植物は生きていくのかなどなど。

実際にみんなで梅も見に行きました。中国にとっての梅、日本にとっての桜、どちらも特別な愛情をもってそれだけで梅林や桜並木を作ります。それに対し欧米は庭園の一部だけ桜になっているものが多いそうです。花を見て“美しい”という共通の感情を抱くことによって南大と東大の学生さんの間の心も通じ合ったような気がしました。

まだ植物における記憶が何なのか結論が出ていないのでこれから酒井先生の講義内容と合わせてみんなで理解を深めて行きたいです。



渡邊先生インタビュー

2011 年 6 月 8 日 駒場キャンパス 3 号館

大屋 まず始めに、中国という国に対してどのような印象をお受けになりましたか？

渡邊 今回私は初めて中国に行ったのですが、行く前に抱いていたイメージより親近感が湧いて、行って良かったと感じています。なんだか、初めて行ったのに懐かしい気持ちになりました。そして、中国に知り合いが出来たことによって、中国という国をその人たちの顔を思い浮かべながら考えるようになりました。

大屋 先生が親近感を感じられたのはどのような点ですか？

渡邊 中国の学生さんの質問や授業の聞き方にも日本と通じるものを感じて、日本で授業を行うのと違いを感じませんでした。また、みんなで梅林に行けたのもすごく良かったですね。植物に接した時に素朴に感動する点なども共通していると感じました。

大屋 先生は南京で授業するにあたり、なにか配慮なされた事がありますか？

渡邊 やはり、南京大虐殺の事があるので、それについて避けるべきなのか、逆にそれを授業で扱うべきなのか迷いました。高橋先生の「記憶のエチカ」の授業(本報告集 P54)では正面からそれを扱っていらっやして、自分も遠慮がちになる必要はなかったのかなと感じました。きっと、双方が大人になって、距離をおいて扱うことのできるテーマになってきているのかもしれない。

脳や神経に縛られることなく

記憶、記録を捉え直してもらうきっかけになればいい

大屋 今回の講義は午前中に授業、午後に討論会という形でしたが、先生はこの形式についてどう感じられましたか？

渡邊 この形式だと、一方的に授業をやる形になってしまうと感じました。授業中に何かリアクションを得られる感じだったらもっと良かったと思います。

大屋 記憶と記録というテーマ自体についてはどう感じられましたか？ このテーマで授業を行うのは難しかったですか？

渡邊 はっきり言えば、植物屋としてはやりにくかったですね(笑)。同じ生物として、植物も人間と同じように記憶や記録にあてはまる現象があることを知ってもらって、脳や神経に縛られることなく記憶、記録を捉え直してもらうきっかけになればいいと思っていました。私自身、夏学期の授業の中でこの南京の経験が活きていて、今までにない視点で生物学について考えられるようになった気がします。縦でなく横の視点が身についた感じ。

大屋 確かに。文系的なテーマだからこそ、普段使わない脳の部分が活性化されるとか、違った視点でいつもの研究テーマを見ることが出来るようになった気がします。先生はこの南

京集中講義に理系の学生が参加することの意義は何であるとお考えですか？

渡邊 先程も言った通り違った視点を得られるというもあるけれど、中国のパワーを肌で感じられる事も大きな意義ですよ。中国は現在、莫大な予算のもとで、すごい勢いで研究を行っている。海外の学会でも中国人の発言意欲はすごく高い。そう言ったパワーを学ぶ良い機会なのではないでしょうか。そして、これから一緒に研究を担っていける関係になると良いですね。

大屋 私もドイツに留学していた時、留学生の中で日本人は私一人だけだったのに対し、中国人は沢山いました。そうやって、海外に出て自分のスキルを磨くという向上心の強さは素晴らしいし、見習わなくてはと思いますね。

渡邊 近年、中国が世界の中で台頭してきたかのように言われがちだけれど、欧米が台頭しているのはこの 200 年ばかりで、その前はずっとアジアが一番大きな勢力だった。だから、現在の中国勢力の大きさは、昔に戻っただけという捉え方も出来ます。日中の関係も、明治維新の前に戻ったかのように柔らかなものになってきているのかもしれない。

多次元で複数のシステムをひっくるめた感じの 東洋医学のような科学を通して 生命を支えているものについて考えてみたい

大屋 先生は集中講義を通して、日本と中国で共有し、考えてみたいテーマなどは何かありますか？

渡邊 ちょっと抽象的ですが表現出来ないのですが、私自身は生命の支えになっているものに興味があります。現代の生命科学は近代的で、欧米が主体になっている。でもその反対に東洋的な科学という



のもあって良いと思うのです。医学の世界でいう対症療法ではない東洋医学のように、点对点ではなくもっと、多次元で複数のシステムをひっくるめた感じの科学ですね。そんな科学を通して、生命を支えているものについて考えてみたい。

大屋 東洋的な科学っていう発想が私にとって、とても新鮮です。確かに私たちは知らず知らずのうちに西洋的な枠組みの中で科学を扱っているのかもしれない。生物の最先端は欧米にあると思いがちですし、論文を書くにしても欧米で発表された様式を真似して書いてしまいます。でも東洋の私たちにし

かない視点から科学すると、また新しい発見があるのかもしれませんがね。そもそも、生物って一つの因子によって生きているわけじゃなくて、様々な要素が複雑に絡み合っている。それなのに、一つの要素を取り出してきて、そこから結論を導き出すこと自体ちょっと無理がある事だと思います。

渡邊 なかなかそこは難しいですね。一つの因子に的を絞らないと結論が出せないっていうのもあるし。全部を統合して研究をするにはどうすれば良いかは分かりませんね。システムバイオロジーなんかをそれを解決出来るのかもしれませんが。集中講義を通して、こんな事について考える切り口を見つけたいですね。

自分の特定の研究をやっていれば良いのではなくて それを一般社会にどうアピールするかが問われている

大屋 今回の集中講義は、南京の学生さんが日本語が上手だったので問題ありませんでしたけど、中国人と日本人がコミュニケーションをとる為には英語を使うのが普通ですね。日本と中国はこんなに近いのに、どうして遠い欧米の言語を借りてなくてはならないのかと違和感を感じる時があります。中国語と日本語を交えて交流する事が出来たら、その言語の裏に流れている共通の文化的な背景なども共有出来るのではないかと思います。

渡邊 そういうことに気づく事が出来るのも駒場の良さですね。現在 EALAI (East Asia Liberal Arts Initiative) や LAP を含め横のつながりを作り出す取り組みをしているんですよ。生命科学構造化センター(現・生命科学高度化部門)にも一人中国人の方に入ってもらったのです。これからそういう方が増えて行くのではないのでしょうか。

大屋 でも実際のところ、なかなか文系理系の交流は実現できていないように私は感じてしまいます。先生方はお忙しいので、もっと私たち学生がそういう機会を自分たちで作りに出していくべきだと思います。学部 1、2 年生が同じキャンパスで学ぶというのも、色々な分野の友達が出来るという意味はあると思うのですが、私たちのように自分たちの専門性が高まってから文系理系で交流する事には、また違った意義があるのではないのでしょうか。

渡邊 確かに、昔の同級生なんかに会って「今、何やっているの?」と聞かれた時に分かりやすく説明するのは、学会での説明の仕方とは違ったやり方ですね。エネルギーも使うし。今の世の中は自分の特定の研究をやっていれば良いというわけではなくて、それを一般社会にどうアピールするかが問われています。そう言った面で良い練習になりますよね。

大屋 文系の友達と話していると、そんなところに疑問を持つのかって驚かされる事があります。そう言った新しい視点を持つ事ができるし、人に説明することでより自分の専門性が高ま

って、自分の立ち位置が分かる気がします。

実験というのは本来置かれていた状態から かなり距離を置いたものだとことを きちんと認識しなければならない

大屋 先生にとって植物における記憶と記録とは何だとお考えですか?

渡邊 授業でもこれは言わなかったんだけど、植物は社会的には農業と結びついてますよね。大規模農業や農薬を使った農業は欧米から入ってきた文化で、その目指すところはより安全な農薬を作り出すことにあります。でも、それとは逆行する考え方で、農薬を使わずに植物本来の形で育てるという農業を行っている人もいます。例えば、トマトはもともとアンデスの肥料もない高地で育つ植物です。だから水も肥料も与えない状態で育ててもちゃんと育つし、おいしくなる。トマトの中に、アンデスのような過酷な環境で育ったという記憶があるからですね。そんな風に植物が記憶を持っているとすると、現在行われている農業は植物を本来あるべき姿からだいぶかけ離れた環境においていることになります。研究も同じ事が言えて、実験というのは本来置かれていた状態からかなり距離を置いたものだとことをきちんと認識しなければなりませんね。

大屋 確かに、私が普段扱っている細胞もその細胞だけでは普段存在しませんね。周りに他の様々な細胞がある事によって初めて機能します。人間のあしたい、こうしたいという欲求のままに、本来あるべき姿を無視してしまっている面があるのかもしれないですね。そういうことに気づくためにも、中国と日本の持つ、「全てを包括する東洋的な科学」の視点が重要になって来そうですね。今回は貴重なお話をどうもありがとうございました。

(文責:大屋)



インタビューー

大屋 愛実 (広域生命科学 M1/渡邊・酒井先生回参加)
杉谷 幸太 (地域アジア科 D1/廣瀬・渡邊・酒井先生回参加)

東京大学×南京大学同時開催 集中講義に参画して

記憶と記録
渡邊雄一郎

私にとつての初めての訪中で南京に向かった。そして南京大学の日本語学科の学生と東大の学生と一緒に教室で講義に臨んだ。私の場合、三月十三〜十七日の予定であったために、出発直前の東日本大震災の発生によって、出発について議論があった。個人的に過去三回、訪中が果たせなかった経緯があった。最初が天安門事件、二回のSARSの発生による中止判断であつ



John Rabe の家(博物館となっている)

た。なのであの震災のとき、一瞬また駄目か、とも思った。ちょうどデスクに向かつていた。「記憶と記録」と題して植物を対象に研究をしている私がどのように流れを作つて話をするかを正直考えあぐねていた。幸運にも振幅の大きな揺れのタイミングで、目の前の書類たちがノートパソコンの上に落ちてくるのを予感し、退けることができ、デジタル記憶を失うことを避けることができた。これは行くしかない。

千年に一度といわれても、今生きている人間には想定外規模の震災である。過去の人たちが記録を残していたものが、現代人に教訓として活かされていれば、間接的であつても生きた記憶となつたであらう。実質的に物理的なものとして存在するだけでなく、活

かされるかどうかがあつてこそ記憶ではないか。あの三月十一日、電車が止まった夜、三時間かけて歩きながら思った。記録自体も存在を知らなければ、無いに等しい。歴史とは厳然たる事実に基づく記録であると思つていたのだが、かつて米中ソにとつて第二次世界大戦の終わりの日は九月二日(二〇二〇)であると知ったときに、記録も絶対的なものではないと感じたことを想起した。記憶、記録ともに絶対的なものでなく、人間の活動、経験、文化、教育、社会背景によって変化することさえあるのだから。

記憶、記録という高等生物の営みは人間活動の一環としてとらえるのが普通であらう。神経や脳というものを舞台に考えると、確かにそうだが、他の生物には記憶、記録は存在しないのか。そういう問いについて、準備や授業中、そのあとの学生のやりとりを通じて考えてみた。神経や脳にももちろん当てはまるが、も

つと広く一般則としてないであらうか。もっている能力をいつも全部発揮しているわけではない。状況や環境によって、ひとりひとりの能力や活動を絞っているのではない。その環境も、それ以前の生物たちの営みの財産、遺産を背負っている。まわりまわつて、われわれの精神活動も、完全な独立なものではなく、生を受けたものは過去の影響をうけている。

シアノバクテリア(藍藻)の作り出した酸素、さらに酸素が蓄積した結果生まれたオゾン層(臭気層)の誕生などは、陸上生物の誕生を促し、今の人間は日常意識しないが恩恵を間違いなく受けている。中国文化の四千年という時間スケールも、地球環境の変化の時空間の中では短い。それを忘れて、産業革命以降の二百年というスケールで、人間は地球環境を変えるところまで来てしまった。専門とは距離をおいて、横断的に考えることを試みたが、本授業の趣旨に沿っていたかは、若い世代の人たちの感想、考えに判断を委ねたい。ただ、これま

でなく、本来の駒場の特権である、分野横断型、文理融合型の授業ができたという点には満足感を得ることができた。

日中両国の学生の感性を見ることが狙い、議論しながら南京の梅の名所に出かけた。西欧の園芸技術による花の愛し方と比較しながら、中国、日本の若い世代が植物に対して同じような接し方をしていくことは興味深かった。教室では音についても試してみた。

日本人ならば知っているラジオ体操のあの音楽に対して、中国の学生も同様の反応を示したことは興味深いものであった。花と接し、聴いた音のトーン、リズムが共通に共有している記憶を喚起した気がした。視覚的なものだけでなく、五感を織り交ぜた試みを行うことができれば、あらたな記憶、記録のストーリーが組めそうである。

これだけ共通部分が多いのに、過去になぜ一方が他方を支配しようとしたのかについての個人的な悩みが、滞在中つきまとつた。ジョニーラーベ(ドイツ人商社員、南京大

虐殺の際に多くの南京市民を囲って救った)の家も訪ねながら、悩みは広がった。

このタイミングで訪中できたことで、震災の前後における中国側の日本に対する態度の変化を直接感ずることができた。今年になつての世界情勢変化はめまぐるしい。中東でのジャスミン革命、それが中国に広がらないかなど気になることは多かったが、思いがけない変化をしていたのである。今年初めに、温家宝首相が半年も満たないうちに三陸海岸で慰問している姿を想像できた人がいるであろうか。最後の日、私は街中の乗用車のナンバープレートの写真を撮っていた。江蘇省の苏の字が、東日本の復興を願っているように見えたからである。

生命科学の分野でも現在、国をあげて研究を推進している中国は将来にわたつて重要なパートナーとなるであらう。欧米との科学交流のみならず、アジア中国との科学交流の重要性を感じていたときだけに、今回の経験は貴重なものとなつた。

(生命環境/生物)

脳から見た人間の言語の記憶と記録

酒井 邦嘉

講義概要



言語に規則があるのは、人間が言語を規則的に作ったためではなく、言語が自然法則に従っているからである(チョムスキーの言語生得説)。最新の脳科学は、この賛否両論を巻き起こした主張を裏付けつつある。MRI(磁気共鳴映像法)などのイメージング技術の向上によって、脳機能の分析は飛躍的な進歩を遂げた。本講義では、脳に刻まれた言語の「生得性」を、動物や手話などの例から正しく理解した上で、チョムスキーの「生成文法」によりつつ、言語がどのような自然法則に従っているのかを紹介したい。

理系的に見た脳・心・言語

「人間」は文系の独占物ではなく科学の対象である。主観的・個別的・歴史的に物事を捉える文系に対し、理系は客観性・普遍性・再現性を重視するが、人間の合理的行動にも普遍性と再現性があるためだ。そのような人間の人間たる特徴のうち最大のものは言語使用であるが、それは脳という物理的実体に基づくことで自然法則に従っている。人間の科学的理解には、生物学と工学(人工知能など)だけでは不十分で、言語学と脳科学が不可欠なのである。本講義では、この観点から言語と脳の関係、言語の自然法則性を明らかにする。

理系の見方では、言語と脳の関係は、言語は心の機能の一部、心は脳の機能の一部という「脳—心—言語」の階層構造として理解される。ここで心とは「知覚・意識・記憶」機能の総体、言語とは「統語処理・音韻処理・意味処理」機能の総体である。Aの機能が全てBに含まれ、かつBにはA以外の機能があるときAはBより階層が高いといい、 $A \subset B$ と表す。(BがAの上位概念、或いはAがBの真部分集合ともいう)。つまり「言語 $\subset$ 心 $\subset$ 脳」である。言語以外の心の機能の例としては精神病が、心以外の脳機能としては脳幹反射が挙げられる。集中講義の



テーマである記憶と記録も、記憶を過去の事象の保存行為(とその痕跡)全般、記録をそれが一定期間保存されたモノと見れば、同様に左のような階層構造と考えてよいのではないかな。

言語と進化

ここでいう「言語」は、「人間の生得的能力・文法規則・言語要素」の3要素によって厳密に定義される。例えばチンパンジー

が手話を覚えた例は、生得的でなく、語順のような文法規則も見出せないで、言語とはいえない。人間は、自分の外に言語があつてそれを操るのではなく、脳の中に予め言語が生得的能力として備わっていて、それを活用しているにすぎない。その意味で、人間にとって言語は、他の動物における本能に相当するのである。

よくある誤解として、誤った進化論に基づく言語理解がある。進化とは本来、目的や必要性はなく、中立(生存にとって無害無益)である(木村資生の中立説)。また連続的とも限らない。チンパンジーなど人間に近い動物に言語の「萌芽がみられる」というのは、コミュニケーションや社会生活「のために」言語が進化したというのと同様の、典型的な誤りである。

自然言語／人工言語と手話・文字

人間が人為的に作り出した人工言語に対して自然言語という場合、乳幼児がトレーニングを一切せずに習得できる文法性を備えた言語を指す。とすれば、脳のなかに、生まれつき文法の鋳型があると考えねばならない。



チンパンジーのような手話の模倣や、健常者が日本語の語順に従って手話単語を並べただけの所謂「対応手話」は自然言語ではない。しかし、耳の聞こえない赤ちゃんは、環境さえあれば手話を母語として習得できるから、手話は自然言語である。そして自然言語を使うということは、既に述べた通り人間の本能である。これに対して「文字」は、教育(トレーニング)によって

初めて身につくので、言語としては二次的なものと考えられる。

これまでの言語理論の限界

この自然言語観を踏まえると、言語に対するこれまでの理論にはどんな限界があったのだろうか。

社会科学的言語観とは、音と意味を結びつけるシステムとしての言語を、人間の外部にある社会的慣習と捉える見方であるが、これは言語の生得性を説明できない。言語は脳の中に生得的にあり(普遍文法)、しかも構造そのものが生成的である、と捉えねばならない。これが、正しい自然科学的言語観である。この立場からは、言語という現象には、コミュニケーションどころか、社会的に他者がいる必要性さえない。

行動主義とは、言語は刺激を通じた学習の結果だとする考えである。この行動主義を、言語学者のチョムスキーは Colorless green ideas sleep furiously という有名な例文を用いて批判した。幼児期に受けとる言語的刺激は有限で、しかもこの例文のような文章は一度も聞いたことがないにも拘らず、英語の母語話者は、文法性の適否を判断できる。この事実を、行動主義は説明できないのである。

言語相対説、或いはサピア・ウォルフの仮説とは、日本語が英語の rice を「飯・米・稲」と3つに分節するように、言語は文化によって異なる世界の切り取り方を反映し、それらは相互に等価すなわち相対的である、という考えである。この考え自体は間違いではない。しかし多様な言語をただ相対の相においてのみ捉える見方は、結局 SVO 型か SOV 型かといった比較言語学的分析、いわば言語の記述・分類という標本採集に止まって、言語の本質に迫ることができなかったのである。

チョムスキーの革命

チョムスキーの言語理論が革命的だったのは、比較言語学という博物学的方法を超え、多様な言語という現象の深奥にひそむ説明原理を探究することを目指した点にある。そのモデルとして彼は、記述・分類でなく説明を目的として、対象を絞りこんで抽象度の高い理論を構築する物理学を選んだ。つまり言語学を本当の科学にしようとしたのである。

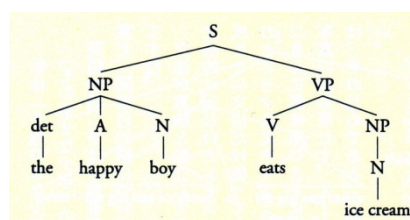
チョムスキーは言語から意味(意味論 semantics)を捨象し、文法(統語論 syntax)において「生成文法」理論を提唱した。「比較言語学／生成文法理論」の違いは、生物学における「分類学／進化論」の違いにも匹敵する。生物種の多様性をただ記述・分類するのではなく、それを説明する仮説として進化論が提唱され、後に遺伝子の発見によって実証された。これと同様、

自然言語の多様性の説明仮説として生成文法理論がある。私の研究は、遺伝子に相当する脳の言語野の仕組みの解明、脳科学による生成文法理論の実証を目指している。

生成文法と言語の自然法則性

最後に、生成文法理論によって見出された、自然言語に現れる自然法則とはどのようなものか。

生成文法は、階層を成す枝分かれ(二股)で図示される。「私はオレンジを食べる」という文の場合、まず「オレンジを」と「食べる」が結びついて二股になり、それがより上位で「私は」と結びつく。この「鋳型」なしでは、そもそも意味を理解することさえできない。そしてこの法則は「ジャックが一建てた」「ジャックが建てた一家」「これはジャックが建てた家(です)」と、品詞分解を説明するだけでなく、「～建てた家ーに置いたー小麦」「～小麦ーを食べたー鼠(です)」というように、無限に複雑な文を作り出せる。



ところで、この複雑な枝分かれ構造には、より下位の枝分かれを拡大しても元の枝分か

れの形と相同、というスケール不変性の法則がある。これはカオス理論における「フラクタル構造」として知られ、自然界でも樹の枝、リアス式海岸、入道雲などに見出される構造である。このことは、自然言語が自然法則に従うということの一端を良く示しているだろう。

―――| 講義中の質疑応答 |―――

Q. 記憶障害の例として、発症日以前のことは覚えているが、発症後は新しいことが全く覚えられない(直前の一定時間しか記憶を保てない)という例がありますが、そのような場合でも言語には問題が生じないのでしょうか。

A. このような記銘能力の障害を「前向性健忘」と言いますが、この場合も言語に影響は出ません。困るとすれば「こんな順番で話そうかな」と考えたアイディアを忘れて話し出せないのですが、その記憶をメモにとって外部化すればいいのです。

Q. チョムスキーのように、言語から意味を捨象して文法を物理学的に考えるというのは、言語を解明するための一つの方向

としてありえるでしょうが、言語を抽象化して考える科学的方法には限界もあるのではないのでしょうか。

A. 確かに、講義でも説明した通り、対象を絞って抽象化することで逆に限界も生じます。しかし、厳密な限定の中で、どこまでのことが明らかになるか、それを突き詰めるという方向性も必要で、そこから先はまた別の考えが必要でしょう。

Q. 人間の合理的行動は科学的に説明できる、という話ですが、「低い確率で高い報酬」と「高い確率で低い報酬」というク

ジを選ばせると、クジの設定次第では、期待値が低いほうを選択するという例が心理学にあります。この行動は人種によらず（普遍）、再現性もありますが、非合理となる反例ではないのでしょうか。

A. その選択肢を示されて、そのように行動した、ということは、やはりその選択こそが合理的なのだと考えられます。それは期待値とは違う意味の合理性が人間にはある、ということで（文責：杉谷）

討論会での質疑

3月17日の講義後の学生討論会には、酒井先生もいらして、学生の様々な疑問に直接答えてくださいました。そこでの議論の一部を紹介します。

◆ 東京大学学生

言語現象にはコミュニケーション、あるいは社会的に人がいる必要さえない、という話でしたが、一方で赤ちゃんをテレビの前に放っておいても言語が正しく身につかないでしょう。やはり周囲の人間からの「働きかけ」としてのコミュニケーションは必須の条件なのではないのでしょうか。

◇ 酒井先生

確かに最初の段階で、「働きかけ」は必要です。しかしひとたび母語を習得すれば、周りに誰もいなくても、頭の中で勝手にいくらでも文章を生み出すことができるでしょう。講義で扱っているのは言語のこの側面です。ただ、言語刺激を一定の年齢以前に受けなければ、文法性を備えた自然言語を母語として習得できないのは確かです。

◆ 南京大学学生

言語習得において両親からの影響が大きいとすると、母語は日本語ではなく方言ということになりますか？

◇ 酒井先生

その通りです。方言は一つの自然言語です。言語には様々なレベルがあり、実は個々人の話している言葉は微妙に違って、そのレベルでは話者が自分一人の「個人語 (idiolect)」があります。もう少し広く家庭内の言語、方言 (dialect)、その上に日本語や中国語があります。ただ、厳密には個々人の言葉は違っているのは確かで、むしろ親と子供の言葉も、影響関係はありますが、違います。面白いのは一卵性双生児で、二人の間でしか通じないような特殊な言語が生まれるらしい。

以上のことから、父母だけでなく祖父母を含む幅広い世代の言語的影響を受けて育った方が、言語的に豊かな感覚を備えうるし、また両親が違う外国語とか、多言語社会で育つことでマルチリンガルになる可能性は圧倒的に高まります。

ただ、大人でも、脳が可塑性を取りもどして、外国語が赤ちゃんのときのように身につく可能性もないとは言いきれません。

◆ 南京大学学生

親の話し言葉は完璧に文法通りではないこともあるのに、なぜ子供は自然言語の文法を身につけるのですか。

◇ 酒井先生

もっと不思議なのは、自然言語は、赤ちゃんによって生み出されうることです。ハワイは移民社会で、大人は文法的におかしな英語を話していたが、ハワイで生まれた子供たちは、英語と少し違うが、自然言語としての文法的特徴を備えた言語を新たに生み出し、話すようになりました。これを「クレオール」と言います。赤ちゃんの能力はとてすごい。

駒場キャンパスで皆が人工言語を話すことにしても、そこで赤ちゃんを育てれば、駒場語という自然言語を身につけるでしょう。言語は統合されて減っていくという考えもありますが、放っておけば多様化に向かうのが自然言語本来の性質です。

酒井先生インタビュー

サイエンスという見方で言語を考えてみる新鮮さ
そういう点を共有できたのが一番有意義だった

杉谷 まず南京での講義ということ、また日本語科対象だったこと、テーマ(記憶と記録)についても感想をお願いします。

酒井 まあ広く言えば文系も理系もないテーマだけど、記憶と記録というテーマにどれくらい縛られるかという問題かな。この間 TV 見てて、王と長嶋は記憶と記録だと言ってたんだけど、まあそう考えれば別に生物学的に定義を与えなくても勿論良いんだけどさ。ただ私はこう思う、というだけではなく、皆が納得できる、というのを目ざすのがサイエンス。そういう見方で言語を考えてみるというのは新鮮だったという感想を書いてくれた人もいし、そういう点を共有できるチャンスがあったというのが私としては一番有意義だったかな。言葉はヒューマニティ(人文学)で扱うのが本筋と思っているかもしれないけど、生物学的に人間の言語が如何にユニークか、そういう切り口でも研究できるということが頭の隅にでも引っかかってくれれば、今後色んな物事を考える上で一つの基礎になるかかもしれないと思っています。課題としては、皆と討論する時間があれば、そこで皆の意見を受けて講義のスライドを追加したりできると良かっただろうね。

杉谷 通訳には問題は感じなかったですか？ 話すスピードを落とすとか、文脈が錯綜しないようになどですが。

酒井 特に違和感はないです。事前に準備して、よく勉強しているな、と。ただ休憩毎に聞きに行って、最初は「速いです」と言われて、それで落としたんですけど、やっぱり「速いです」と。そこは反省。これは言語の特徴だけど、同じ時間がかかるのね。だからリアルタイムは無理で、一言一言切って、というのではないと。プロフェッショナルな同時通訳がついているのとは違う。でもそれを学生さんにやってもらうというのは一つの勉強でしょう。だから、遅くなるのは当たり前で、その意味では内容をちょっと減らさないといけないうね。



杉谷 テーマについては、教養教育ということ考えたとき、文理双方の先生に参加してもらえる案は何かないでしょうか。

酒井 「記憶と記録」というのをせっかくやったので、似ているけど違うものを並べてその同一性と違いを考えるという手がありますね。「ここからからだ」とか「人間と環境」とか。

杉谷 どのテーマでも、かみ合うかどうかもあります。先生同士の事前のすり合わせの機会も、あったほうが良いでしょうか。

酒井 それを形として設定してくれれば。あと、理系では良

2011 年 5 月 25 日 駒場キャンパス 16 号館 酒井研究室

くやるんだけど座談会形式ですね。例えば 3 時間のうち 2 人が 1 時間ずつ話して、3 時間目は先生同士の討論とかね。それが文系と理系の先生の組み合わせでも良いし、そこから学生さんも議論に入りやすくなる。

理系の実学化傾向には危機感がある

冒険的な側面は失いたくない

杉谷 文理融合ということで、理系の学生にも南京に来てほしいのですが、理系の立場からは、このプロジェクトはどのような意義があり、どのように変わっていけば良いでしょうか。

酒井 理系は分野が絞り込まれて、実験室でこれをやれば良い、となりがち。あえて全然毛色の違うところに行って違う人と話をするだけで刺激もあるし、進路とか研究の可能性を考えることができる。希望者は広く募るほうが良いでしょうね。

杉谷 昨年参加された理系の先生方も、理系は装置のあるラボから外へ出ない、内向きで海外へ出ていかないと。

酒井 まあ一般的にそうかもしれない。その傾向は強くなってるかもしれない。安全に、手堅く、というのがあつてすれば、それを思いっきり壊すようなプロジェクトがあつた方が面白いよね。あと一つ気になっているのは、理系の一つの傾向として、どんどん実学に走っていく傾向には危機感がある。例えば資格が取れますとかね。もうちょっと基礎科学と言うか、本当に何に役に立つのか分からないけど面白そうだとか、そういうのをやめておこう、というのは将来の発展のためにはよくない。冒険的な側面は、理系としては失いたくないですね。

杉谷 文系もそうですが、社会が余裕をなくすと厳しくなる分野がありますよね。基礎科学も今すぐには社会に還元される方向が見えにくい。学生さんが進路を考える時に、社会の余裕に頼って、基礎的な研究をやっても良いのかも、と視野が広げる助けにプロジェクトがなれば良いのですが。

酒井 一つ例を挙げれば今の医学教育もそうかもしれない。僕は助手のとき医学部だったんだけど、昔はもつとのんびりしてたのね。ところが研修医制度が変わって全科廻らないといけなから、余裕ないのよ。医学は実学だと思われていて、確かにそれは正しいんだが、ただそういう眼だけで医学を見ていては、マニュアルのないところに立ち向かうような医学ってのは決して進歩しないわけ。だからリスク覚悟で研究を続けていくような人たちがいないといけな。そういうことを考えると、人間の心と体などを徹底的に考えようという場に、医学部の学生もいてほしいわけ。だからプロジェクトが大きく網を張る、という意味では、実学志向の理Ⅲ(医学部の前期課程)の学生も出来る限りこういう場に引っ張って来て、彼らが医者になりたいっていう価値観からどういうふうに参加してくれるかってのは非常に挑戦的

で面白いテーマ。その人が研究者にならなくたって医者になる上で、視野が広がるはずだと僕は思うので。駒場の地の利として文理融合ということ言うなら、あらゆる分野の人たちが参加していける道を作っておく。そうすると後輩たちもそれをみて面白そうだ、と思ってくれるんじゃないですか。

新しい学問を作る場に権威主義は要らない サロンのな雰囲気南京で実現できないか

杉谷 駒場は、まだしもそういう自由さがあると思いますが、そういうカルチャーを作り、引き継いでいくことが大切ですね。

酒井 いや、僕が駒場に十何年いて残念に感じるのは、本当の意味での論争をしたことも、誤解を解くための努力をしたこともないし。ぶつけあって新しいものを作ろうというような場にもなってない。これは教員側自身の責任でもあるけど。

杉谷 駒場の特徴の一つに教養教育がありますが、まだ専門の決まらない学生に各分野の最先端を見せる、という形になっています。しかし、むしろ専門が決まった学生や先生の間にこそ、交流や文理融合が必要ということでしょうか。

酒井 いろんな専門の美味しいところを見せるのが教養教育ではない。私たちだって他分野では素人なんだから、その目線から何が必要かをぶつけ合うことが大事だし、人に分かりやすく説明することは、自分にもヒントが与えられる。また自分で勉強すると、生身の先生から聞くのは全然違うのね。そういう面白さはどの先生も持っていて、それに学生さんも乗っかると、同じ目線で語り合えたり、敷居が高いと思ってたけど、「あ、入れるかも」と思うかもしれない。そういうサロンのなものが駒場がないんですよ。むしろ壁はどんどん大きくなるわけで。一つのきっかけとして、先生方が、日常の義務を離れた場で、午後いっぱい語り合う、そこに学生も来ると、そういう雰囲気を、駒場でできないとしたら南京で実現できないか。

杉谷 アメリカの大学だとランチタイム・ミーティングのような文化があるそうですが、そういう雰囲気のものですか。

酒井 この間益川先生がノーベル賞を受賞したとき、何が良かったかという、アメリカでは議論のとき「〇〇先生」って呼ばない、皆「〇〇さん」と呼び合って議論する。大学院生の意見もスタッフの意見も、真理に対して同等に扱われて対等に議論できる、そういう場が大切だと繰り返し仰っていたけれども、そういうのが学問の基本なんだよね。教育っていうと上から目線になって、学生は先生を敬って、というのでは、学生はついてこない。新しい学問を作る場に権威主義は要らないんです。

言語のバリアをどういう形で解決するのか いろいろと比較したり議論したりしていけばいい

杉谷 話は変わりますが、東大と南京大の学生が、日本語で討論するというスタイルについては、どうお考えですか。

酒井 言語のバリアという意味では英語を使うというのもあるけど、東大生が英語で議論できるかな。試練だろうなあ。

杉谷 逆に日本人は向こうが母語で話しかけてくれる。先生の言語の研究からすると、母語を使える、母語で話しかけてくれるということのメリット、デメリットというのはどうでしょう。

酒井 母語でない場合のデメリットは、一つはそもそも議論が成立しない。もう一つは、言語が共有している文化の違いとか、言語外の知識が共有されていないという問題がある。例えば日本人同士なら、



王・長嶋というだけですぐピンとくるのに、知らない人にとっては説明しないといけないし、その説明が下手だったら却って通じないわけだね。そういう溝を埋める努力をせずに日本人が日本語でやってしまうと、ここが伝わっていないだと自覚できない問題がある。そういう反省も必要です。だからお互い共有していない言語(英語)でやるのも一つだし、中国語を一生懸命勉強している理系の学生がいるんだったら、一緒に行って中国語で議論してみてもいいかもしれない。ただ海外での学会発表では、英語を使って議論し合わねばならないという現実があるので、正確な言語に対する知識を欠いているという意味でも、ハンディのない英語を使って、中国人と日本人が英語を使ってディープな話ができるか、試してみる、という手もある。日本語だからラッキー、といって参加する人たちに比べれば、はるかに荷は重いだろうけど……。

杉谷 逆にいうとモチベーションの高い学生が来る。

酒井 そう。その分トレーニングになると。こんなに勉強したのに全く通じなかった、とショックを受けて帰るのもまたすごい勉強なんだよね。やっぱり学校教育と語学の使い方は違う。自分の思ったことをどこまで言えるのか。相手から聞きたいことをどれくらい引き出せるのか。そういうスキルとして捉えなおしたときに、言語としての正確さの要求レベルはたぶん半端じゃないんだよ。発音もそうだし。最近、僕のいる神経学会は原則英語に変わって、スライドも全て英語、討論も英語なんだけど、討論を聞いていると、発音の下手さや、文になってない単語だけ並べて討議が成立している。これはやはりまずいな、と。

杉谷 文化的背景を引きずっている文系に比べ、理系のほうが英語に切り替わっていくのが速い印象があります。

酒井 だけども、いろんな学会見たけど、文系のほうが、英語がうまいしロジカルだよ。言語学とか英文学とかだからかもしれないけど。言葉自身がカルチャーだと思っていけばなおさらのこと大切にするし、話し方や言葉の選び方にも重きを置くはずなのね。理系のほうが道具として見ていて……。

杉谷 逆に背景に持ってる文化をまだ感じようとしてない？

酒井 そう。想いが行っていないですよ。それは論文を書いたときによく現れる。だから結局、言語のバリアをどういう形で解決するのか。今回みたいに日本語でも良いし、通訳があっても良いし、英語の時間を取っても良いし、その中で比較したり議論したりして評価していけばいい。だから試みとしてはやってみたいほうが良いんじゃないかな。

このプログラムに参加するということをお客さんとして受け身的に感じないで欲しい

杉谷 最後に受講者にどういうことを考えて貰いたいとお考えですか？ 講義についてだけでなく、他に異文化などでも。

酒井 日本人のレポートには、僕のしゃべったことについてのコメントがあまりなかったの、関心があったのかなかったのか、わりと肩透かしにあった、というのが正直な印象でした。中国に行くと面白かった、というのはあるけど、他の先生についてのディープな考察もないのね。書いている人も、どこかピントがずれていた、という感じで、僕はそういうこと言っていないんだけどなあ。全体の印象としてレポートが良くなかった。これに参加するということをお客さんとして、受け身的に感じているのかもしれない。食欲に自分のものにしようというのを感じなかったの。

杉谷 何を考えてほしいかという以前に、ちゃんと考える姿勢で行ってほしいと。またレポートを書きながら考えるという意味でも、もう少しちゃんと書かせる仕組みがないといけない。

酒井 ある程度関連の論文とかも出しているわけだから、予習復習、事前に何を読んでおくかというのもあるんじゃないか。その辺がどうも未消化な感じでした。

杉谷 学生の意見としては、毎日の討論のためのテーマを先生から出してほしい、という意見がありました。レポートについても、ある程度考える方向性を与えるなど如何でしょう。

酒井 それを形として作るか、講義の最後に講師に問いかける、というふうにしてもらえれば良いのかもしれない。

杉谷 最後に大屋さんは何かありますか？

大屋 印象的だったのが、アジア圏の人たちが英語で討論するのに違和感という話で、私も中国語を勉強し始めたんですが、そういうモチベーションを上げるきっかけになったという意味でも、多くの人に行ってもらいたいですね。

酒井 翻訳がうまくいかないときにだけ英語を使うとか、ある程度補助的なものでいい。この時間は英語、とかそういう規則はなくて良いので、チャンポンで良い。総動員で、トータルでぶつかる。中国語のレベルはかじっただけでもいい、そこは評価しない。私たちの大学の語学教育の問題は何かって言うと、基本的に評価を伴うから、思い切ってやれないわけ。それが成長を阻害してるように思いますね。誰でも新しい言語に関してはちゃんと同じで何も喋れない。またある意味ではどんなに子供だってある言語のエキスパート。そして互いの文化とか、そ

う違いをなくしてくれるのが言語なので、そういう形で言語につきあう場をプログラムの中に入れておくのが良いんじゃないか。

南京に行きたいから応募ではなく 駒場にも南京にもなかったような 学問のホットな交流の場に入れることを前面に

大屋 レポートのことはショックと言うか、やっぱりという感じで、南京大学に行く意味について考える機会がなかった、という点もあったのかなと思います。先生の講義を日本語で受けるのと、南京大学で中国の学生さんと受けるのとどう違うのかを考えられなかったの。その点は反省しています。

酒井 そういう意味じゃあ、駒場でだって僕の授業は聞けるわけだから、そうじゃない、駒場でできないものを作り出せばいいわけさ。あの先生とあの先生との話を両方きける機会はなかったなとか、そうするとそれを聞きたいっていう学生が必ずある程度出てくるし、行って聞いてみてここがよかった、ここが食い足りなかった、と反応が返ってくるわけだから。そこが大事なんじゃないかね。駒場にも南京にもなかったような学問のホットな交流の場に自分が入れる、それでプラス南京に行って……

杉谷 異文化の地を踏んでくることもできる、という

酒井 そう、だからそっち(学問的な交流)が前面に立たなきゃ、本当の意味の交流プログラムにならないんじゃないかね。

杉谷 先生方も、ただ南京に行って日本語で話してくる、というだけではなくて、もっと別の意味が欲しくなりますね。

酒井 普段あの先生の話は聞いたことあるけど、距離は置いていた、という人と話して、あえてぶつけ合って、それは拒否しないと。溝が深まるかもしれないし、理解が深まるかもしれない。そういうのが面白いんじゃないかな。何か新しい学問つくろうよ、とそういう感じに持っていけばいい。既存の学問をかきこまて聞くんじゃなくて。それでこそ、いろんなバックグラウンドや学科や国籍や言語を超えた学生がその場にいて、あるいはインターネット中継で聞いているという必然が生まれる。じゃないと最初に駒場と南京の交流なのであって、っていうところからスタートしちゃうの。実質が大切なので、文理融合が核になるんだしたら、まずは文系と理系の先生をぶつける場なんだと。それに皆さん来てください。場所は駒場でやったり南京でやったり他の場所だったりしますけど、というふうにして、それで南京に行きたいから応募という人は丁重にお断りする。オリエンテーションの作文もそういう趣旨で書いてもらってね。

杉谷 確かにそうですね。今日は大変参考になるお話を聞くことができました。どうもありがとうございました。

(文責:杉谷)

インタビュー

杉谷 幸太 (地域アジア科 D1/廣瀬・渡邊・酒井先生回参加)
大屋 愛実 (広域生命科学 M1/渡邊・酒井先生回参加)

記憶と人格(自己同一性)

石原 孝二

講義概要



私が私であるということは、何によって保証されているのだろうか。過去の私は現在の私と同一の人格なのだろうか。また、未来の私はどうだろうか？ 哲学者たちは、人格の同一性を記憶や意識の連続性を手がかりに論じてきた。本講義では、哲学者たちの見解を紹介するとともに、精神障害や認知症、記憶のメカニズムなどに関する研究の現状も紹介しながら、現代において人格概念と記憶の関係をいかに捉えるべきかを論じていく。

人格概念をめぐる思想

「人格」とは、「道徳的行為の主体としての個人」、即ち責任の主体であり権利を有するものとして定義されているが、「人格」を「人格」たらしめているものは一体何だろうか。責任を持つ「人格」の要件としては、まず意志を持つことができること、身体の個性・同一性が保たれていること、自己同一性が保たれていることが求められる。この、「自己同一性」のためには、記憶が重要となる。昨日の自分の行為を自分の行為として記憶できなければ、その当人を道徳的行為の主体と見なすことは難しい。

以上のような考え方は、ロック(John Locke/1632-1704)以降の近代哲学で確立した。ロックは、人格の本質は意識であるとし、人格の同一性は記憶に依ってつながっているとした。また、ヒューム(David Hume/1711-1776)は、その時々断片的にある感情や知覚について、それらを統一するものが記憶であるとした。カント(Immanuel Kant/1724-1804)は、意識し、考えるということがあらゆる自分の表象に伴うとし、意識を自分のものとして考えられることが、動物には無い人間の能力であるとした。このような「意識」を強調する考え方に対し、フロイト(Sigmund Freud/1856-1939)は「無意識」を仮定し、過去の抑圧された経験などを原因とするヒステリーなどは、無意識を意識化することで治療ができると考えた。

記憶のメカニズム

記憶にとって重要な器官としては、海馬と大脳皮質、及び扁桃体などが考えられている。記憶のメカニズムは、現在の脳科学では、だいたい以下のように考えられている。刺激を受けると、まず海馬にその刺激が保持され、数週間記憶の痕跡が形成さ

れる。その中で消えなかったものが、新皮質に移り固定されることになる。更に、記憶に感情が伴うと、恐怖や情動に関する機能を持つ扁桃体と海馬が連絡し、強い記憶となって忘れにくくなる。

記憶と人格の同一性に関する精神障害

記憶と人格の同一性に関する精神疾患としては、まず認知症を挙げることが出来る。認知症には、大きく分けると、脳が萎縮することによるアルツハイマー型と、脳の血管の問題による血管性の2種類がある。いずれも認知能力が低下するという特徴がある。統合失調症もまた、人格の同一性に関わるものと考えられている。外傷後ストレス障害(PTSD)の症状は、事件の重要な部分の健忘と、些細な刺激によるフラッシュバックなど、矛盾しているかのようにも見えるが、解離性健忘や解離性逃走、解離性同一性障害(多重人格)などの「解離」一般から理解できるという考え方がある。

解離は記憶の中で、自己や時間という基本的なタグが失われ、長期記憶の時間系列が崩れてしまう症状をもたらす、とも考えられている。

認知エンハンスメント

エンハンスメントとは、「健康の維持もしくは回復に必要とされるものを超え



て人間の姿形や機能を改善することを意図して行われる介入」を指す。例えば米国では、ADHD(注意欠陥多動性障害)の子供に投与するリタリンという薬を、健常者の学生が集中力を高めるために乱用していることが問題となっている。

PTSD を治療として、トラウマ的記憶の恐怖条件付けを解除するというのが考えられる。

将来、記憶を選択的に消去できる薬が開発された場合、それを作ること、使うことの是非が問われることになるだろう。記憶の消去は人格の同一性を脅かす可能性がある。

ディスカッション

石原 記憶を消す薬ができたとして、それを飲むことが人格の同一性にとってどういう影響を与えるか、それを飲んでよいのかということについて、意見を聞きたいと思います。

南大生 A もしも本当に記憶を消したら、過去自分がやっていたことを一時的に忘れることはできると思いますが、過去の行動が本能的なものだとすると、一度消したとしても、将来的にまたそういう行動を取る可能性もあります。だから、そういう記憶を消す薬は飲まない方がよいと思います。

南大生 B A さんの答えについて、ちょっと反対というか、意見があります。私の考えでは、記憶を消す薬があれば、患者にとっては随



分良いことだと思います。私のいとこは子供時代から、親同士乱暴な喧嘩ばかりしており、精神がかなり影響されてしまいました。統合失調症が PTSD と関係があるのかわからないですが、彼女はトラウマを受けてからそういう状態になってしまいました。薬を飲んでも効きません。もしも子供時代の記憶を消せれば、彼女にとって良いことかもしれません。

南大生 C 記憶を消す薬を飲んだら良いかという点については別として、規制があるかどうかをお聞きたいです。また、そういう薬を飲めば、人格の同一性にどういう影響があるかということについては、さっき B さんが言ったように、もしも他の人から見て、ある人が薬を飲んだら良いという判断があった場合には、良く議論すべきではないでしょうか。トラウマ的記憶もその人の性格の生成に影響を与えているので、薬を飲んでその記憶を消してしまうと、やはり人格の確執が生じるかもしれません。でも本人が、その記憶が自分にもたらした消極的な影響が、積極的な影響を上回ると考える場合、飲んでも大丈夫かもしれません

ん。

石原 規制されているかどうかについては、医薬品として認可されているかどうかという問題があります。薬(処方せん医薬品)であれば医



者の処方せんが必要になります。トラウマと統合失調症の関係については、僕が答えられる問題ではありませんが、昔のいやな記憶を消せば統合失調症が治るかということについては、記憶を消しても難しいのではないかと思います。

南大生 A もし記憶を消したら、昔出会ったシーンをもう一度見た時、昔のことがよみがえる可能性もありますが、はっきりしていないので、自分への疑問を起すかも知れません。自分で自分のことがわからなくなって、却って病気になりやすくなるのではないのでしょうか。もしも徹底的に記憶を消したとしても、自分というのは昔の過去全てがあるからこそ自分になったので、もしも過去のことをすべて忘れてしまったら、今の自分が本当に昔の自分と同じ人格と言えるのかどうか、私にはわかりません。

南大生 B A さんの主張は、私も疑問を持っています。一体自分とは何でしょうか、以前の自分と治ってから自分とどういう関係にあるのでしょうか、PTSD を発症してから人格の同一性は持てているのでしょうか。

石原 記憶を消すことで PTSD から良くなるのであれば、昔の自分とは違った新しい自分ができたとしても、それはそれで良いのではないかと主張も、一つの考え方だと思います。感情的な反応を弱める薬を飲んでよいかという問題については、僕は、それは記憶自体を消すものではないし、飲んでよいと思います。

南大生 A 先生は記憶を消すことの是非についてはどうお考えですか。

石原 僕も消したい記憶は沢山ありますが(笑)、じゃあ消した方がよいかというと、消さなくても良いかなと思います。一般的に他の人についても、消すべきじゃないと思います。個々の記憶に関しては不都合なものがあっても、全体として意識の統一がされているので、部分的に消去して都合の良いところを集めても、それはそれで問題が生じるのではないのでしょうか。記憶を保持しつつ問題を解決する方向に行くのが良いと思います。

南大生 A 過去の辛い思いを消しても、これから辛いことがあ

るだろうから、良い記憶だけ欲しかったらこれからもずっと消さなくてはならないと思うので、私はやはり消さない方が良いと思います。

南大生 B もし病気になったらやっぱり消した方が良くないと思います。健康な人にとっては要らないと思います。

石原 健康な人とそうでない人ではとらえ方が違うし、病気の人が身近にいるかどうかでも考え方は変わってくると思います。

————— | 質疑応答 | —————

Q. 自己同一性は自分で構築することができるのでしょうか。先生が仰ったように、自己同一性は記憶で支えられていますが、私たちは自分の好ましくない記憶を忘却することで、自分の好きな自己同一性を築き上げることができるのではないのでしょうか。もしもそうなら、私たちは実は日常の中でそういう作業を行い続けているのではないのでしょうか。

A. 今のところ、これ(薬で記憶を消去すること)はできませんが、将来的にはできるのかもしれませんが、できるかどうかという問題と、やって良いのかという問題の両方があります。

Q. 子供のころの自分と大人になった自分は、記憶が違っていることが良くあります。私の考えでは、人格というのは確定し

ているものではなくて、生きているもの。人格は人の成長に伴って生きていると考えた方が正しいのでは。その時の記憶によって、その時の人格が生まれ、もっと成長してからは、増えた記憶に基づいて、成長した人格になるのではないのでしょうか。

A. 一つの人格がどんどん成長していくとすると、子供のころの人格と今の人格がやはり違うということになりますね。他にこの問題についての意見があれば、伺いたいと思います。

Q. 私は連続的なものなのではないかと思います。やはり人格は記憶に支えられて、子供のころの記憶はありませんが、それは私たちが覚えていないだけで、記憶とは覚えられているものと、覚えられていない、潜在的になってしまったものがあるのではないのでしょうか。

A. これは哲学的な問題なので、答えがあるというものではありませんが、この問題をどう考えるかということが、医療や高齢者のケアを考える際に重要な問題となります。例えばトラウマの記憶を消してよいのかという問題は、人格の同一性をどう考えていくかという問題と密接に関係しています。

(文責: 赤木)

石原先生インタビュー

日本語で外国人に対して授業をするというのは
ファカルティディベロップメントの試みとしても有効

赤木 先生は集中講義以前に、東京大学で「身体論」のテーマ講義も担当してくださいましたが、それと比べて如何でしたか？

石原 やっぱりテーマ講義では、そもそも理解されてるのかどうか全然わからなかった。だから実際に授業をやってみたら、かなりわかってるんだなということがわかりました。テレビ会議でやると、ちょっと難しいですね。インタラクションというのが。

赤木 実際テーマ講義と集中講義だと、学生さんの質問の勢いが全然違いましたよね。では、普段東京大学で普段授業しているのと比べて、南京大学で集中講義を行う違いというか意義に関しては、如何でしょうか。



石原 日本語で外国人に対して授業をするというのは、ファカルティディベロップメントの試みとしても有効なんじゃないですか。面白い経験でしたね。

赤木 今回の「記憶と記録」というテーマについて

では、どのようにお考えでしたか？

石原 面白いと思いますね。僕が最近やってることと結構関連付けやすいテーマだったので。集中講義でやった PTSD の問題とか記憶のメカニズムの問題とか、関連性がかなりあって。

赤木 他にご希望されるようなテーマはありますか？

石原 例えば「公共性」とかね。公共ということに対して日本では割と注目が高まっているけど、中国では公共性ってどう考えているのかっていうのに興味があるところで。「経済」とか「国」とか「市場」とか……「市場」も無理ですかね。まあ個人的には中国でやることに興味があるテーマっていっぱいあるんですが。

赤木 できれば文系も理系も話せるようなテーマだと一番いいんですよ。

石原 「生命」とか「教育」とか「老い」とか……「環境」とかだとすごく文理融合になるかな。

赤木 そうですね、いろんな方向から話せますね。

石原 何を目的にするかというのがありますよね。とりえずテーマというのを決めておいて、あとは先生個人に任せておいて先生の面白さを引き出すというのを中心にやるのか、それともテーマを目的と考えて、いろんなアプローチがあるという考え方で、発信をしていくのか。

2011 年 5 月 26 日 駒場キャンパス 9 号館 LAP 会議室

赤木 その両方で、ゆるくテーマを作っておいて、先生に、その中で好みに話していただくことで、受けている学生さんに、一つのテーマについてもいろんな考え方があるという、学問的な広がりみたいなものを感じてもらえるようにできれば良いと思うんです。

石原 そうですね。先生方も面白い先生方が多くて、僕なんかも聞いてみたい先生方でしたけどね。

赤木 今回の石原先生の講義を通じて、受講者にどういうことを考えてもらいたいとお考えでしたか？

石原 一つは震

災の直後だったんで、震災が日本人

のアイデンティティ

に重要な意味があるんだと言いたかった。もう一つは、人

格の同一性は記憶によって支えられているんだということですかね。人格の同一性ってそんなに確固とした地盤があるものではないということ。そういうことを話したかったので、そういう意味では思った以上に伝わったという感じはありましたね。

赤木 質疑応答の活発さからも。

石原 あれは活発な方でしたか？

赤木 活発な方だと思いますよ。何かマイクを奪い合ってたよね。

石原 割と議論できる雰囲気はあったみたいで、それが良かったというかちょっと意外でした。「公共」の話とかでもできれば良いんですけどね。

南京大学の中国の大学の中での位置や

理系的に強い分野などを積極的にアピールしないと理系の学生は関心を示さない

赤木 理系の学生がこのプロジェクトに参加することに、意味はありますでしょうか。どうでしょう。

石原 文系の場合は中国に行くだけでメリットがある。理系の学生にメリットがあるとすると、向こうの理系の先生と一緒にやるとかね。例えば集中講義でも、向こうの理系の先生にも話してもらうとか。

南京大学の理系の学生にも聞いてもらいたい

できればほかの大学ともやっていけると良い

赤木 あと何か、これは言っておかなきゃみたいなことはありますでしょうか。

石原 すごく良いプログラムだと思いますけど、もうちょっと



広げられれば良いと思うんです。南京だけじゃなくて、ほかの大学と。やっぱり日本語で授業できるというのはすごく大きいので、南京大学の学生さんに、聞いとかなきゃ損だと思ような先生を連れて行って何か話をしてもらって、理系の学生にも聞いてもらう。できればほかの大学ともそういうのをやっていくというのができるといいかなあと。

現状だと日本語学科の学生のためという感じで、それはそ

れで良いんですけど、ちょっと狭いんですよ。確かに、日本語ができる学生を育てていくというのは大事なことだと思うんですけど。もうちょっと広げられるかな?と。

赤木 そうですね、せっかくなんでもっといろんな学生さんに、面白い話を聞いてもらいたいですからね。今日はお忙しいところどうもありがとうございました。 (文責: 赤木)

インタビュー

赤木 夏子 (超域表象 D3/渡邊・酒井・石原・高橋先生回参加)

記憶のエチカ

高橋 哲哉

※ 3 月 11 日に発生した東日本大震災の影響により、高橋先生の南京へのご出張が叶わない事態となったため、本講義は、東大駒場の情報教育棟の国際会議システムを利用し、南京大へ講義を中継することとなりました。東京では、同じく震災の影響により派遣中止となった、学生交流第 3 班の学生らが聴講し、南京では通常通り、日本語科の学生が聴講しました。

講義概要



2 度の世界大戦などの傷を残す出来事を忘れてはならないという倫理(エチカ)的責任が問われることがある。本講義では、こうした記憶のエチカが最も語られてきたものとして第二次世界大戦のナチスのホロコーストを取り上げ、ホロコーストについて記憶の義務を語っているあるユダヤ人の哲学者のテキストと、その後彼とあるドイツ人の青年との間で交わされた書簡とを主に読みながら、記憶のエチカについて考察する。

講義題目「記憶のエチカ」について

24 日の講義では、先ず講義の題目「記憶のエチカ」について説明がなされた。その後哲学者ウラジミール・ジャンケレヴィッチのテキスト「われわれは許しを乞う言葉を聞いたか？」(1965)が取り上げられ、テキストが書かれた背景の説明と、その読解がなされた。

題目の「エチカ」は狭義の倫理・道徳に限っているわけではない。哲学者カール・ヤスバースは終戦直後の講義(後に『戦争の罪を問う』(責罪論)として出版)において、罪を 4 つに分けた。法的、政治的、道徳的、形而上的(ないし宗教的)な罪である。題目の「エチカ」も法・政治・道徳・形而上(宗教)的な広い意味でのエチカを指している。

2 度の世界大戦などの傷を残す出来事を忘れてはならないという倫理的責任が問われることがあるが、これは記憶のエチカの問いである。講義では記憶のエチカが最も論じられてきたナチスによるホロコーストの事例を扱うが、この事例には日本と中国の両者にとっても学べるところがあるだろう。

ジャンケレヴィッチ「われわれは許しを乞う言葉を聞いたか？」

戦後ドイツでは 1955 年と 60 年に、ナチスの時代の軽犯罪などが順次時効とされていったが、65 年に謀殺罪を時効とするか否かで論争が起き、この際にジャンケレヴィッチは本テキストを発表し論争に参加することとなった。

ジャンケレヴィッチは、フランス人であり、ユダヤ人であり、対独レジスタンスでもあったため、ドイツやナチスだけでなく、フ

ランス内の対独協力派に対しても批判をすることになる。また彼は 65 年の時効より前にすでにドイツを赦していたフランス人達をも批判する。

彼は、ドイツやナチスを赦すことのできない理由を 3 つ挙げている。先ず、赦しを乞う言葉をドイツ人から聞いていないため、次に、ドイツ人は罪によって悲嘆に暮れ人々から見放されているどころか、繁栄し肥え太っているため、最後に、ホロコーストのように恐ろしい理解不可能なことに對しては赦しは不可能であるため(「赦しは絶滅キャンプの中で死んだ」とする)。

彼は、加害者への赦しは被害者だけが行えることであると考え。つまり、彼にとって、赦しは二者間でのみ可能であり、第三者が被害者に代わって、あるいは被害者の名において赦すということはあり得ない(したがって、被害者がいなくなってしまう殺人に関しては、二者間の赦しは構造的に不可能となる)。ところで、法律上では時効になっていないが被害者が赦す場合や、法律上は時効になっているが被害者が赦さないという場合があるように、被害者でなく第三者が赦しえるのは法律上のことであり、二者間での赦しと第三者的な法律上の時効とは位相が異なる(後者は近代的法治国家の原則である)。



東大での講義の様子

この点でジャンケレヴィッチは法律的時効と二者間の赦しとを混同してはいないだろうか。

そして彼は記憶の義務を語る。殺され、存在しなかったかのようにされた人達は我々が彼等を記憶しなければ、永久に無に帰されるのであり、忘却の波に対して抗議しなければならない、と彼は言う。忘却に抗議するのは「ルサンチマン」である。ニーチェ以来一般に不健全で否定されるべきものとされるルサンチマンを、彼は、強く感じる事、強烈な感情として解釈するのである（「恥ずべき記憶喪失でしかない…恩赦に対し、ルサンチマンは抗議する」）。以上が 24 日の講義の概要である。

若きドイツ人からの手紙

続く 25 日の講義では、三つのテキストが扱われた。すなわち、先ず、一人の戦後生まれのドイツ人が書いたジャンケレヴィッチ宛の手紙で、



南京での中継画面の様子

そこにはジャンケレヴィッチが、1980 年 1 月のラジオ番組で、戦後ドイツの繁栄に対する嫌悪を示したことへの応答が書かれている、第二に、この手紙に対するジャンケレヴィッチの返信（両者は往復書簡として雑誌『マガジンリテレール』（1995）に掲載された）、第三に、ジャン・アメリー（ユダヤ系オーストリア人作家）の「ルサンチマン」に関する考えが書かれたテキストである。以下では、本講義の主要な部分をなした第一のテキストに関する報告をする。

ジャンケレヴィッチは、件のラジオ番組の中で、こう言っている。「彼らは 600 万人のユダヤ人を殺した／しかし彼らはよく眠り／彼らはよく食べ／そしてマルクは強い」。彼のこの発言に対して、戦後生まれのドイツ人リヒャルト・ラヴェリングが、一通の手紙を書いた。この手紙には二つの側面があると解せる。すなわち、戦後生まれのドイツ人の苦悩の表明、およびジャンケレヴィッチの発言に対する皮肉めいた問いかけである。

戦後生まれのドイツ人の苦悩

先ず、ラヴェリングは、手紙の冒頭で、自分がナチスの一連の行為に関しては全く無実であり、かつ彼がドイツ人として生まれたこともまた彼のせいではないと宣言する。しかしこのことと同時に、彼は、かつてのドイツが行った犯罪行為に無関心ではいられず、またそれについて悩んでいるとも言っている。

手紙によればラヴェリングの苦悩は、少年の頃に記録映画『夜と霧』を見た時から始まる。この時、彼自身が「人類の闇[ホロコースト]の証人」となったと彼は語っている。このように「証人」となることによって、ラヴェリングは、かつての自分の国の行為について苦悩せざるを得なくなった。

ラヴェリングは、この苦悩が、戦後のドイツに固有のものであると主張する。それはすなわち、戦後、ドイツ人は、そもそもドイツという国が何であるか分からないにも拘らず、ドイツ人であることによって苦しむことになってしまうということである（とはいえ、フランスにおけるヴィシー政権や、さらには植民地支配の問題などを考慮に入れると、彼の自分の国民性に関するこの主張は必ずしも妥当ではないだろう）。

この後、ラヴェリングの手紙は、「私の両親はユダヤ人を殺したりなどしていません」という短い一段落を転換点として後半に入る。そこで、ラヴェリングは、ドイツ人全体を嫌悪し、「ルサンチマン」の重要性を説くジャンケレヴィッチの主張を相対化しようとする。

「ドイツ人」の多様性

この手紙の後半は、戦前から戦後にかけての 4 つの世代を例に、ドイツ人の多様性を強調しつつ、ジャンケレヴィッチの示す「ドイツ人」を相対化させる効果を持つ。

まず、ラヴェリングの父母について語られる。彼らは、ナチスが「偉大なる成功」をおさめて以降、同政権を支持するようになった。しかし、彼ら責めることはできないとラヴェリングは言う。その理由は、当時であれば、彼本人が父母と同様の行動をとったに違いないという推測である。ラヴェリングのこの主張は、当時の「普通のドイツ人」が、第一次世界大戦後の疲弊したドイツを懸命に生きようとしたという点を強調するものである。また、彼の祖父母の場合も、状況は同じである。確かに、彼らはナチスを支持はしていなかった。しかし、同時に彼らは抵抗もしていなかった。言い換えるならば、当時の「普通のドイツ人」は、ナチスの行為に関してどうすることもできなかったのである。

ましてや、ラヴェリングの子どもたちには、「ドイツ人として生まれたこと」に「罪」はない。ラヴェリングは、この「罪」に関して、もしそれがあるとするならば、それは「私と妻のもの」であると主張している（この「罪」の内実については、講義で具体的な検討がなされなかった）。以上のように、ラヴェリングの手紙からは、ホロコーストについての戦後生まれのドイツ人の苦悩と、ジャンケレヴィッチの意見の相対化という二重の性格を読み取ることができる。

（文責：島田・飯田）

講義 BBS より

◆ 南京大学学生

2011/03/25 17:11

先生の授業を聞き、いろいろ考えられ、とてもいい勉強になりました。

質問とは言えないかもしれませんが、プリントの 14 番の「彼らは 600 万人のユダヤ人を殺した しかし彼らはよく眠り 彼らはよく食べ そしてマルクは強い」を読んで、ジャンケレヴィッチがナチスドイツが許せないほど残酷な罪を犯したにもかかわらず、今日豊かな生活を過ごすのが不公平とっているような感じがします。しかもジャンケレヴィッチはルサンチマンを反対していないのですよね。私の考えでは、ルサンチマンはいろいろな形があるのではないのでしょうか。ドイツ人が赦しを乞うべきだということ大事ですが、しかし、それよりもっと大切なことがあるのではないのでしょうか。それは、もっと豊かな生活をつくり、もっと楽しい毎日を楽しんだ方がもっといいルサンチマンの形ではないのでしょうか。



◇ 高橋先生

2011/03/29 22:53

そうですね。ジャンケレヴィッチは最初の論文でも、戦後のドイツ人が経済的に豊かになり「肥え太っている」以上、赦すことは困難だと言っていました。このような議論に違和感を覚える人も少なくないでしょう。

おそらくジャンケレヴィッチも、豊かで楽しい生活を送ること自体は否定しないのではないのでしょうか。問題は、当時のドイツ人の多くが、自分たちの犯した犯罪的行為を反省もせず、むしろさっさと忘れ去り、被害者の苦しみなど想像しようとしなかったことにあるのでしょうか。

たとえば私の家が放火されて、私以外の家族がみな焼け死んでしまったとして、その放火犯がちゃんとした謝罪も償いもせずに裕福な生活を営んでいたら、その放火犯を赦すのは難しいのではないのでしょうか。

豊かで楽しい生活も、それが誰か他の人々の犠牲の上に成り立ったものであったり、他の人々の犠牲を忘れて成り立っている場合には、厳しい批判を免れないかもしれません。

◇ 東大学生

2011/04/02 10:29

こんにちは。高橋哲哉先生の Teaching Assistant をしています飯田賢穂です。胡さんのコメントを読みましたので、私の考えをいくつかお伝えしたいと思います。

まず、高橋先生もコメントの中でおっしゃられていましたが、ジャンケレヴィッチは、ドイツ人であれ誰かが「豊かな生活を過ごす」ことそれ自体を、悪いこと(あるいは「不公平」なこと)と考えているのではないでしょう。むしろ、ジャンケレヴィッチのテキストで批判されていたのは、「ナチスドイツが許せないほど残酷な罪を犯した」ことを忘れようとしている、という点にあると思われます。そして、この「忘れること」に抵抗する方法の一つが、ルサンチマンを持つことであると、彼は主張していると思われます。

彼自身が言っていますように(プリントの 2 番)、ナチスの犯罪に「時効」があるということになりますと、ナチスの犯罪行為を忘れることは「公認となり、規範化され」てしまいます。つまり、忘れることは一種の義務になってしまいます。逆の視点から見ますと、「時効」の後に、ナチスの犯罪行為を覚えていたり、あるいは誰かに思い出させようとすることは、「規範」に反する行為となるでしょう。このような、「忘れること」の命令は、戦後のドイツの経済的な繁栄を実現しようとする欲望を背景とすることもあり、ジャンケレヴィッチはこのことも批判の根拠にしています。つまり、戦争中のユダヤ人たちはまったく異なる戦後の満ち足りた人々が、さらに豊かに、楽しく生活するために、ナチスの犯罪行為を忘れることを「規範化する」ということを、ジャンケレヴィッチは赦せなかったのでしょう。

ナチスは法を通して(合法的に)ユダヤ人を絶滅させようとしていました。「時効」、言い換えますと、ある種の法を通して「忘れること」を命ずること、ルサンチマンを抑え込もうとすることは、この「絶滅活動を補って完全なものにすること」(プリントの 18 番)に等しいと言えるでしょう。このような「絶滅活動」に対する、数少ない抵抗の方法がルサンチマンを持ち続けること、あるいはルサンチマンを保存していくことであると、ジャンケレヴィッチは主張しているようです。この主張は、今回の私たちのプログラムのテーマとの関わりでは、ルサンチマンの記憶を記録し続けてゆくことと言い換えられるでしょう。



高橋先生インタビュー

2011 年 6 月 5 日 駒場キャンパス 14 号館

遠隔講義ということもあり

質疑で終わってしまい討論ができなかったことが残念

飯田 今回の講義は、東日本大震災の問題のため、南京大学に赴くことが出来ず、遠隔講義になりました。先生がこのような講義形式で気を遣われたことは何でしょうか。

高橋 まず突然のことでしたので、学生さんが出席してくれるかが気がかりでした。しかし、それよりもこういうシステムを通して講義内容がどのくらい伝わるかが心配でした。そのためにも何とか知的好奇心を刺激し、質問を上手引き出すよう心がけました。

飯田 知的好奇心を刺激するという点についてですが、文理融合という LAP の要とも言えるべき理念がありますね。先生の講義はとても「文系」的なものでしたが、理系の学生に対する配慮は特にされたのでしょうか。

高橋 私が扱った赦し、和解、責任の問題は、人間であれば社会の一員として、また日本人、中国人として誰もが直面しなければならないものです。理系の学生さんでも興味を持ってくれると判断しました。

飯田 今回は遠隔講義の第 1 回目となりましたが、このシステムの改善点などございましたらお聞かせ下さい。

高橋 やはり質疑で終わってしまい、討論ができなかったことが残念ですね。それと講義で扱われる資料は、事前にきちんと読んできて欲しいですね。読んだ上で、資料の内容に関して漠然とでも自分の意見を持って講義に臨んで欲しい。そのためにも教員も早めにテーマと資料とを用意し、学生さんに伝えておくことも必要だと思います。

今回扱ったルサンチマンは哲学的な問題に結集する
このような一般的な次元でならば

被害者のルサンチマンを論じられるかもしれない

飯田 確かに、事前に配布資料を読み、ある程度内容を理解しておくことは必要なことですね。しかし他方で、今回の講義内容はやはり理解されにくい側面があったのではないのでしょうか。特にジャンケレヴィッチの語るルサンチマンに対しては、やはり否定的な意見もありました。かなり粗雑に「戦争の記憶」という言葉でまとめてしまうならば、いわゆる戦争のモニュメントなども、



ジャンケレヴィッチやジャン・アメリーのテキストと同様に、ルサンチマンの表象と言えるかもしれません。このモニュ

メントの場合、おそらく多くの人々がそのメッセージに共感するでしょう。ではなぜジャンケレヴィッチやジャン・アメリーの言うルサンチマンは、否定され易い傾向をもっているのでしょうか。

高橋 その理由は二つあると思います。一つは、ルサンチマンというものがとても個人的なものであるということです。ジャンケレヴィッチは、ルサンチマンを「おぞましさ(horreur)を強く感じる」と見なし、国家がホロコーストを忘れようとしていることに対する抵抗の手段としました。ところで、この「おぞましさを強く感じる」とは、本質的には被害者のみが加害者に対して持ち得るものでしょう。このような個人的な感情は、時が経つに連れて、ましてや次の世代に移るごとにどんどん消えてゆきます。自分たちのルサンチマンが消えてゆくという悲観的な、あるいは悲劇的な視点は、ジャン・アメリーの論考にもとてもよく見られますね。ジャン・アメリーの場合、ジャンケレヴィッチとは違い、加害者が自分のやってしまったことを本当の意味で理解し、悔いることを求めています。しかし、加害者を含む人々に対して、自分たちが被った事態の犯罪性を認めさせ、加害者がその責任を認めることに固執しなければならないと考えている点で、またこの固執の原動力こそがルサンチマンであると見ている点で、ジャンケレヴィッチとジャン・アメリーは一致しています。ところで、このような固執にこそ、ルサンチマンがなかなか受け容れられない二つ目の理由があるのではないのでしょうか。つまり、あの時代、あの行為の記憶にあくまで留まり続ける態度に、人は過剰なものを感じるのでしょう。そこまで付き合いきれないとね。

飯田 それは、あなたの繰り言には付き合いきれないという態度ですね。今回の講義では、そのようなルサンチマンを、ある意味で強烈に突きつけるものであったとも言えますね。このような場合、ルサンチマンの個人的な恨みの部分を避けるために、人は言うならば抽象的なレベルでこれを扱おうとするのではないのでしょうか。例えば、人類の記憶として考えるべきではという意見もありましたが、この「人類の」という部分に一種の抽象化が見られますね。

高橋 飯田君の言わんとしていることも分かります。しかし、抽象化が全部だめだとは思いません。今回の講義の背景には、今お話ししているルサンチマン、その他にも記憶や赦しについて、「それは何であるのか？」という問いが常にありました。これは哲学的な問いであり、この問いはその答えに対して抽象性あるいは一般性を求めています。そして、このような形で答えることは、ジャンケレヴィッチやジャン・アメリーの言うルサンチマンをきちんと理解し、人に伝える重要な方法なのです。ところで、今回はきちんと扱えませんでした。ジャンケレヴィッチ自身も赦しについて哲学的に論じた著作(『赦し』(1967))を書いています。この著作でジャンケレヴィッチは、「赦し」をいわゆる道徳的

なものを超えた恩寵に近いものとして扱っています。彼は、無条件の赦しこそが、真の赦しであると主張します。しかしそれでもなお、この赦しの至高性を超え出るような赦し得ないものとしての悪の問題が著作の最後で再び復活してしまいます。ここでジャンケレヴィッチは、ホロコーストのことを考えているとしか思えません。ジャンケレヴィッチは確かに赦しの思想家でもあります。が、赦しと赦し得ないものの拮抗関係をどうしても否定出来なかった。彼をこのような自己矛盾に陥らせているものこそが、おぞましさの感情としてのルサンチマンであるとも考えられます。今回扱ったルサンチマン、赦し、記憶は以上のような哲学的な問題へと結集してゆきます。このような一般的な次元でならば、もしかしたら私たちも被害者たちのルサンチマンを言葉で共有し、論じることができるかもしれません。

石井 高橋先生が今回行われたこのような哲学的な議論は、南京大学の学生の間でもとても反響がありました。

飯田 ドイツの戦争責任問題を前面に出すことによって、いわば間接的に日中間の戦後問題を扱ったわけですが、それでもやはり反響は大きかったのだですね。

高橋 私としてはヨーロッパ思想が専門なので、今回の講義は、やり易い面もありました。それにストレートに日中間の問題を扱ってもきちんと伝わらない場合もあります。特に私の場合、石井先生のように、具体的な聞き取り調査から得られた資料などを使わず、責任や赦しといった問題を抽象的に扱っているの、この点でも中国の学生に伝わりにくい部分があるのではないのでしょうか。

石井 むしろ、具体的な資料に関する講義と、さらに高橋先生のような議論とを総合的に行うことで、今回先生が扱われたテーマを多角的に考察することができるのではないのでしょうか。このテーマは南京の学生にとってもとても興味深いものであったわけですし、今後はプログラム内の様々な講義がお互いに補えれば、と私は考えています。

飯田 例えば、石井先生の聞き取り調査は、高橋先生が扱われた問題系とどのような形で接続出来るのでしょうか。

現在まで続く中国国内の戦争記憶の問題は 非常にデリケートなもの 講義で扱う場合は慎重に準備をする必要がある

石井 私は中国で年配の方たちを対象として、戦時中の日本の行動に関する聞き取り調査をしています。そうしますと、やはり戦中・戦後の記憶やルサンチマンの問題が、今回の高橋先生の扱われた問題に結びつきますね。ある地域でリサーチをしていたとき、意外に思えたのが彼らのルサンチマンの対象です。日本軍それ自体よりもむしろ、そのコラボレーター、漢奸に対してルサンチマンがあるようなのです。第二次世界大戦後、中国は日本と国交がなかったの、日本軍の残した問題を、

中国国内だけで処理することになりました。その中で標的になったのが日本軍のコラボレーターたちだったのです。例えば、日本軍がある村の人々を虐殺しようとした事件の場合、その村に内通者、つまり裏切り者を作り、その人が村の中に日本軍を引き入れることになります。戦後このような内通者は漢奸として裁判にかけられ、処刑されます。ところで、生き残った村人たちが、この大漢奸をどのように記憶しているのかといいますが、彼らの記憶は非常に複雑なのです。村人たちは言うのですよ、あの漢奸は、本当は悪人ではなかったのだと。ではなぜ彼は漢奸となったのか。戦時中、日本軍に対抗するために、共産党は各村に徴兵を命じました。誰も戦地に行きたくない中、村人たちは後に大漢奸となるその人にすべてを押し付け、戦場へと向かわせたのです。その戦いの中、彼は日本軍に投降します。そして今度は村に復讐しに戻ってきた。この復讐があの内通行為だったのだと、村人たちは言うのです。大漢奸に関するこのような記憶は、村人たちにとってとても苦いものです。しかし彼らが、この記憶を残し、伝えようとしていることも事実です。私の考えでは、村人たちは、大漢奸の記憶をこのように理解することによって、自分たちのコミュニティを善いものと見なそうとしている。つまり自分たちがこの大漢奸に対して行ったこと、彼の内通行為、そして戦後の漢奸裁判をどれも共同体の記憶として引き受け、それを今日まで残しているのです。ジャン・アメリーの言葉を借りれば、村人たちのこのような行為は、一つの「モラル」と呼べないでしょうか。現在まで続くこのような中国国内の戦争記憶の問題は、非常にデリケートなものです。ですから講義で扱う場合は、慎重に準備をする必要があります。

飯田 確かに。しかし、先生が今お話しになった問題は、高橋先生の講義テーマと直結する事例ですね。とはいえ、敢えて不謹慎な言い方をすれば、このような中国の一農村に見られる戦争の記憶やルサンチマンに、なぜ戦後世代の学生が付き合わなければならないのか。そういったものは、明るい未来のためにむしろ忘れられるべきではないのか。当然のことながら、今後、戦争記憶の問題を講義で扱う場合、この種の問いは常に付きまとうことになりますね。

石井 ええそうですね。しかし、繰り返しますが、日中両国の学生が、高橋先生の扱われたテーマに強い関心を持っている、あるいはたとえ持っていなくとも見ない振りにはできないということ確かです。ですから、今後もこのようなテーマを学生たちに考えてもらうことは大切なことだと思います。

飯田 時間になりましたので、今回のインタビューを終えたいと思います。先生方、長々とお付き合い頂き、有り難うございました。
(文責:飯田)

インタビュー

飯田 賢穂

(超域表象 D2/高橋先生回 TA 予定)

石井 弓

(特任講師/飯野・渡邊・廣瀬・渡邊・酒井・高橋先生回参加)

特設講演(南大)

特設講演

南京大学集中講義「記憶と記録」の期間中、南京大学において、LAPの主催によって4つの特設講演が開催されました。4名の講師がそれぞれの専門領域から研究分野の紹介を兼ねて、最新のテーマで講演を行いました。南京大全学を対象にした講演のため、さまざまな分野の学生が聴講し、大成功を収めました。英語や中国語による講演のほか、日本語による講演には、集中講義と同様、日本語科4年生が同時通訳を務めました。

「ヒトとチンパンジーのあいだ ―ヒトはどのように特別な類人猿か―」

2011年3月3日(木)



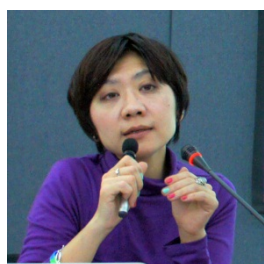
長谷川 寿一

1952年生。神奈川県出身。1974年、東京大学文学部心理学科卒。1984年、同大学院人文社会学研究科心理学専攻博士課程修了。文学博士。国際協力事業団派遣専門家、東京大学教養学部助手、帝京大学文学部助教授を経て、1991年より東京大学教養学部助教授、1999年より同大学院総合文化研究科教授。2011年より同研究科長・教養学部長。日本学術会議第21期会員。専門は、動物行動学、進化心理学。

(南京大学仙林キャンパスにて)

“Prohibited Memories, Fabricated Histories: Queer Negotiations with the National”(英語による)

2011年3月9日(水)



清水 晶子

東京大学大学院情報学環／総合文化研究科准教授。英文学修士(東京大学)、MA in Sexual Politics、PhD in Critical and Cultural Theory (University of Wales, Cardiff)。主な研究分野はフェミニズム／クィア理論。著書に *Lying Bodies: Survival and Subversion in the Field of Vision* (Peter Lang Pub Inc, 2008)。

(南京大学鼓楼キャンパスにて)

「アジア地域制度構築とASEANの役割変化」

2011年3月21日(月)



山影 進

1972年東京大学教養学部国際関係論分科卒業、1974年同大学院社会科学研究科修士課程修了。1974～1976年マサチューセッツ工科大学留学、京都大学東南アジア研究センターをへて、1980年東大教養学部助教授、82年マサチューセッツ工科大学より博士号取得。1991年東京大学大学院総合文化研究科教授。

(南京大学仙林キャンパスにて)

「电影形象和文化意识——微妙差异谈起」(中国語による)

2011年3月24日(木)



刈間 文俊

東京大学大学院総合文化研究科教授(表象文化論)。専門は、中国映画史、中国現代文芸。1983年東京大学文学部中国語中国文学科博士課程修了。1980年代以降の中国文芸に関心があり、新しい文化状況を追いかけるとともに、サイレント時代の中国映画にも魅力を感じている。これまでに中国映画の字幕を100本近く手がけてきた。

(南京大学鼓楼キャンパスにて)

編集後記

普段私たちが何気なく使っている「記憶」という言葉に、「記録」との対比によって新しい光を当てた今回の南京大学集中講義。文理の様々な分野の先生方の連続講義で、「記憶と記録」への様々な考え方を(偏りも含めて)比較しつつ聴くことができ、自分の専門を考え直す良い機会になりました。東京大学の学生は南京での全講義を聴くことはできないので、この報告集が全容を知る手掛かりになれば幸いです。一方で日本側にとって南京大学の学生の反応も気になるのですが、日本でつくる報告集にどこまで反映させられるか、少なくとも私の担当した紙面について言えば改善の余地はあったと思います。また先生方へのインタビューも担当しましたが、プロジェクトの進め方や学生の態度についてさすがに厳しい指摘があり、プログラムを続けていくうえで、常に意識の新鮮さを保っていく難しさを考えさせられました。最後になりましたが、南京大学集中講義への参加と、報告集作成の機会を与えて下さった LAP の先生方とスタッフの皆様、南京で共に過ごした学生の皆さん、ありがとうございました。(TA 杉谷 幸太)

2010 年の集中講義「身体論」に引き続き、今回は TA として講義に参加させていただきました。イギリス地域文化研究を専門とする自身にとって、中国研究を専門とするスタッフの方々、クア研究や日本史、オーラル・ヒストリーといった多様な分野を研究する先生方、そして南京大学の学生さんたちと議論する場が持てたことは、大きな刺激になりました。異なる専門領域、異なる年齢、そして異なる国籍といったように、多様な背景を持ったメンバーが、南京大学で一つの場を作り出していくプロセスこそが、まさに集中講義の魅力と言えるのではないのでしょうか。毎年進化を続ける集中講義ですが、今後とも運営・交流の場に関わっていければ幸いです。LAP スタッフの皆様、そして石井先生、この半年間ありがとうございました。(TA 若澤 佑典)

集中講義「記憶と記録」は、私にとって正規スタッフとして参加する初めての集中講義になった。テーマ的にも形式的にもユニークな集中講義に、立案の最初の段階から関わることで、講義を通じて様々な研究手法や考え方に触れる驚きに加え、企画運営などの方面にも新たな面白味を見出すことができ、非常に良い経験になった。一方で今回は、期間中に東日本大震災という未曾有の大災害に見舞われた。私は地震発生の翌々に南京に発つことになり、プログラムの進行自体が危ぶまれる中、規模を縮小しつつも、何とか最大限の効果をあげるための試行錯誤に加わる中で、教育プログラム運営の在り方や、危機管理との関係などについても深く考えさせられることになった。今回の集中講義の成果を基礎に、秋には東大でテーマ講義「記憶と記録」が開講される。渡邊正男先生のインタビューなどで物足りないと言われた、教員間のつながりについては、酒井邦嘉先生の案で、複数の教員による討論形式の講義を数回ごとに挟むことを試みる。それがどのような効果をもたらすのか、集中講義「記憶と記録」報告集でご報告できるのを楽しみにしている。

(特任研究員 赤木 夏子)

「記憶と記録」では、集中講義の講師を初めて担当した。南京の学生さんに日中戦争の記憶の話をして理解してもらえらるだろうかと、ドキドキしながら講義に臨んだが、結果、日本で話すよりもむしろ大きな反響があった。彼らが興味を持つのは、南京で日本語を学ぶ学生さんたちが様々な場面で戦争の問題に直面しているからではないかと、複雑な心境になった。真剣に考える姿勢は、東大の学生さんたちにも学んでもらいたい。今回の講義は、3.11 大震災の影響で第 3 週の学生派遣を取りやめにせざるを得なかった。それでも講義はウェブ中継によって最後まで続け、東大、南京大の学生さんたちも、集中力を切らさずに参加してくれた。報告集には詳しく書かれていないが、現場では大きな事件だったことを付け加えておきたい。講義が終わってほっとした時、震災が一人ひとりの記憶に浸透し、日本社会の雰囲気はどんよりしていた。一つの事件がこれだけ広く社会全体に記憶される(共有される)感覚を、初めて肌で感じた。

(特任講師 石井 弓)